

第38集

日高市埋蔵文化財調査報告書 第38集

西不動
―1・2次調査―

西 不 動

― 1・2次調査 ―

日高市遺跡調査会

2018

埼玉県日高市遺跡調査会

あ い さ つ

日高市は埼玉県南西部に位置し、埼玉県を代表する清流高麗川が流れ、緑も多く自然に恵まれた住環境にあります。文化財につきましても、先人が長い年月をかけて築きあげた歴史や文化が数多くあります。とくに「続日本紀」に記述されている霊亀二年、西暦716年の高麗郡設置は当市の大きな出来事であり、平成28年には建郡1300年を迎えました。

しかし近年、土地区画整理事業に伴う市街化の整備や首都圏中央連絡自動車道の開通など急激に都市化が進み、先人の生活や文化を伝える埋蔵文化財の保護、保存が急務となっております。当市では開発に伴って緊急発掘調査を行い、記録保存の処置を講じております。

今回刊行する報告書は、平成27年度、平成29年度に調査しました西不動遺跡の成果をまとめたものです。

本書が郷土資料、学術資料として広く活用され、郷土愛そして文化財保護の向上に役立てば幸いです。

発掘調査そして報告書の刊行にあたり、ご協力いただきました特定非営利活動法人ぶどうの樹をはじめ、文化庁、埼玉県教育委員会、多くの市民の皆さま、発掘調査に従事いただいた方々に厚く御礼申し上げます。

平成31年2月

日高市遺跡調査会
会長 新井孝重

例 言

- 1 本書は埼玉県日高市大字高萩に所在する西不動遺跡（138遺跡）1次、2次調査の調査報告書である。
- 2 発掘調査は、福祉作業所建設に伴い特定非営利活動法人ぶどうの樹から委託を受けて日高市遺跡調査会が実施した。
- 3 調査期間は、1次調査が平成27年12月3日から平成28年2月22日、2次調査は平成29年7月10日から平成29年7月20日である。
- 4 発掘調査の届出に対する埼玉県教育委員会の指示通知は、1次調査が平成27年12月14日付教生文発第2-46号、2次調査が平成29年7月7日付教生文発第3-19号である。
- 5 発掘調査、資料整理及び調査報告書作成は松本尚也が担当した。
- 6 挿図図版の縮尺は、それぞれのキャプションに明記した。挿図中の遺物番号と写真図版番号は一致する。
- 7 拓本、トレース、遺物実測は松本尚也、新井敏子、長部孝子、勝山敏江、倉本信代、田中ひさ子、渡辺敬子が行い、図版作成、遺物写真撮影は松本尚也が行った。
- 8 本書の執筆、編集は松本尚也が行った。
- 9 石質の鑑定は、埼玉県立川越南高等学校教諭田口聡史氏にお願いした。
- 10 調査組織

| | | | |
|-------|----------------------------|--------|--|
| 調査主体者 | 日高市遺跡調査会 | | |
| 会長 | 新井孝重（日高市文化財保護審議委員長） | | |
| 副会長 | 野村泰平（日高市教育委員会教育部長） | 平成27年度 | |
| | 関口正明（日高市教育委員会教育部長） | 平成29年度 | |
| | 吉野靖彦（日高市教育委員会教育部長） | | |
| 理事 | 高麗文康（日高市文化財保護審議委員） | | |
| | 新井敏子（日高市文化財保護審議委員） | | |
| 監事 | 新井 聡（日高市文化財保護審議委員） | | |
| | 野川康雄（日高市文化財保護審議委員） | | |
| 事務局長 | 中平 薫（日高市教育委員会生涯学習課副参事） | 平成27年度 | |
| | 関根俊介（日高市教育委員会生涯学習課長） | 平成29年度 | |
| | 駒井 実（日高市教育委員会生涯学習課長） | | |
| 事務局員 | 松本尚也（生涯学習課文化財担当主査） | 平成27年度 | |
| | 〃（生涯学習課文化財担当主幹） | 平成29年度 | |
| | 早川修司（生涯学習課文化財担当主査） | | |
| 調査担当者 | 中平 薫（日高市教育委員会生涯学習課副参事） | 平成27年度 | |
| | 松本尚也（日高市教育委員会生涯学習課文化財担当主査） | 平成27年度 | |
| | 〃（日高市教育委員会生涯学習課文化財担当主幹） | | |
| | 早川修司（日高市教育委員会生涯学習課文化財担当主査） | | |
| | 中平 薫（日高市教育委員会生涯学習課主任） | | |

11 発掘調査及び資料整理作業員

| | | | | | | | |
|-------|------|------|------|------|-------|-------|-------|
| 調査作業員 | 新井敏子 | 岡野芳美 | 加治由行 | 勝山敏江 | 小嶋信子 | 田中ひさ子 | 土屋八重子 |
| | 本間博子 | 森稔子 | 渡辺敬子 | | | | |
| 資料整理 | 新井敏子 | 長部孝子 | 勝山敏江 | 倉本信代 | 田中ひさ子 | 渡辺敬子 | |

目 次

あいさつ

例 言

| | |
|-----------------|----|
| 第1章 遺跡の立地と環境 | 1 |
| 1：立地と環境 | 1 |
| 2：調査経過 | 4 |
| 第2章 西不動遺跡－1次調査－ | 6 |
| 1：遺構外出土遺物 | 6 |
| 2：J－1号住居址 | 8 |
| 3：J－2号住居址 | 17 |
| 4：J－3号住居址 | 19 |
| 5：J－4号住居址 | 22 |
| 6：J－5号住居址 | 26 |
| 7：J－6号住居址 | 30 |
| 8：J－7号住居址 | 32 |
| 9：1号竪穴状遺構 | 33 |
| 10：1号埋甕 | 34 |
| 11：2号埋甕 | 35 |
| 12：3号埋甕 | 36 |
| 13：4号埋甕 | 37 |
| 14：5号埋甕 | 37 |
| 15：1号土壙 | 38 |
| 16：2号土壙 | 38 |
| 17：3号土壙 | 38 |
| 18：4号土壙 | 43 |
| 19：5号土壙 | 43 |
| 20：6号土壙 | 43 |
| 21：7号土壙 | 43 |
| 22：8号土壙 | 44 |
| 23：H－1号住居址 | 47 |
| 第3章 西不動遺跡－2次調査－ | 49 |
| 1：遺構外出土遺物 | 49 |
| 2：9号土壙 | 49 |
| 第4章 まとめ | 52 |
| 1：遺構の時期について | 52 |
| 2：三角壻形土製品について | 54 |

挿 図 目 次

| | |
|---|--|
| <p>1 遺跡位置図 …………… 2</p> <p>2 西不動遺跡周辺地形図…………… 4</p> <p>3 西不動遺跡1次、2次調査区全測図…………… 5</p> <p>4 遺構外出土遺物 …………… 7</p> <p>5 J-1号住居址…………… 8</p> <p>6 J-1号住居址遺物出土状況図…………… 9</p> <p>7 J-1号住居址炉…………… 10</p> <p>8 J-1号住居址出土遺物(1) …………… 11</p> <p>9 J-1号住居址出土遺物(2) …………… 12</p> <p>10 J-1号住居址出土遺物(3) …………… 13</p> <p>11 J-1号住居址出土遺物(4) …………… 14</p> <p>12 J-1号住居址出土遺物(5) …………… 15</p> <p>13 J-1号住居址出土遺物(6) …………… 16</p> <p>14 J-2号住居址…………… 18</p> <p>15 J-2号住居址炉…………… 19</p> <p>16 J-2号住居址出土遺物…………… 20</p> <p>17 J-3号住居址…………… 21</p> <p>18 J-3号住居址炉…………… 22</p> <p>19 J-3号住居址出土遺物…………… 23</p> <p>20 J-4号住居址…………… 24</p> <p>21 J-4号住居址炉…………… 24</p> <p>22 J-4号住居址出土遺物…………… 25</p> <p>23 J-5号住居址…………… 26</p> <p>24 J-5号住居址炉…………… 27</p> <p>25 J-5号住居址出土遺物…………… 28</p> <p>26 J-6号住居址…………… 29</p> <p>27 J-6号住居址炉…………… 29</p> | <p>28 J-6号住居址出土遺物…………… 30</p> <p>29 J-7号住居址…………… 31</p> <p>30 J-7号住居址炉、出土遺物…………… 32</p> <p>31 1号竪穴状遺構…………… 33</p> <p>32 1号竪穴状遺構出土遺物…………… 34</p> <p>33 1号埋甕、出土遺物…………… 35</p> <p>34 2号埋甕、出土遺物…………… 36</p> <p>35 3号埋甕、出土遺物…………… 36</p> <p>36 4号埋甕、出土遺物…………… 37</p> <p>37 5号埋甕、出土遺物…………… 37</p> <p>38 1号土壙、出土遺物…………… 39</p> <p>39 2、4号土壙、出土遺物…………… 39</p> <p>40 3号土壙…………… 40</p> <p>41 3号土壙出土遺物(1) …………… 41</p> <p>42 3号土壙出土遺物(2) …………… 42</p> <p>43 5号土壙、出土遺物…………… 44</p> <p>44 6、7、8号土壙、出土遺物…………… 45</p> <p>45 H-1号住居址…………… 46</p> <p>46 H-1号住居址カマド…………… 47</p> <p>47 H-1号住居址出土遺物…………… 48</p> <p>48 遺構外出土遺物…………… 50</p> <p>49 9号土壙、出土遺物…………… 51</p> <p>50 土器変遷図…………… 53</p> <p>51 埼玉県出土・縄文施文の三角罎形土製品 …… 55</p> <p>52 三角罎形土製品(1) …………… 56</p> <p>53 三角罎形土製品(2) …………… 57</p> |
|---|--|

図 版 目 次

| | |
|---|--|
| <p>図版1 1次調査区全景 三角罎形土製品出土状況 J-1号住居址 J-1号住居址炉 J-2号住居址 J-2号住居址炉 J-3号住居址 J-3号住居址炉</p> <p>図版2 J-4号住居址 J-4号住居址炉 J-5号住居址 J-5号住居址炉 J-6号住居址 J-6号住居址炉 J-7号住居址 J-7号住居址炉</p> <p>図版3 1号竪穴状遺構 H-1号住居址 H-1号住居址カマド 1号埋甕 2号埋甕 3号埋甕 4号埋甕 5号埋甕</p> <p>図版4 1号土壙 2号土壙 3号土壙 4号土壙 5号土壙 6号土壙 7号土壙 8号土壙</p> <p>図版5 1次調査区遺構外出土遺物 J-1号住居址出土遺物(1)</p> | <p>図版6 J-1号住居址出土遺物(2) J-2号住居址出土遺物 J-3号住居址出土遺物</p> <p>図版7 J-4号住居址出土遺物 J-5号住居址出土遺物 J-6号住居址出土遺物 1号竪穴状遺構出土遺物</p> <p>図版8 1号埋甕出土遺物 2号埋甕出土遺物 3号埋甕出土遺物 4号埋甕出土遺物 5号埋甕出土遺物</p> <p>図版9 2号土壙出土遺物 3号土壙出土遺物 5号土壙出土遺物 H-1号住居址出土遺物</p> <p>図版10 2次調査区全景 9号土壙遺物出土状況 9号土壙 2次調査区遺構外出土遺物 9号土壙出土遺物</p> |
|---|--|

第1章 遺跡の立地と環境

1：立地と環境

日高市は埼玉県南西部の山地と丘陵地の境界に位置し、首都圏50kmにあたる。市の西部には外秩父山地の東縁が広がり、山地の縁辺部に八王子構造線が南北に走っている。外秩父山地からは北に毛呂山丘陵、南に高麗丘陵が舌状に東へ張り出している。市の南北はこの2つの丘陵により画されている。奥武蔵正丸峠付近の山々を源とする高麗川は市の西部から北辺を小さな蛇行を繰り返しながら東流し、高麗丘陵との間に扇状の沖積地を形成している。高麗川から東方の右岸を坂戸台地と呼び、市の平坦部はこの坂戸台地に位置している。坂戸台地は市西部の高麗本郷付近を扇頂とする古い扇状地形で、高麗丘陵を源とする小畔川をはじめとした多くの小河川により小支谷が形成されている。

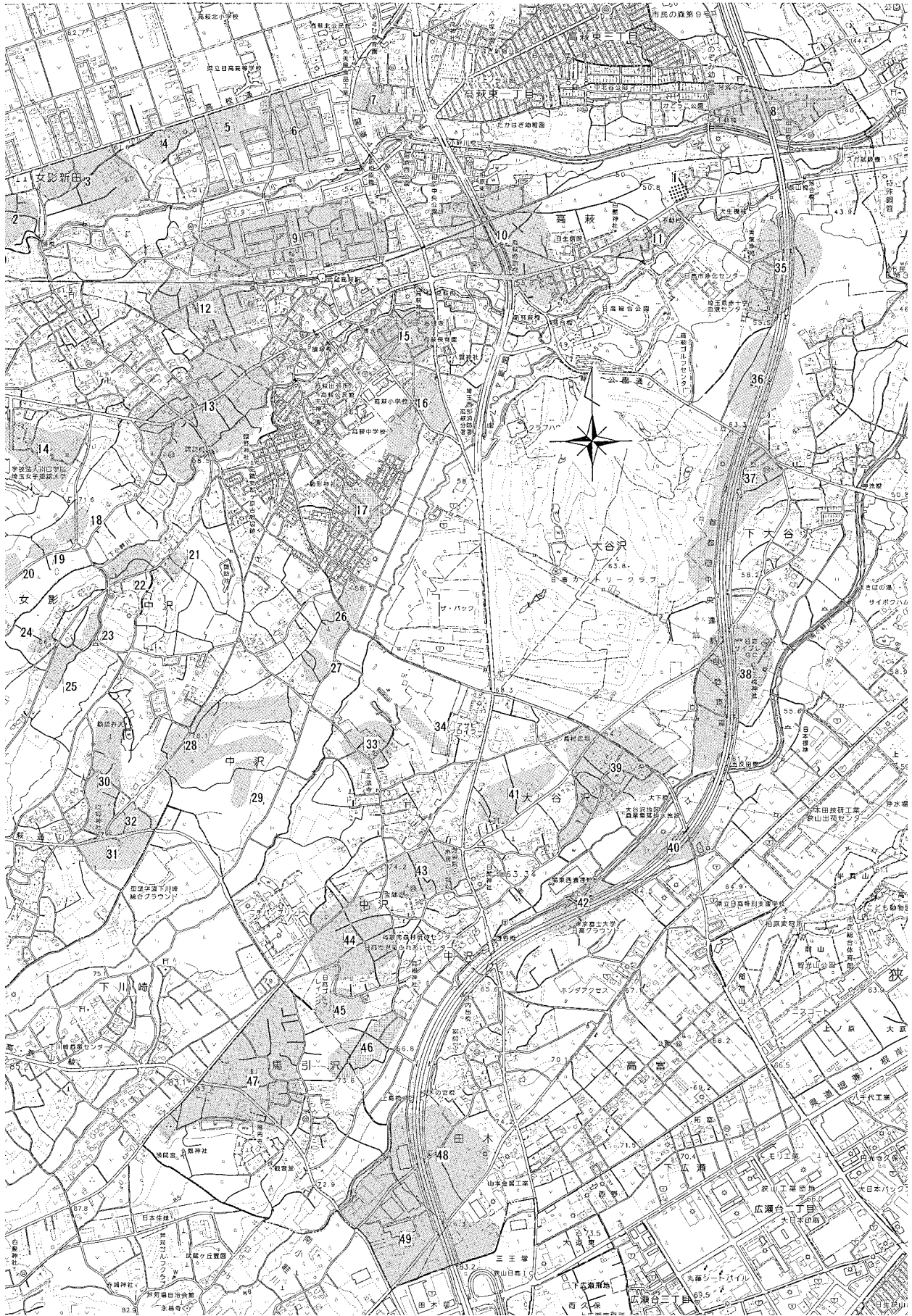
市西部の高麗地区は、高麗川が大きく蛇行している巾着田をはじめ、山地は奥武蔵自然公園に指定されており多くの自然が残っている。市中央部の高麗川地区は高麗川駅西口土地区画整理事業が終了し、市東部の高萩地区でも武蔵高萩駅北土地区画整理事業、寺脇土地区画整理事業や首都圏中央連絡自動車道の開通により都市化が進み景観が大きく様変わりしている。

当市の遺跡立地を考えると、高麗川や高麗丘陵を源とする幾筋もの小畔川、そして南小畔川の流れて沿って遺跡が連なっている。各河川流域の遺跡の密度は濃く、旧石器時代の遺跡も確認され、縄文時代になると遺跡数が増大する。遺跡は概ね河川近くの台地に立地し、水の確保が容易な場所に築かれている。市内には沖積地の発達した地域が少ないためか弥生時代の遺跡は確認されていない。古墳時代の遺跡も僅かに2ヶ所確認されているだけで、まったくの空白期といえる。奈良時代になると、霊亀二年(716年)に日高、飯能両市にまたがる地域を中心に高麗郡が建郡され、それ以降集落は爆発的に増え続け平安時代に興隆期を迎える。これらのことが当市の歴史の大きな特徴である。

縄文時代中期

西不動遺跡(1)の南北には高麗丘陵を源とする小畔川と下小畔川が流れ、下流で下小畔川が北を流れる小畔川に合流している。遺跡は両河川に挟まれた台地の東端、下小畔川左岸に位置している。小畔川、下小畔川、第二小畔川及び市の東部を流れる南小畔川流域には縄文時代の遺跡が点在している。西不動遺跡の西500mには宿東遺跡が位置する。宿東遺跡(10)は小畔川、下小畔川や第二小畔川の合流地点に広がる市内最大の集落遺跡で、これまでに勝坂期から後期初頭までの住居址200軒以上を検出している。下小畔川、第二小畔川流域には堀ノ内遺跡(9)、西佛遺跡(30)、森ノ腰遺跡(31)、寺脇遺跡(15)、谷津前遺跡(16)、北中沢遺跡(17)、向原遺跡(28)が所在している。堀ノ内遺跡は宿東遺跡の西300mに位置し、土地区画整理事業に伴う発掘調査で勝坂期から加曽利E期の住居址24軒を検出している。下小畔川を挟んで宿東遺跡の対岸に位置する寺脇遺跡では、加曽利EⅢ期から後期初頭の柄鏡形住居址を含む住居址7軒などを検出している。下小畔川から分流する第二小畔川流域に位置する谷津前遺跡でも中期末葉から後期初頭の柄鏡形住居址2軒を、北中沢遺跡では加曽利EⅠからEⅢ前半期の住居址13軒などを検出している。西佛遺跡、森ノ腰遺跡は下小畔川右岸に位置する。遺構の分布から両遺跡は同一集落と考えられ、西佛遺跡では柄鏡形住居址を含む勝坂期から後期初頭の住居址15軒、森ノ腰遺跡では加曽利EⅢ前半期の住居址4軒を調査している。

南小畔川流域の二反田遺跡(38)では加曽利EⅠからEⅡ期の住居址13軒、二反田遺跡から沢を挟んだ



第1図 遺跡位置図 (1/20,000)

南西に位置する宮久保遺跡（39）でも加曽利E期の住居址4軒を検出した。さらに上流域では、勝坂期から加曽利EⅢ期の住居址80軒以上を検出した上原遺跡（48）、向原遺跡（49）が所在している。

奈良・平安時代

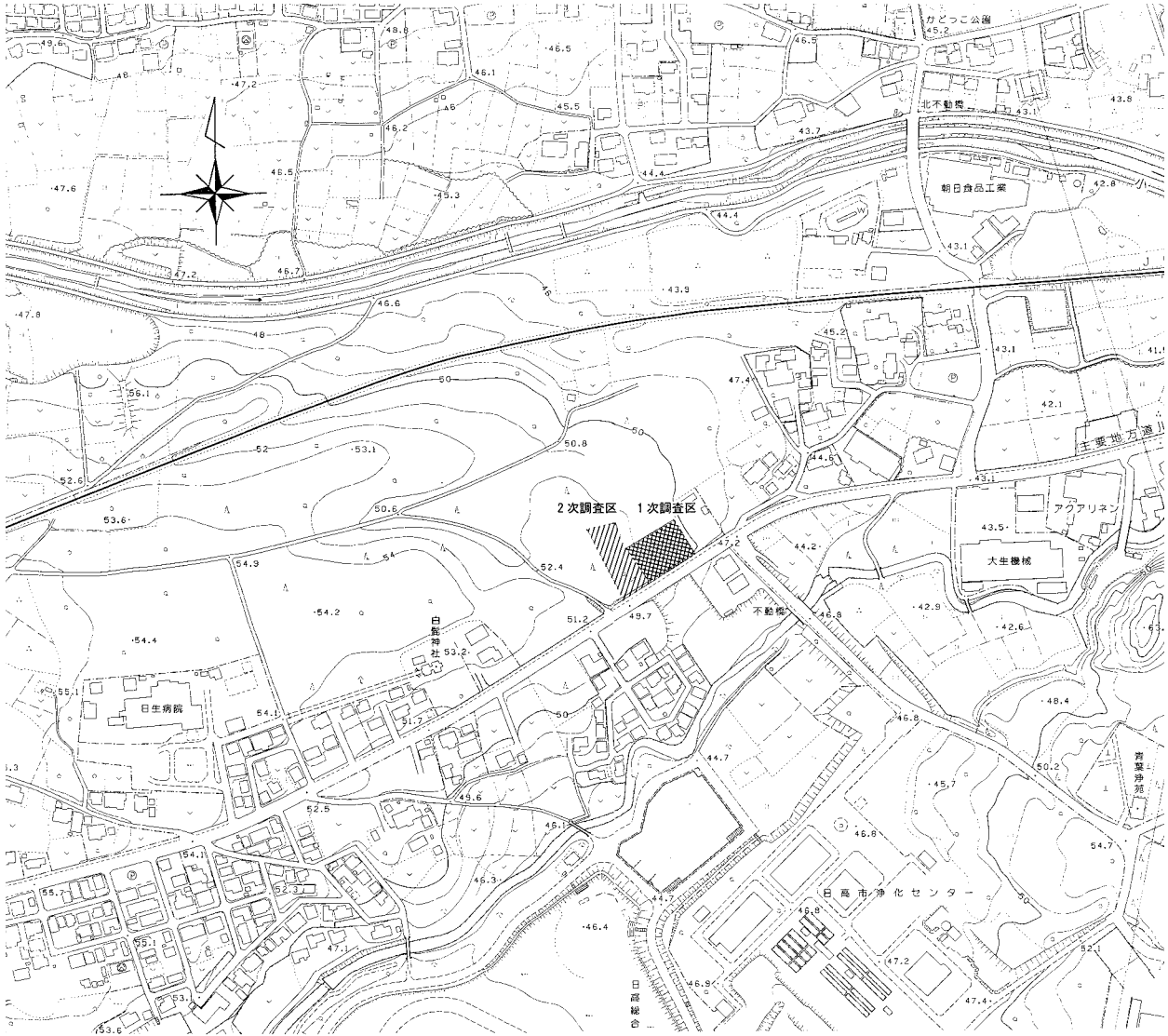
小畔川左岸には、大黒ヶ谷戸遺跡（2）、道光林遺跡（3）、中王神遺跡（4）、王神遺跡（5）、拾石遺跡（6）、新宿遺跡（7）が所在している。大黒ヶ谷戸遺跡では8世紀後半から9世紀中葉の住居址が2軒、道光林遺跡では8世紀前半の住居址3軒が調査されている。中王神遺跡でも住居址を2軒検出している。王神遺跡では8世紀中葉から9世紀前半の住居址8軒、井戸址3基、道路遺構1条、水路遺構1条、東西5間×南北4間で中柱を持つ建物跡1棟の調査を行った。住居址覆土からは鳥形硯の蓋の一部が出土した。関東地方での出土例はなく、近隣では長野県塩尻市菖蒲沢窯跡から出土している。拾石遺跡は8世紀中葉から9世紀後半の住居址46軒、井戸址14基、道路遺構1条、水路遺構2条、掘立柱建物跡6棟を調査し、耳皿、石製巡方、石製丸軛、漆紙などの特殊な遺物や、「厨」、「家長」、「南家」、「貞」、「坏」、「田」、「万」などの墨書土器も出土している。道路遺構、水路遺構は王神遺跡と同一の遺構である。新宿遺跡では8世紀中葉から9世紀後半の住居址11軒を検出している。「山本」と書かれた墨書土器は、貞観十四年（872年）の『貞観寺田地目録帳』（仁和寺文書）に出てくる武蔵国高麗郡山本荘との関連資料として注目される。

小畔川右岸には堀ノ内遺跡（9）が所在している。これまでに8世紀中葉から9世紀中葉の住居址156軒、井戸址99基、掘立柱建物跡54棟、溝60条などが調査されている。住居址には小鍛冶遺構を有するものもあった。これらの遺構が台地縁辺部から遺跡南側の下小畔川に向かう緩斜面にかけて、いくつかのまとまりを持ちながら所在している。住居址軒数からも市内最大の奈良・平安時代の遺跡である。出土遺物も耳皿、銅製巡方、石製丸軛、漆紙、皇朝十二銭の「隆平永宝」や紡錘車、鎌、斧などの鉄製品のほかに、「仲」などが書かれた墨書土器など多くの遺物が出土している。若宮遺跡（13）は下小畔川左岸に位置している。若宮遺跡は遺跡の中を伝承鎌倉街道が南北に貫き、8世紀前半に建立されたとされる女影廃寺を含んでいる。この他に下小畔川左岸には小河原遺跡（14）、上敷遺跡（18）（19）、姥ヶ原遺跡（20）が、右岸には金子ヶ谷戸遺跡（21）、上ノ条遺跡（23）（24）（25）が所在する。

市の東部には飯能市の高麗丘陵南麓を源とする南小畔川が流れ、宮久保遺跡（39）、下向山遺跡（40）、二反田遺跡（38）が所在している。下向山遺跡では9世紀の住居址3軒を調査している。下向山遺跡の対岸に所在する宮久保遺跡では、8世紀後半から9世紀の住居址10軒や掘立柱建物跡7棟が検出されている。二反田遺跡では8世紀前半の土師器坏を伴う住居址を検出している。上猿ヶ谷戸遺跡（8）は川越市境、南小畔川下流の小畔川流域に位置し、これまでに奈良・平安時代の住居址4軒を検出した。また首都圏中央連絡自動車道の建設に伴う公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団による調査で7世紀中葉から8世紀後半の住居址56軒、掘立柱建物跡40棟などを検出している。

遺跡一覧

1 西不動遺跡（縄文中期、奈良） 2 大黒ヶ谷戸遺跡（奈良・平安） 3 道光林遺跡（奈良・平安） 4 中王神遺跡（奈良・平安）
5 王神遺跡（奈良・平安） 6 拾石遺跡（縄文早期、奈良・平安） 7 新宿遺跡（奈良・平安） 8 上猿ヶ谷戸遺跡（古墳、奈良・平安）
9 堀ノ内遺跡（縄文中期、奈良・平安、中世） 10 宿東遺跡（縄文中・後期） 11 宮ノ前遺跡（縄文中期） 12 古道遺跡（奈良・平安）
13 若宮遺跡（奈良・平安） 14 小河原遺跡（奈良・平安） 15 寺脇遺跡（縄文中・後期） 16 谷津前遺跡（縄文中、後期、平安） 17
北中沢遺跡（縄文中期） 18、19 上鋪遺跡（奈良・平安） 20 姥ヶ原遺跡（平安） 21 金子ヶ谷戸遺跡（縄文、平安） 22 昔田遺跡（縄文）
23、24、25 上ノ条遺跡（縄文、平安、中世） 26 東方遺跡（縄文、平安） 27 関場遺跡（縄文） 28 向原遺跡（縄文中・後期、平安）
29 柳久保遺跡（平安） 30 西佛遺跡（縄文中期） 31、32 森ノ腰遺跡（縄文中期） 33 宿方遺跡（縄文中期、平安） 34 向谷遺跡（平安）
35 長山甲遺跡（縄文中期） 36 西ノ久保遺跡（縄文後期） 37 谷津遺跡（奈良・平安） 38 二反田遺跡（縄文中期、奈良・平安） 39
宮久保遺跡（縄文中期、奈良・平安） 40 下向山遺跡（奈良・平安） 41 新屋敷遺跡（縄文早・中期、平安） 42 向山遺跡（縄文早・中
期） 43 下宿遺跡（縄文早・中・後期、平安） 44 西原遺跡（平安、中世） 45 上沢遺跡（平安、中世） 46 上沢台遺跡（平安） 47 北
ノ原遺跡（奈良・平安） 48 上原遺跡（縄文中期） 49 向原遺跡（縄文中期）



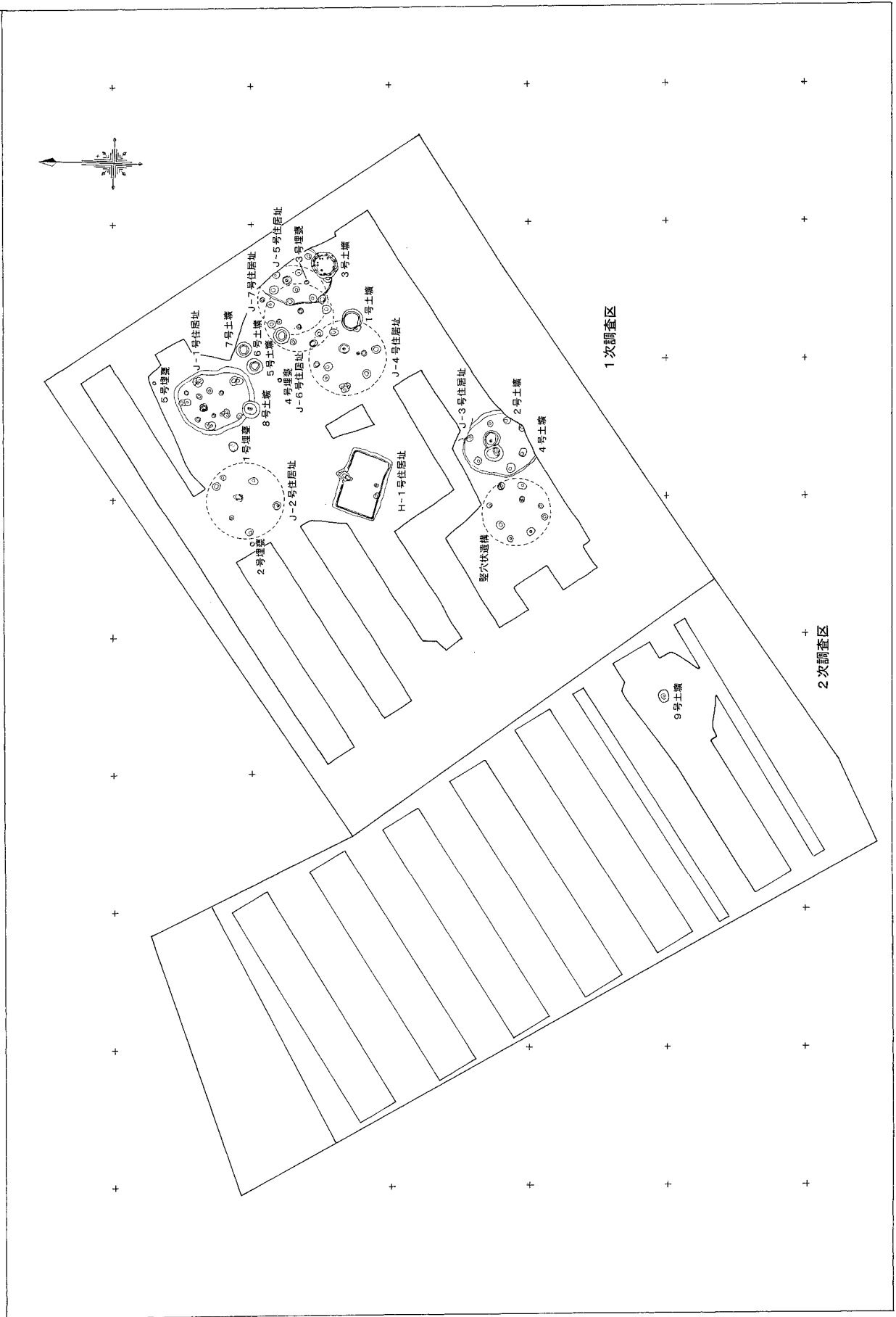
第2図 西不動遺跡周辺地形図 (1/5,000)

2：調査経過

西不動遺跡は市の東部、小畔川と下小畔川に挟まれた東西に長い台地の東端に位置し、標高は55mである。遺跡の東側から南側は下小畔川への傾斜面となる。

1次調査を実施した地点は山林で、所在は埼玉県日高市大字高萩字西不動1841番2である。調査面積は1,212㎡である。福祉作業施設建設に伴い平成27年12月3日から平成28年2月22日に調査を実施した。調査区東西に幅2.5mトレンチを5本設定し、遺構確認面である暗茶褐色ローム層まで55～70cm掘り下げた。調査区中央から東側で縄文時代中期後半の住居址7軒、竪穴状遺構1基、土壇8基、埋甕5基、奈良時代の住居址1軒を検出した。

2次調査を実施した地点は山林で、福祉作業施設建設に伴うものである。所在は埼玉県日高市大字高萩字西不動1843-1である。調査面積は940㎡である。調査は平成29年7月10日から7月20日に実施した。調査区東西に幅3mトレンチ6本、幅1mトレンチ2本を設定し、遺構確認面である暗黄褐色ローム層まで50～60cm掘り下げた。調査区南側で縄文時代中期後半の土壇1基を検出した。



第3図 西不動遺跡1次、2次調査区全測図 (1/400)

第2章 西不動遺跡 - 1次調査 -

1：遺構外出土遺物

縄文時代中期中葉土器（第4図1・図版5-1）

1は胴部下端から底部の破片である。区画文の一部と思われる2条一対の隆帯に沿って、三角押文が施されている。

縄文時代中期後半土器（第4図2～7）

2、3は地文に縄文を施す口縁部である。2は縄文を施文した1条の隆帯が横走及び垂下している。3は2条一対の沈線による逆「U」字状文を施し、区画内に沈線による波状文が垂下している。

4～6は地文に縄文を施す胴部破片である。4は磨消縄文間に、沈線による「J」字文が施されている。5は磨消縄文が弧状に垂下する。7は1条の沈線による逆「U」字状文が垂下する。

石器

打製石斧（第4図8～11）

8は撥形を呈する。基部を欠損している。両側縁に調整剥離を施している。長さ13.2cm、幅5.1cm、重さ76gをはかる。石質は黒色片岩である。

9～11は分銅形を呈する。9の刃部は片側の磨滅が顕著にみられる。10は両側縁及び基部に調整剥離を施している。11は両側縁及び基部に調整剥離を施している。9は長さ12.5cm、幅5.1cm、重さ160g、10は長さ10.2cm、幅5.2cm、重さ94g、11は長さ9.7cm、幅4.9cm、重さ106gをはかる。石質は9、10がホルンフェルス、11が砂岩である。

磨製石斧（第4図12）

12の各面は角を持つように整形され、磨きも顕著である。刃部は片側のみ剥離が見られる。残存長8.5cm、幅3.6cm、重さ86gをはかる。石質は緑色岩である。

石皿（第4図13）

13の凹面は人為的に面取りされ大きく窪み、良く使い込まれている。裏面に多数の窪みを有している。石質は緑色片岩である。

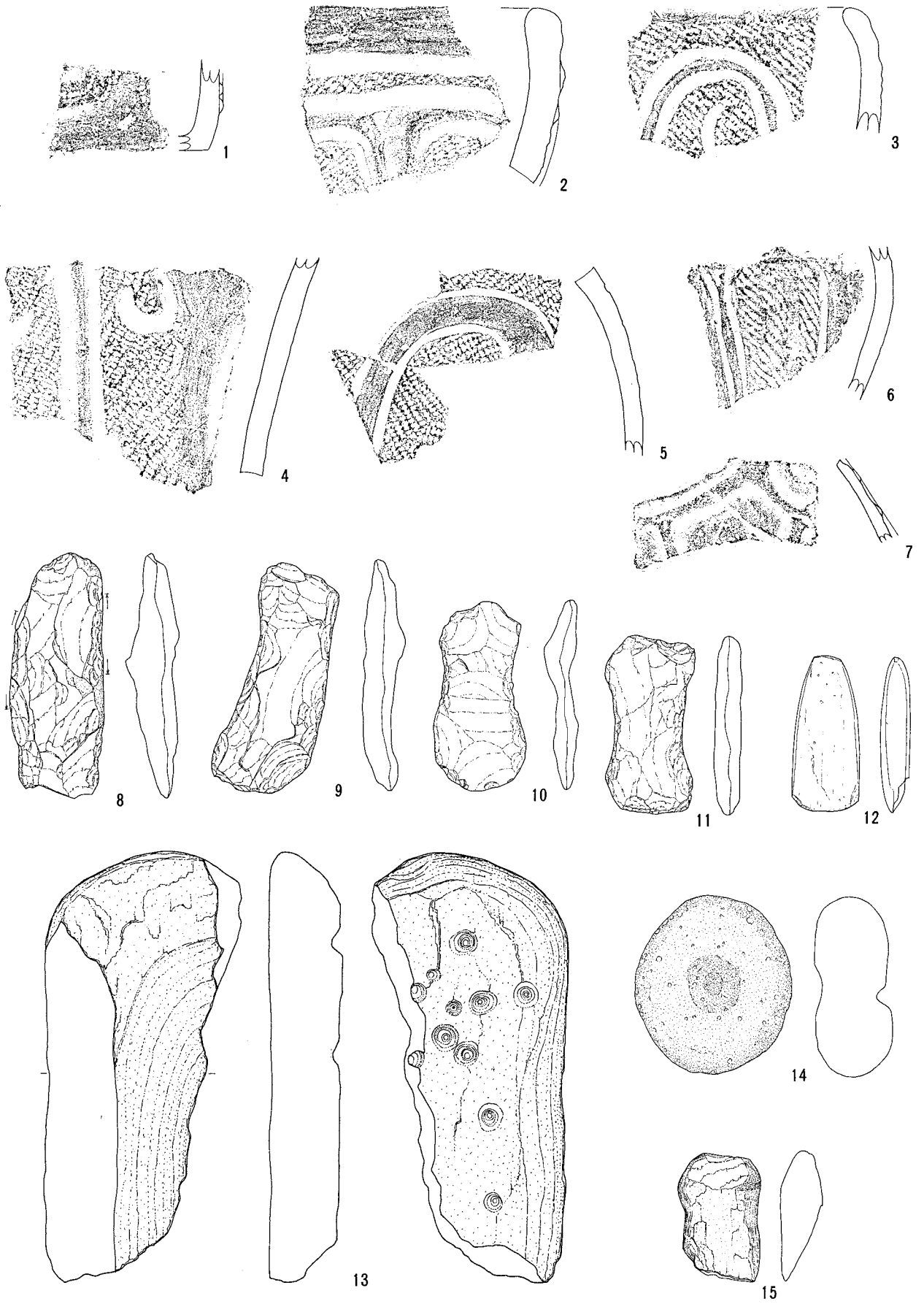
磨石（第4図14・図版5-2）

14は両面に磨痕がみられ、表裏に1箇所のみ窪みを有する。径9.7cm、幅8.4cm、重さ468gをはかる。石質は石英閃緑岩である。

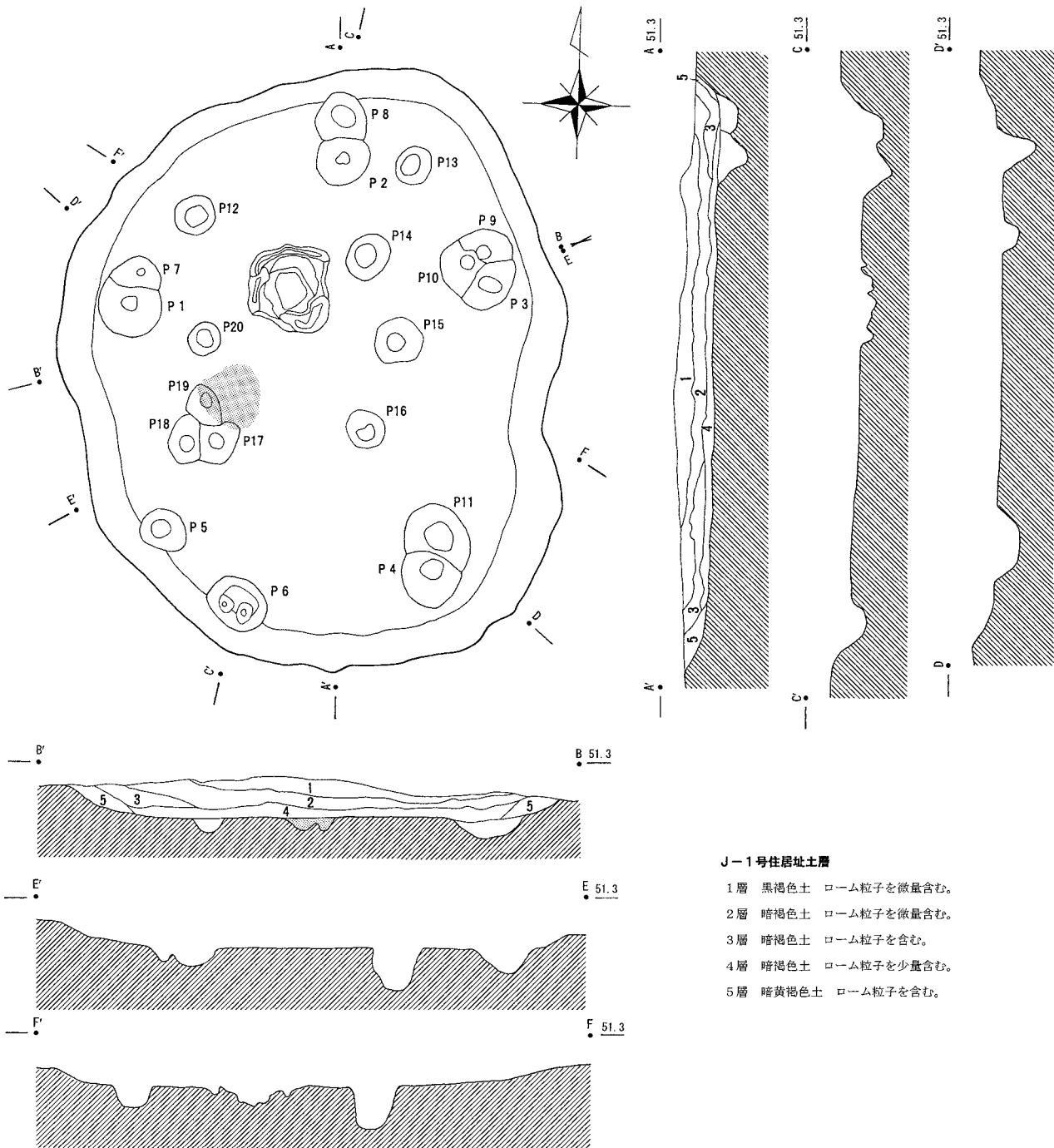
石製品

石棒（第4図15・図版5-3）

15は頭部の破片と思われる。表面は磨かれている。頸部は敲打と調整剥離により抉りを作成し、研磨している。石質は緑色片岩である。



第4図 遺構外出土遺物 (1/3) 但し、13は (1/4)

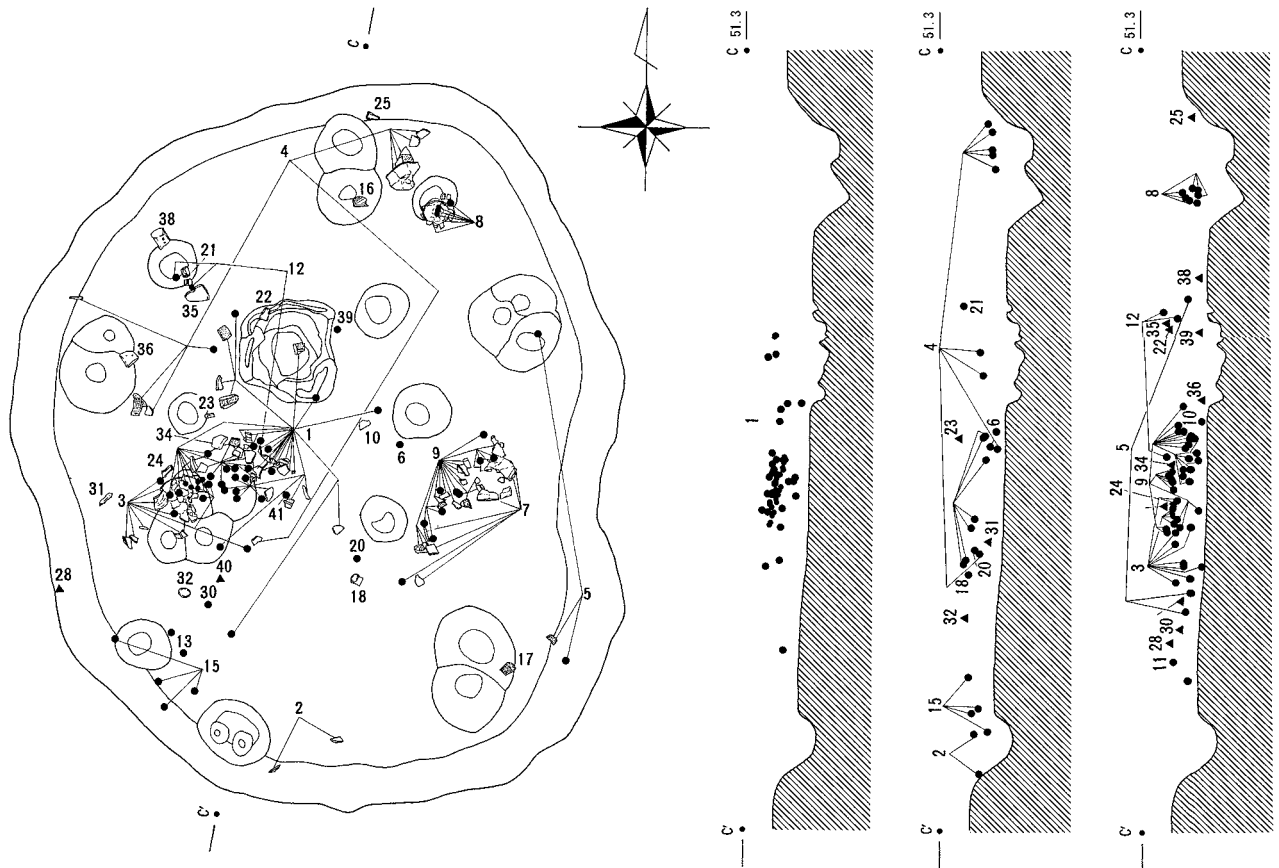


第5図 J-1号住居址 (1/60)

2: J-1号住居址

J-1号住居址は調査区の北東側で検出した。住居中央部に根による攪乱を受けていたが遺存状態は良好である。平面プランは楕円形を呈し、南北5.8m、東西5.2mをはかる。主軸方位はN-12°-Eを示す。壁はやや傾斜を持って立ち上がる。壁高は38cmをはかる。床面は平坦で締まっていたが、硬化は認められなかった。中央西寄りのP17、P19に一部重複する位置で被熱による硬化範囲を確認した。P17、P19覆土上面にも被熱範囲が及んでいた。

柱穴は20本検出した。P1~P5は支柱穴で径45~65cm、深さ25~40cmをはかる。P5を除く各支柱



第6図 J-1号住居址遺物出土状況図(1/60)

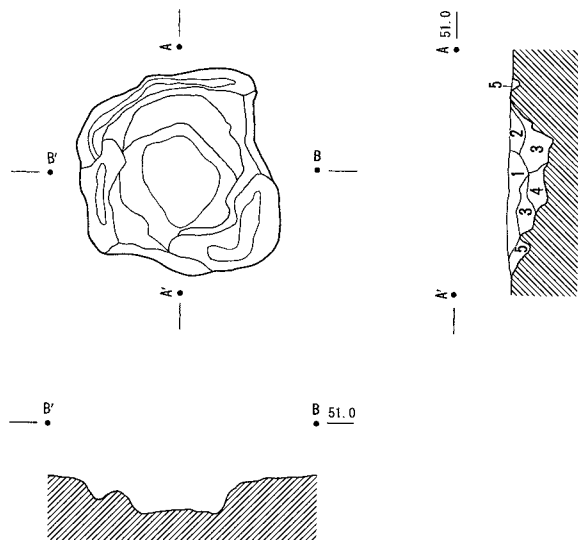
穴には、柱穴P7～P11が重複しており、建て替えを行ったことが想定できる。規模は径50～60cm、深さ18～22cmをはかる。南側のP6は長軸60cm、短軸45cm、深さ11cmの楕円形の掘り込みで、底面に径15cm、深さ7cmの小ピットを2本確認した。P12～P20は炉を中心に径2mの範囲で巡っており、小形の住居址が重複していた可能性が高いと考えられる。規模は径30～45cm、深さ13.6～28.5cmをはかる。

炉は住居址中央やや西寄りで検出した。規模は長軸1.63m、短軸1.58mの方形を呈し、深さ35cmをはかる。火床部のロームは被熱により赤色硬化していた。火床部を囲むように掘り込みが巡っており、石囲炉だった可能性が高い。

出土遺物

縄文時代中期後半土器(第8図1・第9図1～3・第10図4～7・第11図8、9・第12図10～30・第13図31～42・図版5-1～9)

1～12は地文に縄文を施す土器である。1は口縁部から底部の破片で、同一個体である。胴部中位で弱く窄まり、直線的に外反し口縁部で内彎する。口縁部は1条の隆帯を波状に施した楕円区画文を持つ。胴部は沈線による磨消縄文で、沈線間に1条の沈線が垂下している。2は胴部で、沈線による磨消縄文が垂下する。3は鉢形土器で口縁部は欠損している。胴部は直線的に立ち上がり、肩部で大きく内彎し口縁部は外半すると思われる。肩部に波状隆帯による楕円区画文を持ち、隆帯上にも縄文が施されている。胴部



J-1号住居址炉土層

- 1層 暗褐色土 焼土粒子を少量、ローム粒子を極微量含む。
- 2層 暗茶褐色土 被熱したローム小ブロック、焼土粒子を含む。
- 3層 暗褐色土 ローム粒子、焼土粒子を含む。
- 4層 暗茶褐色土 ローム粒子を含み、焼土粒子を少量含む。
- 5層 暗褐色土 ローム粒子を微量含む。

第7図 J-1号住居址炉 (1/30)

は地文に条線を施し、一部は波状に垂下させている。4は外反する胴部及び底部の破片で、同一個体である。胴部中位で弱い窄まりを有する。胴部は磨消縄文と1条の波状沈線を交互に垂下させている。5、6も磨消縄文を施す胴部破片で、6は刺突文を有する。

7～11は「U」字状の区画文を有する土器である。7は鉢形土器で内彎する無文の口縁部を持つ。胴部は沈線による「U」字状の磨消縄文が垂下し、磨消部上部に短いワラビ手文を施している。8は胴部から底部の破片で、胴部中位で窄まりを持つ。胴部中位で対向する「U」字状、逆「U」字状文と、2条一対の沈線を交互に垂下させている。胴部中位の一部の地文は条線となっている。器内面には底部付近と胴部中位に煤の付着が見られる。9は内彎しながら立ち上がり、胴部中位から大きく開き内彎する波状口縁へ至る。口縁部は無文である。胴部は中位で文様を上下に分帯している。胴部上半は口縁部に横走する一条の隆帯から楕円区画文が垂下し、楕円区画文間は逆三角形状に区画文化している。胴部下半は逆「U」字状の磨消縄文を垂下させている。10は無文の口縁部で、2条一対の沈線による逆「U」字状の磨消縄文を施す。11は小形土器の内傾する胴部上半の破片で、逆「U」字状の磨消縄文が垂下する。

12は口縁部から胴部の破片で、波状口縁になると思われる。無文の口縁部には微隆帯が横走し、地文の縄文が微隆帯上にも及んでいる。

13、14は同一個体と思われる小形土器の口縁部と胴部で、隆帯による渦巻文が施される。

15～17は地文に沈線や条線が施される土器である。15は口縁部の破片で同一個体である。刺突文を施す隆帯が垂下し、胴部境に隆帯が横走している。16は胴部破片で、地文の沈線は斜位に施され、2条一対の隆帯が垂下している。18は小形台付深鉢の脚部である。

土製品

土製円盤 (第12図19)

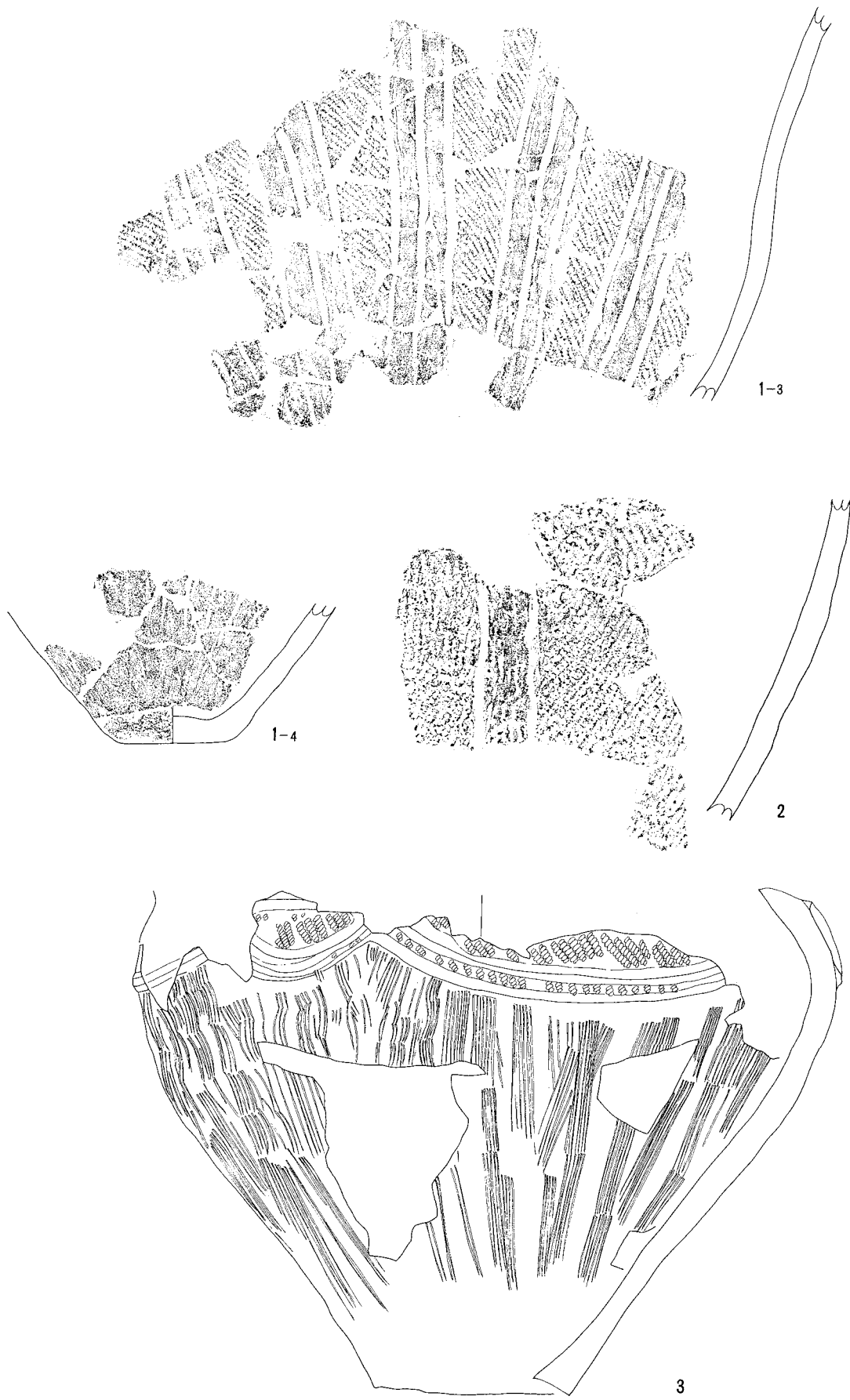
19は周辺部磨調整がみられる。地文に縄文が施されている。最大径3.8cm、重さ19gをはかる。

土偶 (第12図20・図版6-20)

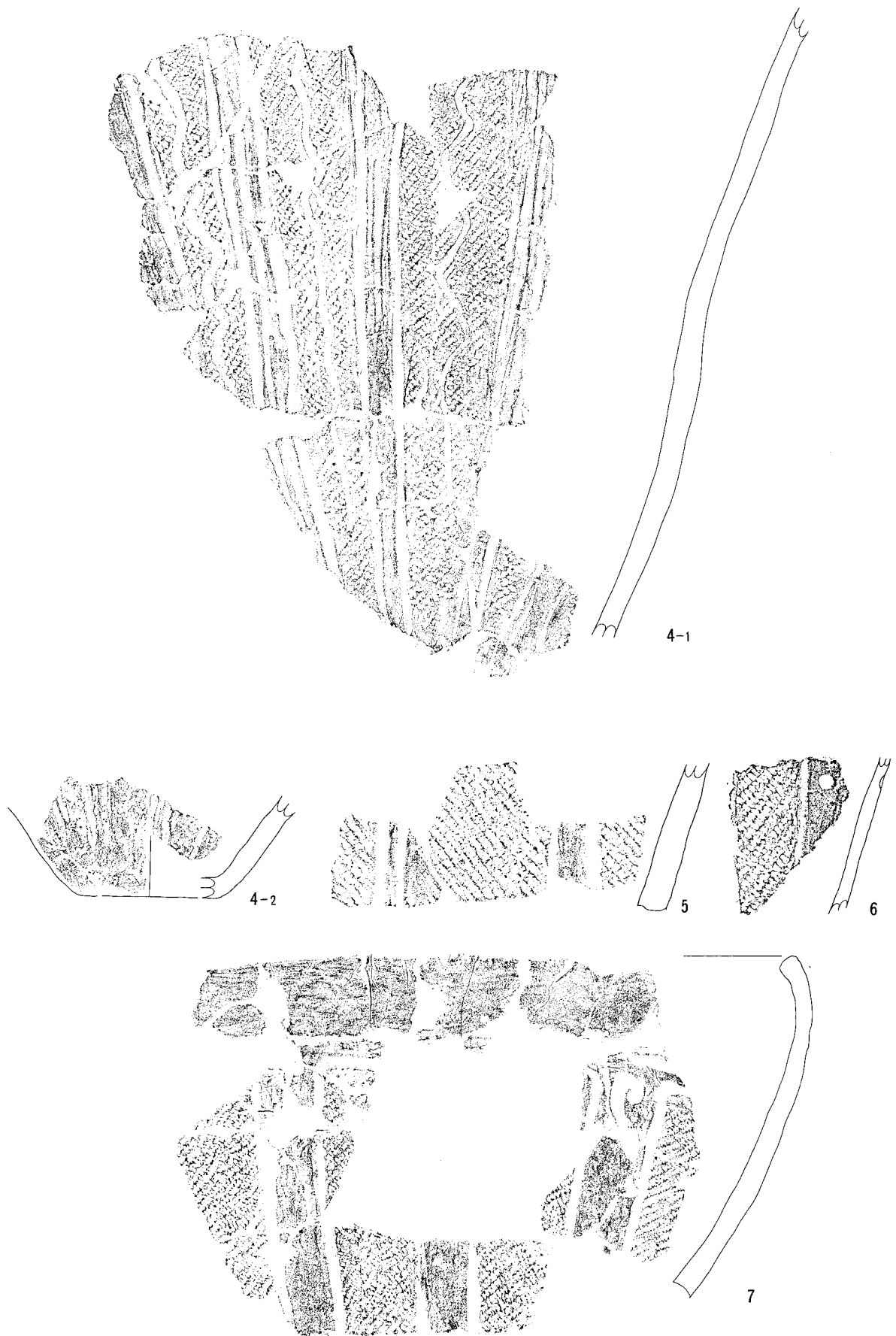
20は両腕部を欠損する。板状の体部に突起状に簡易な頭部を持ち、粘土紐を肥厚させ脚部を作出している。反り返るような格好で自立する。体部中位に粘土粒を貼り付け乳房を表現する。文様は沈線で描かれ、頭部と体部境に「U」字状、右側面は2～3条の鋸歯文から梯子のような文様が垂下する。背中側は両肩



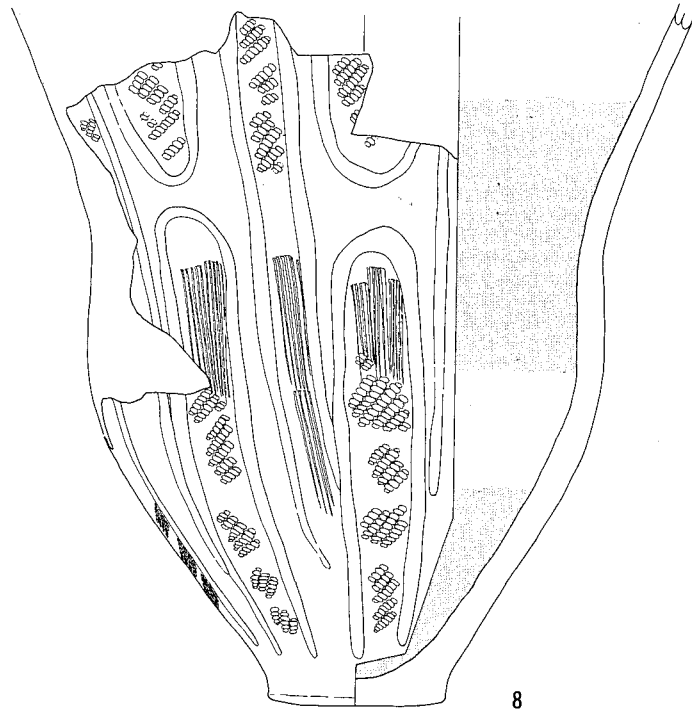
第8图 J-1号住居址出土遗物(1)(1/3)



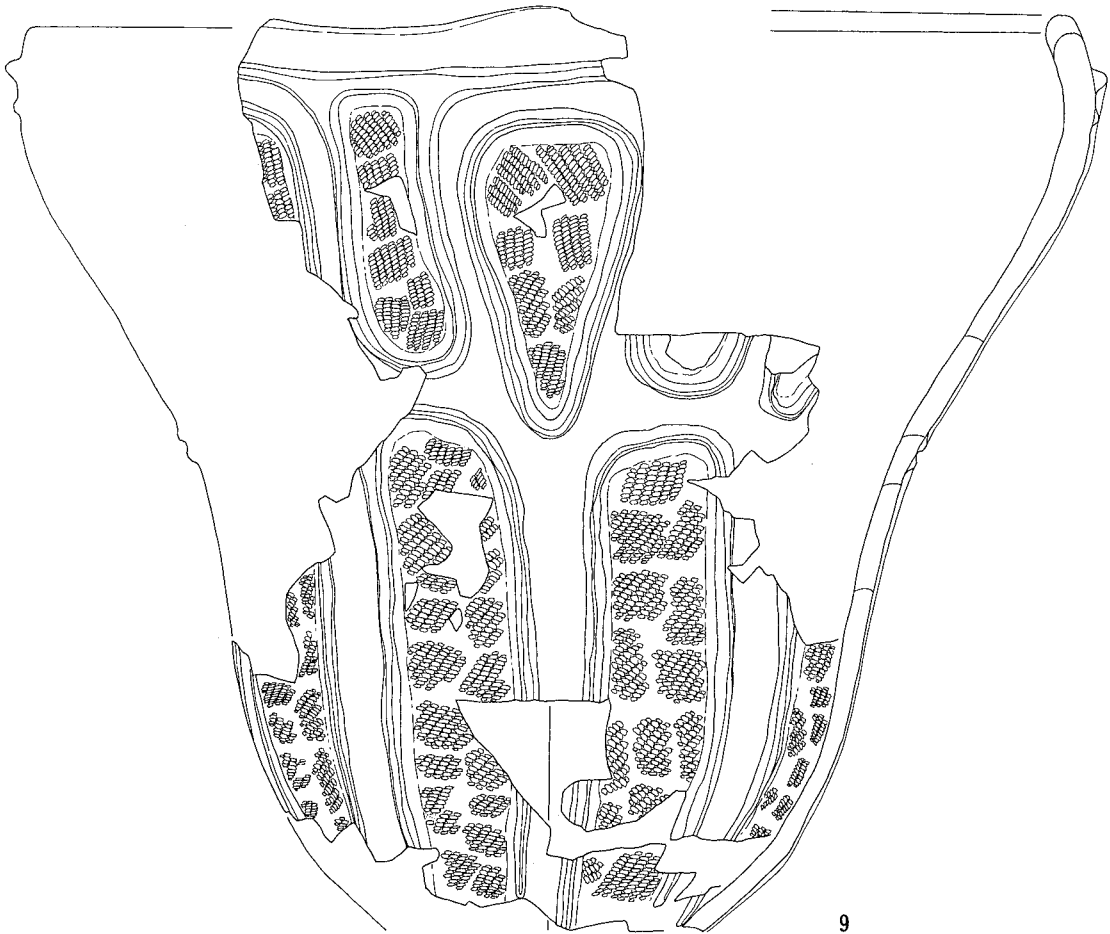
第9图 J-1号住居址出土遗物(2)(1/3)



第10图 J - 1号住居址出土遺物 (3) (1/3)



8

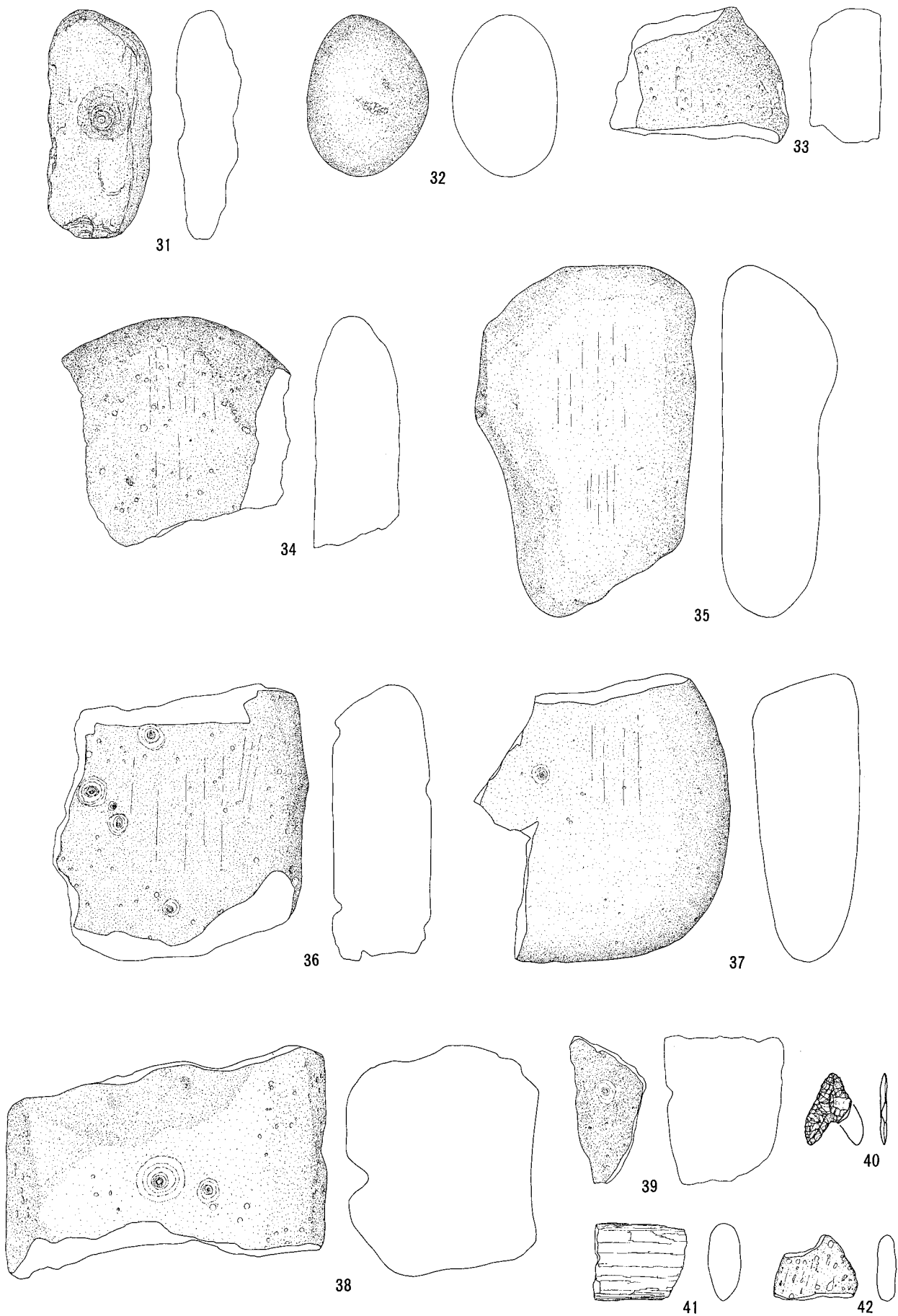


9

第11图 J-1号住居址出土遗物(4)(1/3)



第12図 J-1号住居址出土遺物 (5) (1/3) 但し、20は (1/2)



第13図 J-1号住居址出土遺物(6)(1/3) 但し、40は(1/2)

部から「U」字状文が垂下し、右側面からの沈線が弧状に垂下する。高さ5.4cm、幅2.5cmをはかる。

三角壻形土製品（第12図21・図版6-21）

21は欠損しているため長さは不明である。稜縁、端縁は直線的である。正面2面と底面は地文に単節RL縄文を施し周囲に1条の沈線を施している。側面は縄文のみを施文し、中央に径9mmの孔が穿たれている。側縁の一辺の長さは5.8cmをはかる。

石器

打製石斧（第12図22～27・図版12-24・25）

22～24は短冊形を呈する。両側縁に調整剥離を施している。22、23は刃部を欠損している。24の刃部は片側の磨滅が顕著にみられる。22は幅6.4cm、23は幅4cm、24は長さ11.4cm、幅5cm、重さ98gをはかる。石質は22がホルンフェルス、23、24は頁岩である。

25は撥形を呈する。自然面を残し、両側縁に調整剥離を施している。両側縁には擦痕が残る。長さ10cm、幅6.4cm、重さ54gをはかる。石質は砂岩である。

26は基部の、27は刃部の破片である。一部に自然面が残り、基部及び刃部に調整剥離を施している。石質はともに砂岩である。

磨製石斧（第13図28～30・図版6-28・29）

28、29は刃部を、30は基部を欠損している。各面は角を持つように整形され、磨きも顕著である。石質は28が斑糲岩、29、30が緑色岩である。

磨石（第13図31～34・図版6-32）

31～34は両面に磨痕がみられる。31は表裏に1箇所を有する。長さ9.7cm、幅8.4cm、重さ468gをはかる。石質はともに石英閃緑岩である。

石皿（第13図35～39）

35は自然礫をそのまま用い、表面に擦痕が残る。長さ19.2cm、幅11.8cm、重さ2kgをはかる。石質は砂岩である。36～38は表面に擦痕が残る、窪みを有する。38には人為的に面取りされた凹面が一部認められる。石質は36、38、39が石英閃緑岩、37が砂岩である。

石鏃（第13図40・図版6-40）

40は基部に抉りをもつ。基部の一部が欠損している。石質は黒耀石である。

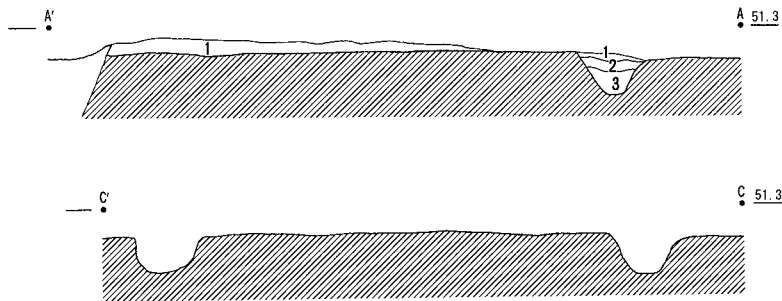
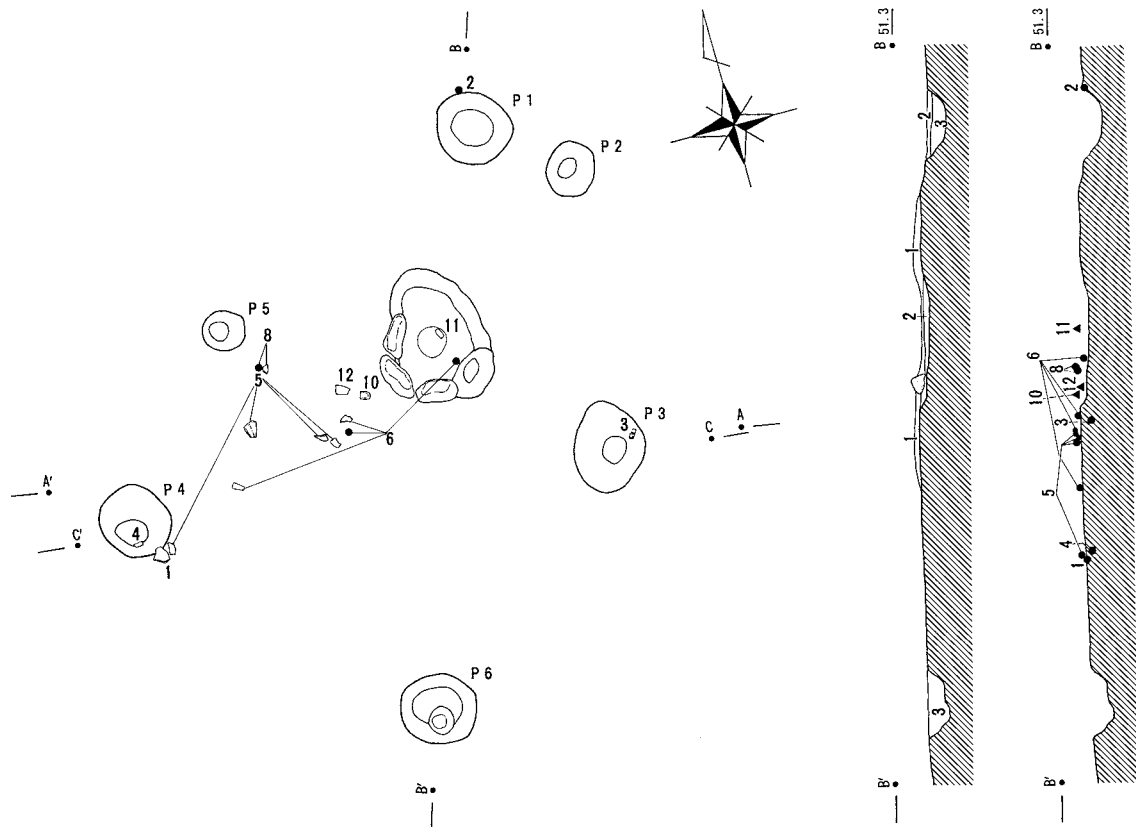
石製品（第13図41、42）

41は絹雲母片岩製で、表裏両面に磨痕が認められる。片側に刃部を作出しており、石刀の可能性はある。身幅は4.3cmをはかる。

42は軽石製で、表裏両面及び側面に磨痕が認められる。欠損により形態は不明である。

3：J-2号住居址

J-2号住居址は調査区の北西側、J-1号住居址の西側で検出した。調査区の拡張中に確認面である関東ローム層の上層に堆積した暗茶褐色土中から石囲炉の礫を検出したため、周辺の精査を行った。石囲炉周辺に僅かに覆土が残っていたが、住居址の掘り込みは確認されず、柱穴のみの検出となったため、遺存状態は良くない。住居址の平面プラン、規模等は不明である。南側で検出した浅いピットと炉を主軸と考えると、主軸方位はN-19°-Eを示す。柱穴は5本検出した。P1～P5は径37～57cm、深さ13～29



J-2号住居址土層

- 1層 黒色土 ローム粒子を微量含む。
- 2層 暗褐色土 ローム粒子を微量含む。
- 3層 暗黄褐色土 ローム粒子を含む。

第14図 J-2号住居址 (1/60)

cmをはかる。南側のP 6は長軸60cm、短軸55cm、深さ12cmの掘り込みで、底面に径20cm、深さ2.5cmの小ピットを1本確認した。

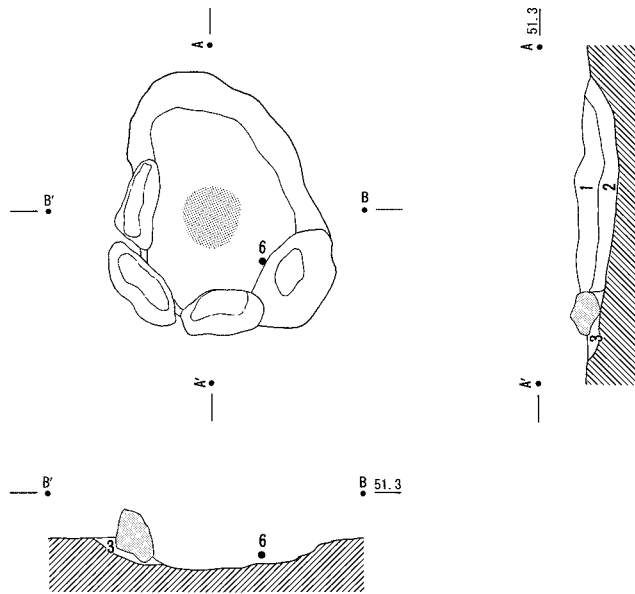
炉は細長い礫を用いた石囲い炉で、住居址中央やや東寄りで見出した。炉石は南面及び西面の一部のみ残存している。規模は長軸1.05m、短軸88cmの楕円形を呈し、深さ24cmをはかる。火床部中央のロームは被熱により赤色硬化していた。

出土遺物

5は床面付近、6は床面付近及び炉内からの出土である。

縄文時代中期後半土器（第16図1～8・図版6-6、8）

1～5は沈線による磨消縄文を施す土器である。1の縄文は無節である。2、5は磨消縄文内に一条の沈線が垂下する。6は口縁部と胴部の破片で同一個体である。地文は縄文で、口縁に沿って縄文の施文方



J-2号住居址炉土層

- 1層 黒色土 ローム粒子を微量含む。
- 2層 暗褐色土 ローム粒子を微量、焼土粒子を極微量含む。
- 3層 暗褐色土 ローム粒子を極微量含む。

第15図 J-2号住居址炉 (1/30)

向を変えている。胴部は沈線を逆「U」字状に垂下させている。7、8は小形の土器の口縁部と胴部から底部の破片で、同一個体と思われる。幅の狭い無文の口縁部に眼鏡状隆帯を有する。胴部は低い隆帯による渦巻文を施している。

土製品

土製円盤 (第16図9)

9は周辺打調整がみられる。土器の輪積面を利用しており半円形を呈する。最大径2.8cmをはかる。

石器

磨石 (第16図10、11・図版6-10、11)

10、11は楕円形を呈し、扁平な面に磨痕がみられる。10は僅かな窪みを有する。10は長さ14cm、幅9cm、重さ378g、11は長さ13.8cm、幅8.3cm、重さ715gである。石質はともに砂岩である。

石皿 (第16図12)

12は両面に擦痕がみられる。幅9.7cmである。石質は石英閃緑岩である。

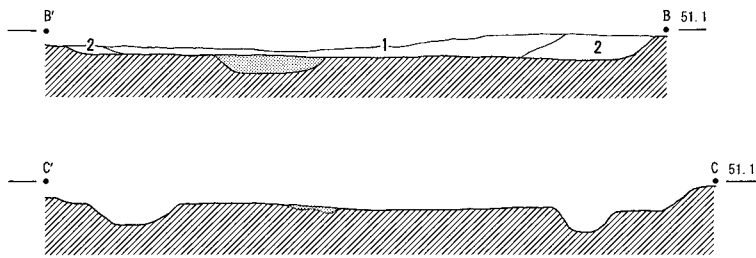
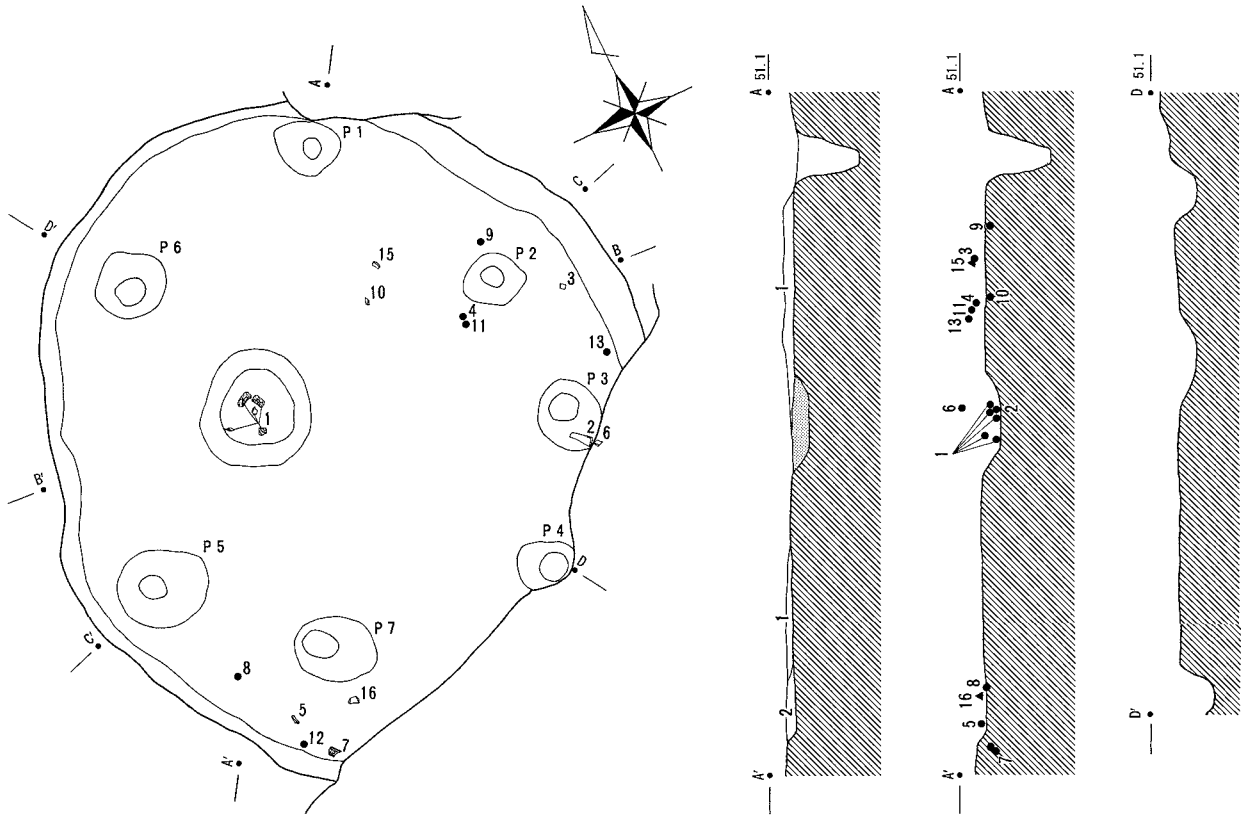
4：J-3号住居址

J-3号住居址は調査区の南東側で検出した。北側で一部攪乱を受けていたが、遺存状態は良好である。平面プランは円形を呈し、径5.2mをはかる。主軸方位はN-12°-Eを示す。壁はやや傾斜を持って立ち上がる。壁高は7~18cmをはかる。床面は平坦で締まっていたが、硬化は認められなかった。柱穴は7本検出した。P1~P6は支柱穴で径40~70cm、深さ16~52cmをはかる。南側のP7は長軸65cm、短軸50cm、深さ26cmの楕円形の掘り込みとなる。

炉は埋甕炉と考えられ、住居址中央西寄りで検出した。規模は長軸93cm、短軸87cmの円形を呈し、深さ14cmをはかる。火床部及び壁面のロームに弱い被熱痕が認められた。炉中央覆土下層から被熱した土器(第19図1)を検出した。



第16図 J - 2号住居址出土遺物 (1/3) 但し、9は (1/2)



J-3号住居址土層

- 1層 暗褐色土 ローム粒子を微量含む。
- 2層 暗黄褐色土 ローム粒子を多量含む。

第17図 J-3号住居址 (1/60)

出土遺物

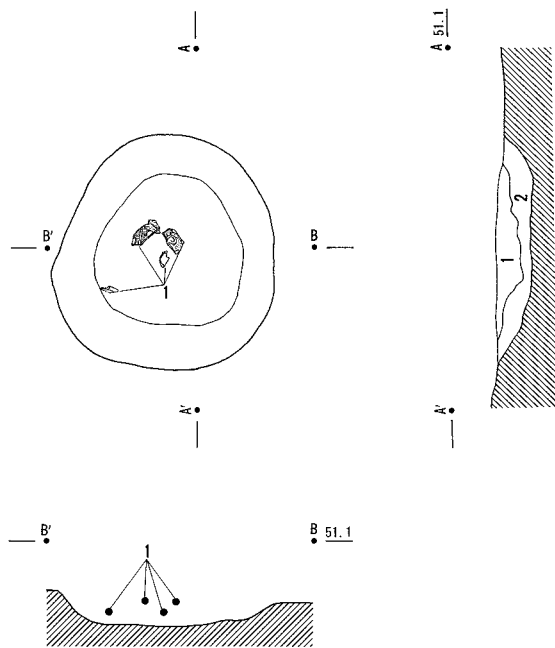
1は炉体土器、2はP3覆土中からの出土である。

縄文時代中期後半土器（第19図1～13・図版6-1）

1～9は地文に縄文を施す土器である。1は胴部に窄まりを持ち、外反しながら口縁部に至る。口縁部は隆帯による区画文を有すると思われる。胴部には2条一対の沈線による渦巻文が施され、渦巻文に向かって口縁部からワラビ手状の沈線が垂下している。垂下する沈線間には太い沈線による渦巻文が施される。

2、3は口縁部で隆帯による区画文を持つ。4～9は胴部破片で、4は隆帯が横走、5は垂下している。

6、7は沈線による磨消縄文が垂下している。8は横走する隆帯から2条の隆帯が垂下する。9は沈線が逆「U」字状に垂下している。



J-3号住居址炉土層

- 1層 暗褐色土 被熱したローム粒子、焼土粒子を量含む。
- 2層 暗褐色土 被熱したローム粒子を微量含む。

第18図 J-3号住居址炉 (1/30)

10~12は地文に条線を施す土器である。10、11は口縁部の破片で、10は隆帯による楕円区画と思われる。11は横走る隆帯上に刺突文を有する。12は胴部破片で、2条の隆帯が垂下している。13は無文の底部破片である。

土製品

土製円盤 (第19図14)

14は周辺打調整がみられる。最大径4.5cm、重さ24gをはかる。

石器

打製石斧 (第19図15・図版6-15)

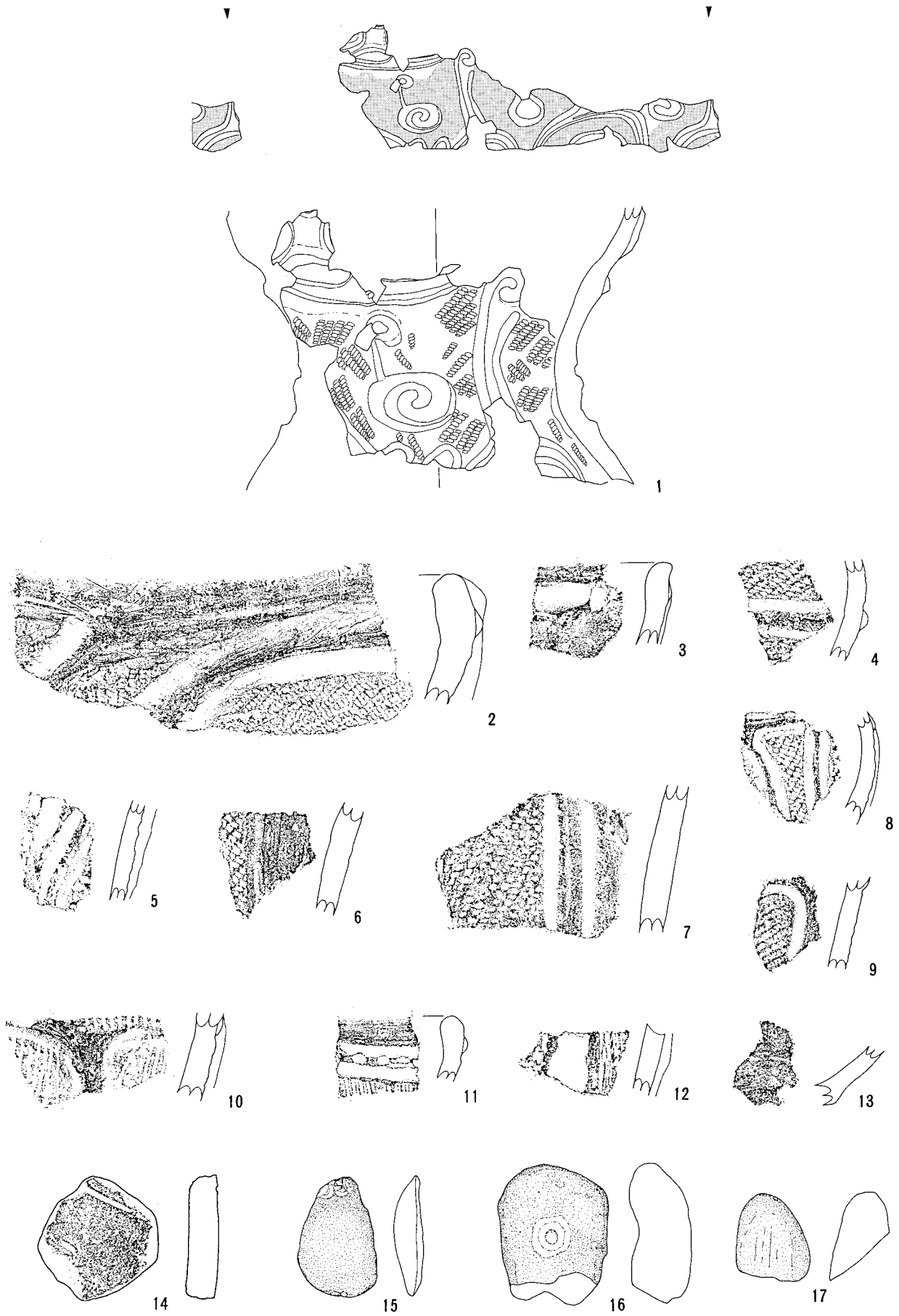
15は自然面を多く残し、刃部及び基部に調整剥離を施している。刃部は片側だけ磨耗している。長さ6.6cm、幅4.3cm、重さ48gをはかる。石質は砂岩である。

磨石 (第19図16、17)

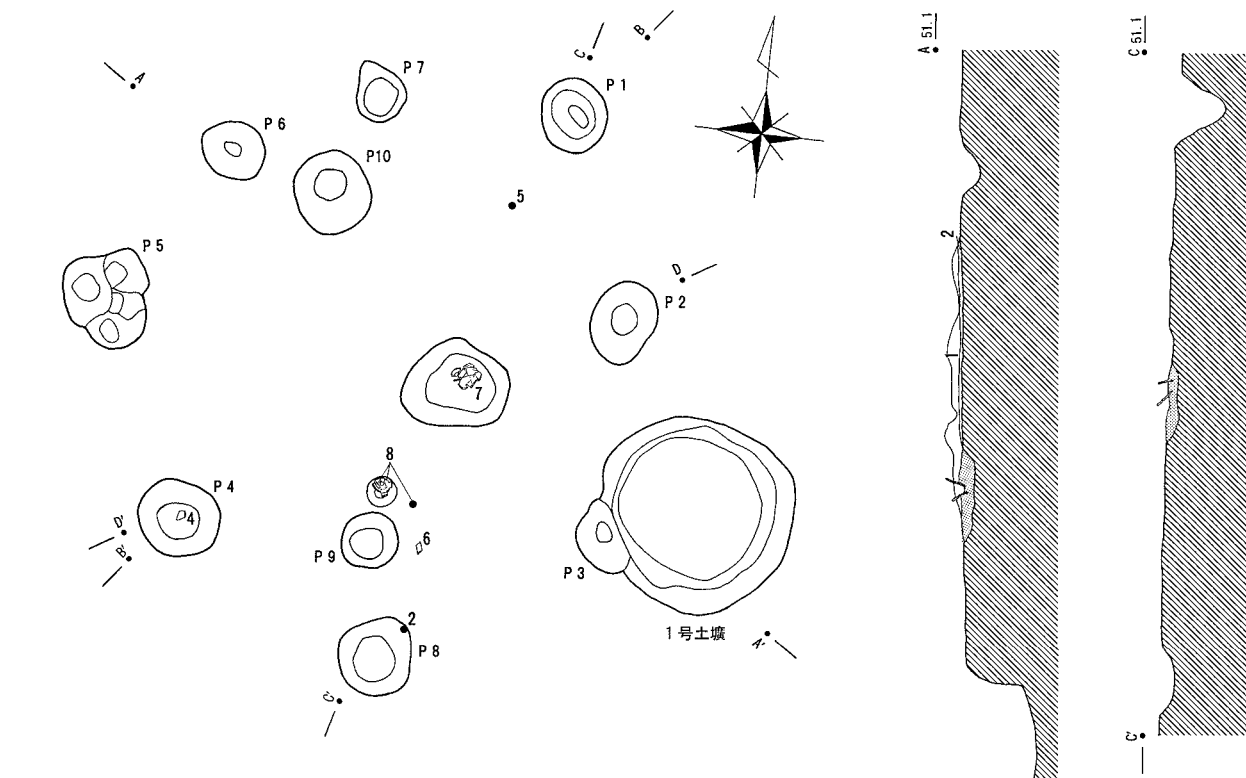
16、17の表面は磨痕が残り下端は欠損している。16は窪みを有している。16は幅6cmをはかる。石質は16、17ともに砂岩である。

5: J-4号住居址

J-4号住居址は調査区の南東側で検出した。掘り込みが浅いため壁は確認できなかった。焼土粒子を含む掘り込みを検出したため炉と判断し、周辺の精査を行い柱穴を検出したため、規模及び平面プランは不明である。南側で検出した浅いピットと炉を主軸と考えると、主軸方位はN-12°-Wを示す。南東側で柱穴と1号土壌が重複している。新旧関係は住居址が古く、1号土壌が新しい。本住居址に伴う柱穴範囲内にJ-6号住居址の柱穴が検出されており、両住居址は重複していると考えられる。柱穴は10本検出した。P1~P7は支柱穴で径40~70cm、深さ16~52cmをはかる。南側のP8は長軸65cm、短軸50cm、深さ26cmの楕円形の掘り込みとなる。P9の内側で埋甕 (第22図8) を検出した。



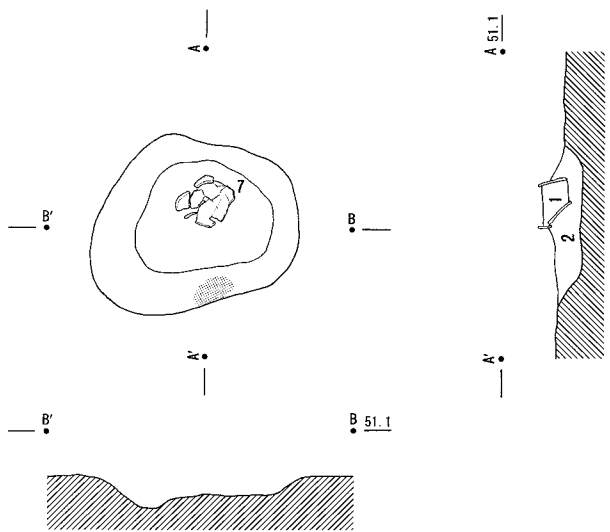
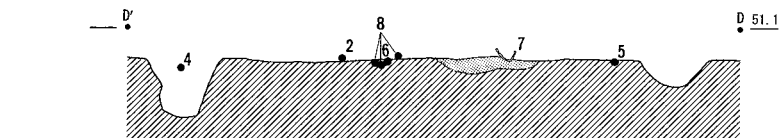
第19図 J-3号住居址出土遺物 (1/3) 但し、14は (1/2)、展開図は (1/6)



J-4号住居址土層

- 1層 黒褐色土 ローム粒子を微量含む。
- 2層 暗褐色土 ローム粒子を含む。

第20図 J-4号住居址 (1/60)



J-4号住居址炉土層

- 1層 暗褐色土 焼土粒子、ローム粒子を微量含む。
- 2層 暗褐色土 被熱したローム粒子を含み、焼土粒子を微量含む。

第21図 J-4号住居址炉 (1/30)



第22図 J-4号住居址出土遺物 (1/3) 但し、9~11は (1/2)

炉は埋甕炉と考えられ、住居址中央東寄りで検出した。規模は長軸93cm、短軸87cmの円形を呈し、深さ14cmをはかる。火床部及び壁面のロームに弱い被熱痕が認められた。炉中央覆土下層から被熱した土器(第22図7)を検出した。

出土遺物

7は炉体土器、8は埋甕である。

縄文時代中期後半土器(第22図1~8・図版7-7、8)

1~7は地文に縄文を施す土器である。1~3は口縁部破片である。4~7は胴部破片である。

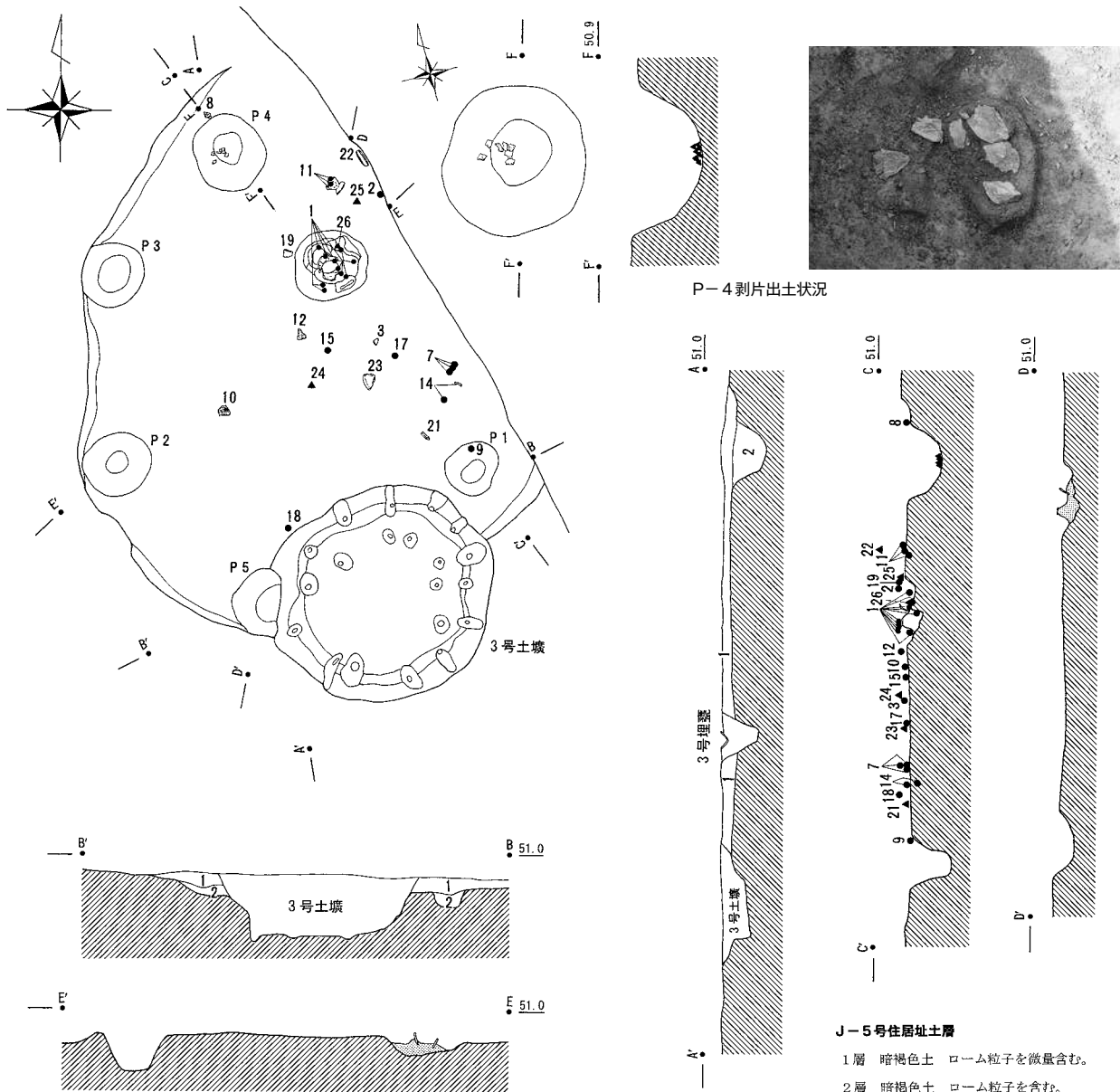
4は1条の沈線が垂下している。5は2条の沈線による磨消縄文が垂下している。6は沈線が逆「U」字状に垂下する。7は胴部下位に弱い窄まりを持ち、内彎しながら開く器形である。

8は無文で、やや突出する小さめの底部から大きく開く器形である。表面の一部に被熱痕が認められる。底径8cmをはかる。

土製品

土製円盤(第22図9~11・図版7-9~11)

9~11は周辺打調整がみられる。9は径2.7cm、重さ6g、10は径2.6cm、重さ5g、11は径2.4cm、重さ4gをはかる。

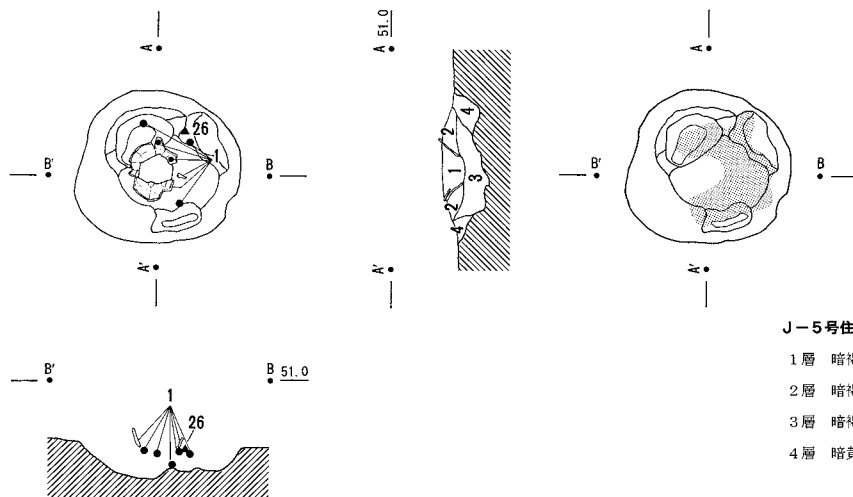


第23図 J-5号住居址 (1/60) 但し、P-4剥片出土状況は (1/30)

6: J-5号住居址

J-5号住居址は調査区の東端で検出した。住居址東側が調査区外へと続き、北側の一部が攪乱を受けていたが遺存状態は良好である。南側で3号土塋、3号埋甕と重複している。新旧関係はJ-5号住居址が古く、3号土塋、3号埋甕が新しい。平面プランは円形を呈すると思われる。規模は南北4.6m、東西は不明である。主軸方位はN-12°-Eを示す。壁はやや傾斜を持って立ち上がる。壁高は10cmをはかる。床面は平坦で締まっていたが、硬化は認められなかった。柱穴は5本検出した。P1からP4は支柱穴で、径45~70cm、深さ18~30.5cmをはかる。3号土塋と重複する南側のP5は径65cm、深さ26cmの楕円形の掘り込みとなる。P4の底面からチャートの剥片が纏まって出土した。

炉は住居址中央北寄りで検出した。規模は径58cmの円形を呈し、深さ20cmをはかる。中央に口縁部から胴部中位までの炉体土器(第25図1)を埋設していた。火床部及び壁周辺のロームは被熱により硬化し、一部が赤色化していた。



J-5号住居址炉土層

- 1層 暗褐色土 ローム粒子を微量含む。
- 2層 暗褐色土 ローム粒子を含み、焼土粒子を極微量含む。
- 3層 暗褐色土 ローム粒子を微量含む。
- 4層 暗黄褐色土 ローム粒子を多量含み、焼土粒子を極微量含む。

第24図 J-5号住居址炉 (1/30)

出土遺物

1は炉体土器、11、14が床面付近からの出土である。

縄文時代中期後半土器（第25図1～20・図版7-1）

1～11は地文に縄文を施す土器である。1は胴部下半を欠損する。胴部中位で窄まり、大きく外反しながら内彎する口縁部へいたる。狭い無文の口縁部に1条の沈線が横走する。胴部は括れ部で文様帯が上下に分かれ、胴部上半には沈線による楕円区画文とワラビ手文を交互に配している。胴部下半は逆「U」字状の沈線とワラビ手文が交互に垂下する。3は口縁部付近の破片で、刺突文が横走し、2条一對の沈線が斜位に垂下している。4～9は沈線が垂下する胴部破片である。4は2条一對の沈線が「U」字状に施される。6、8は2条一對の波状沈線が垂下している。10は1条の隆帯が横走する。11は胴部から底部の破片で、地文の縄文は胴部下端には施文されず無文となっている。

12、13は地文に沈線を施す土器である。13は胴部破片で、刻み目を施す1条の隆帯が垂下している。

14～20は地文に条線を施す土器である。14～16は無文の口縁部で、16は刺突文が横走する。19は地文の条線が波状に施され、1条の隆帯が横走している。20は底部破片で、2条一對の沈線が垂下している。

石器

敲石（第25図21、22・図版7-21、22）

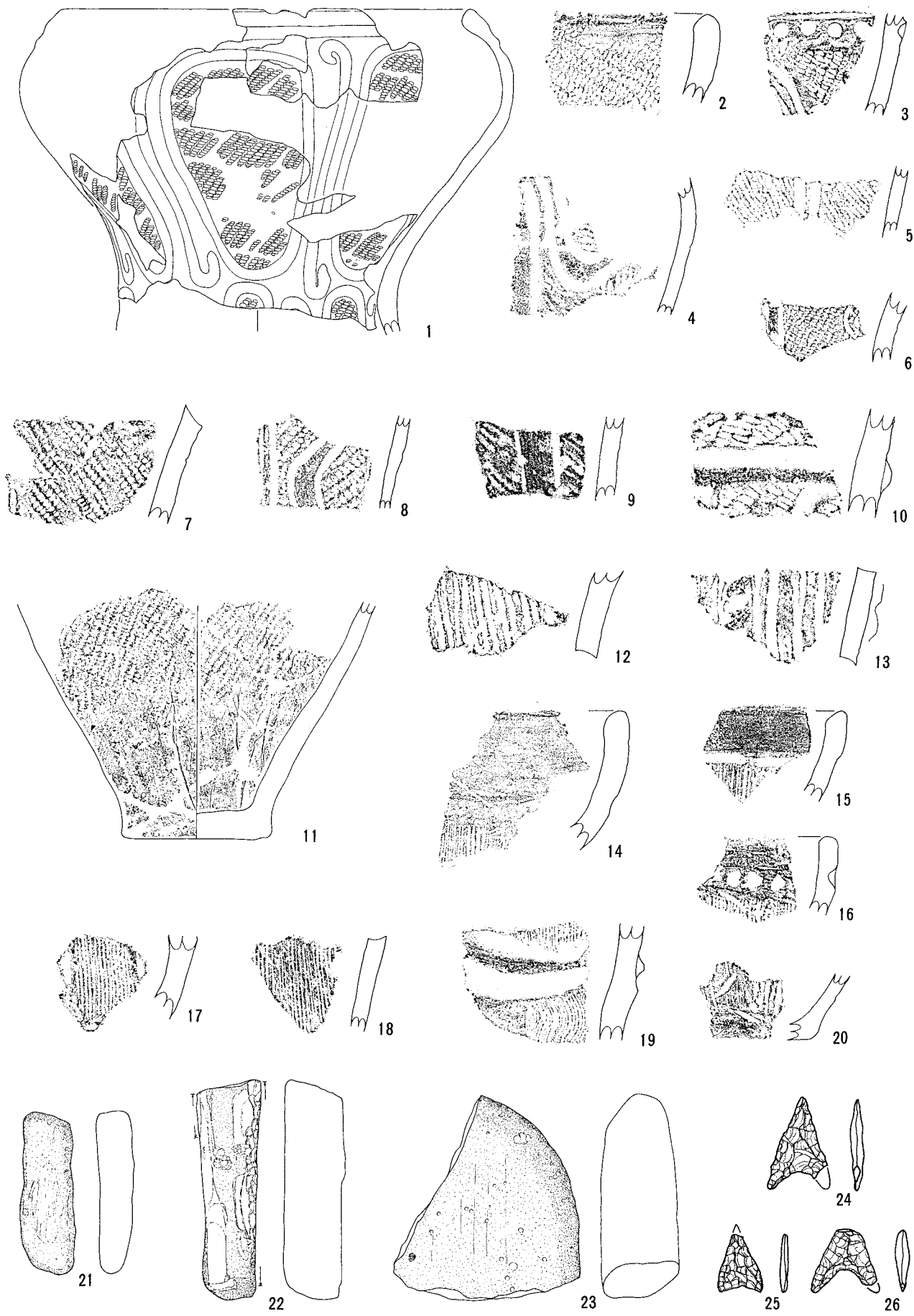
21、22は細長い自然石をそのまま使用している。21は全体に磨かれたような表面となっている。先端部に弱い敲打痕が僅かにみられる。22は基部を欠損する。両側縁に敲打痕や面的な磨痕が残っている。敲打によると思われる剥離がみられる。21は長さ8.9cm、幅3cm、重さ82g、22は長さ12.2cm、幅3.3cmをはかる。石質は21がチャート、22は石灰岩である。

石皿（第25図23）

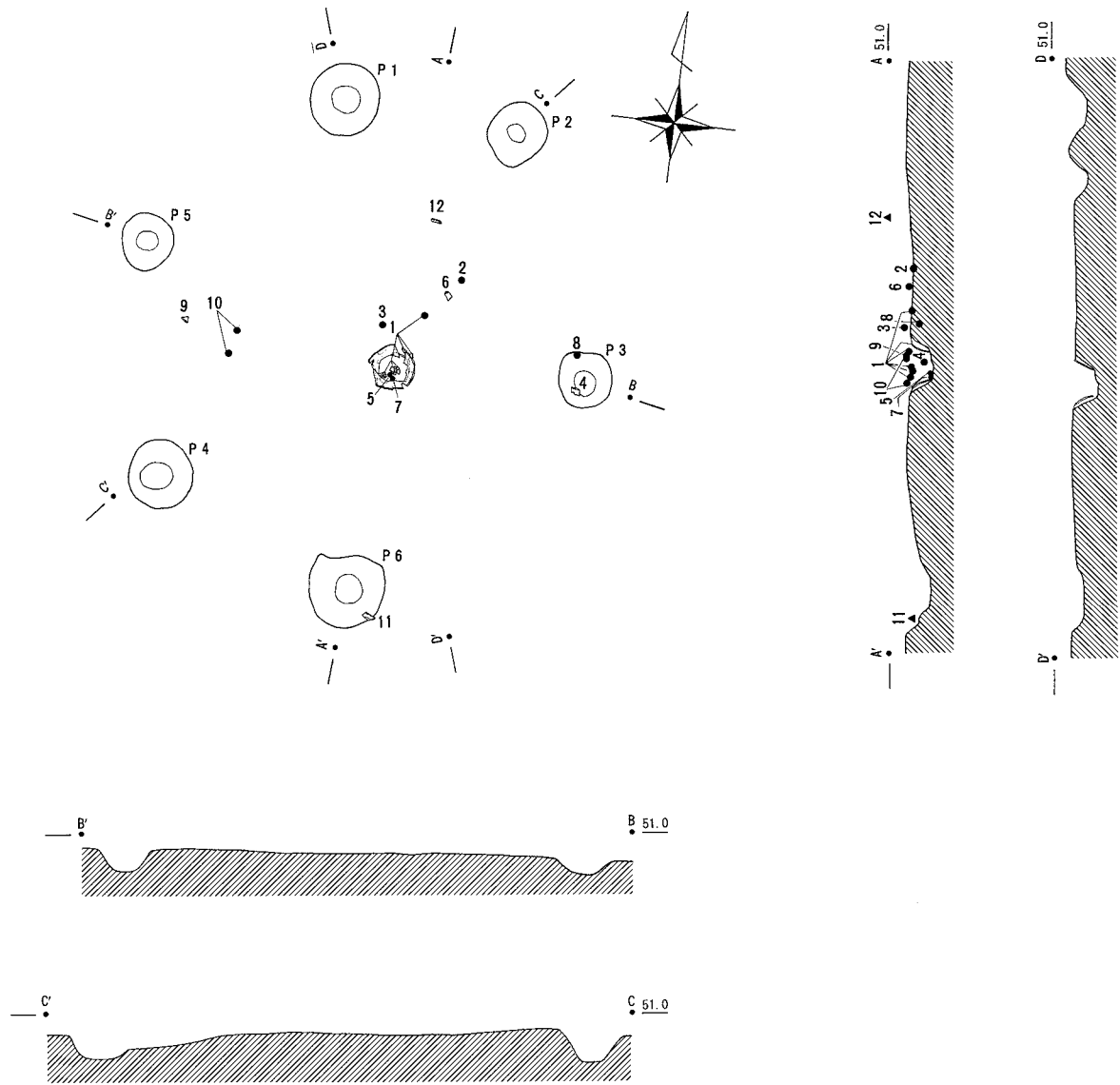
23は両面の扁平部に擦痕がみられる。石質は石英閃緑岩である。

石鏃（第25図24～26・図版7-24～26）

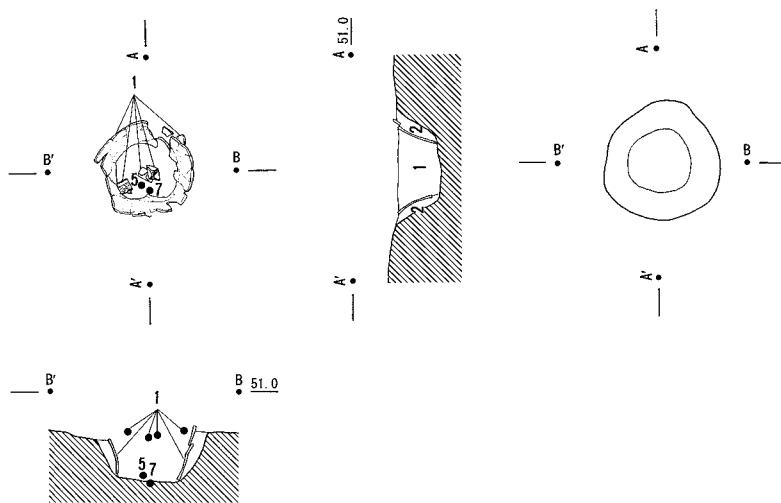
24～26は基部に抉りをもつ。25の抉りは浅い。24は基部の一部が、25は先端部が、26は先端部と基部を欠損する。24は長さ2.6cm、25は幅1.3cmをはかる。石質はともにチャートである。



第25図 J - 5号住居址出土遺物 (1/3) 但し、24~26は (2/3)



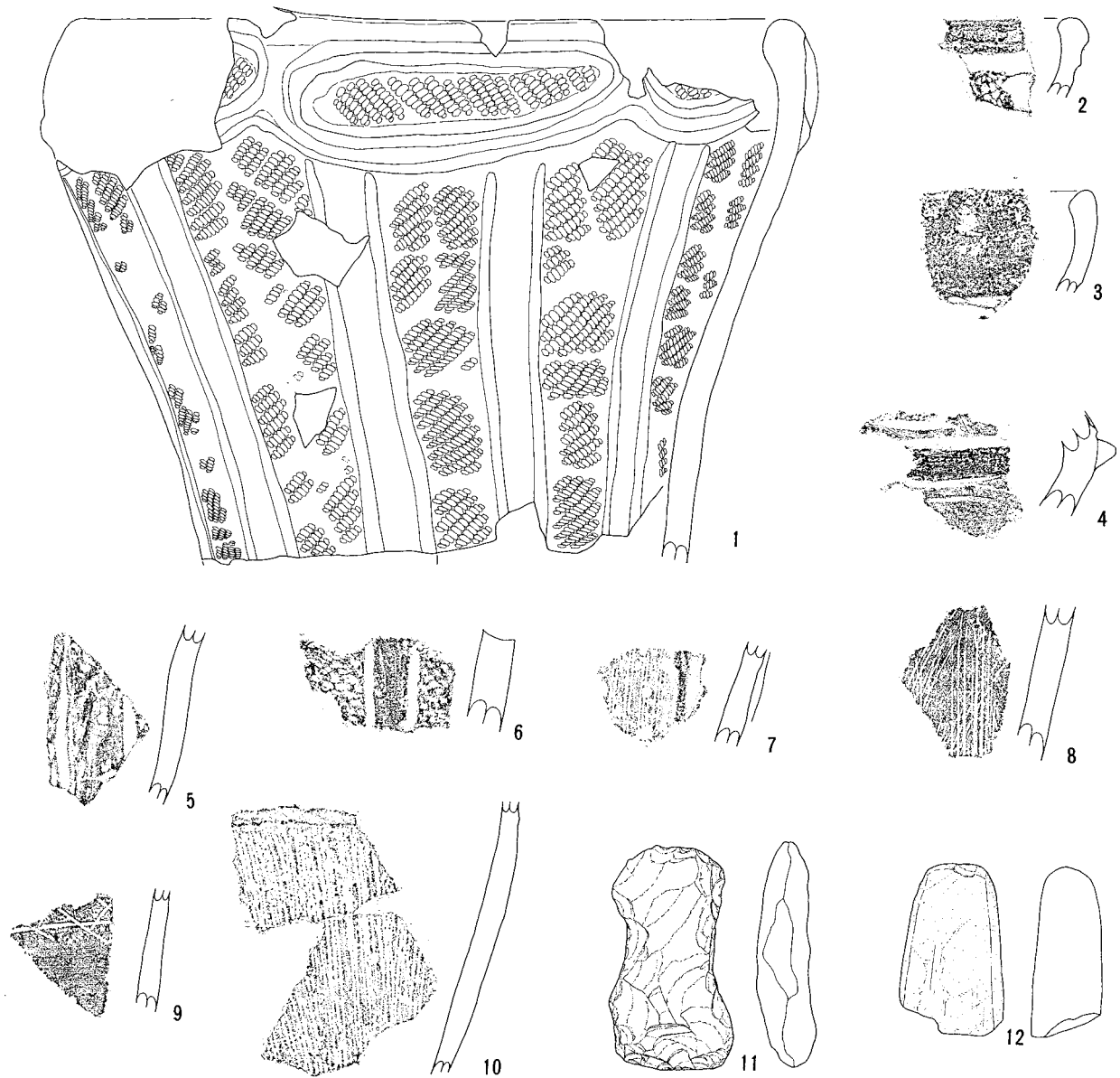
第26図 J-6号住居址 (1/60)



J-6号住居址炉土層

- 1層 暗褐色土 ローム粒子を微量、焼土粒子を極微量含む。
- 2層 暗褐色土 ローム粒子を少量含む。

第27図 J-6号住居址炉 (1/30)



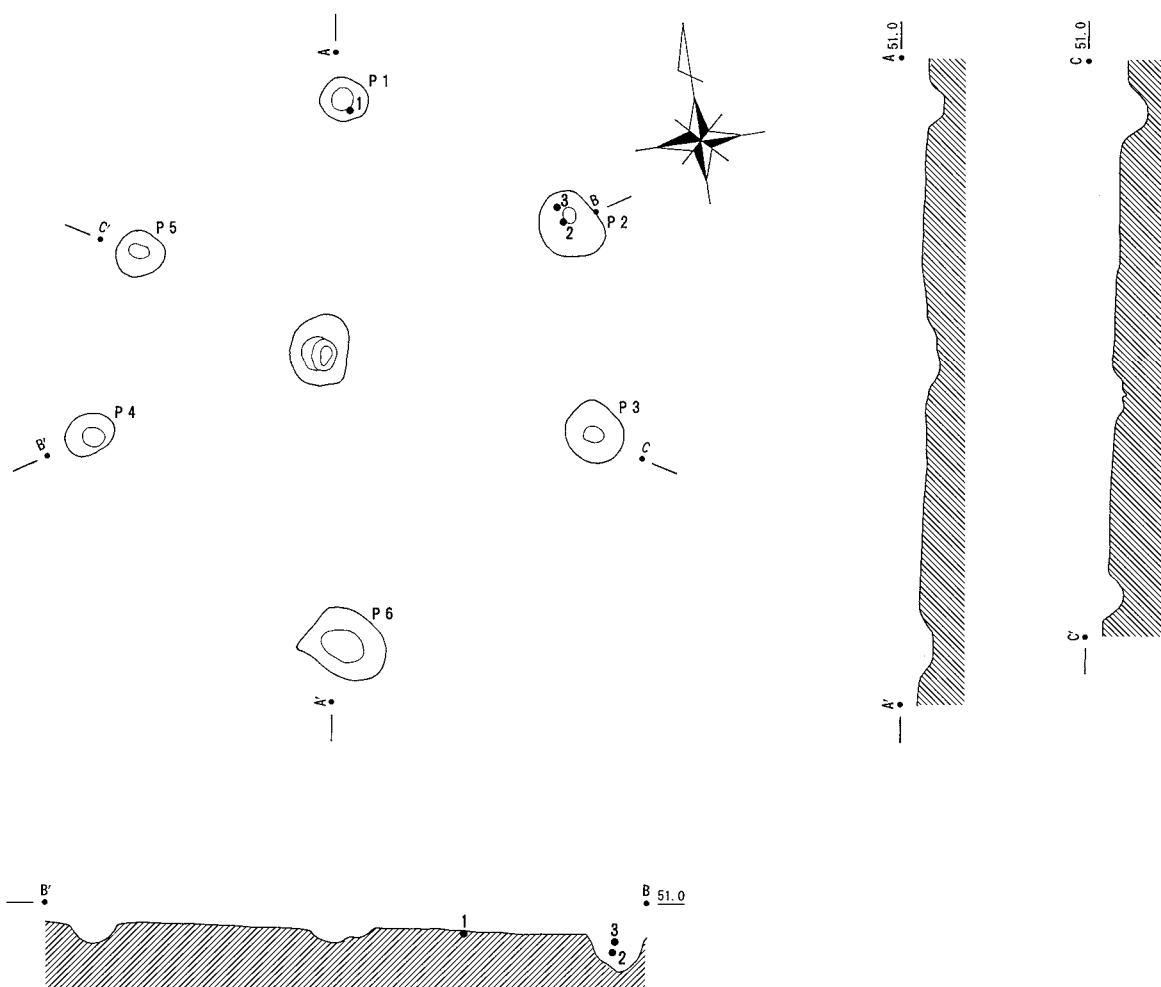
第28図 J-6号住居址出土遺物 (1/3)

7：J-6号住居址

J-6号住居址は調査区の南東側で検出した。掘り込みがないため壁は確認できなかった。当初単独の埋甕として調査したところ、埋甕炉と判明したため、周辺の精査を行い柱穴を検出した。規模及び平面プランは不明である。南側で検出した浅いピットと炉を主軸と考え、主軸方位はN-5°-Eを示す。住居址東側でJ-5号、J-7号住居址と、西側でJ-4号住居址と重複している。

柱穴は5本検出した。P1～P5は主柱穴で径43～60cm、深さ15～22cmをはかる。南側のP6は径65cm、深さ17cmの楕円形の掘り込みとなる。

炉は埋甕炉で、住居址中央で検出した。規模は長軸93cm、短軸87cmの円形を呈し、深さ14cmをはかる。火床部及び壁面のロームに弱い被熱痕が認められた。赤色化は見られなかった。炉の中央から被熱した炉体土器（第28図1）を検出した。



第29図 J-7号住居址 (1/60)

出土遺物

1は炉体土器、4はP4、11はP6からの出土である。

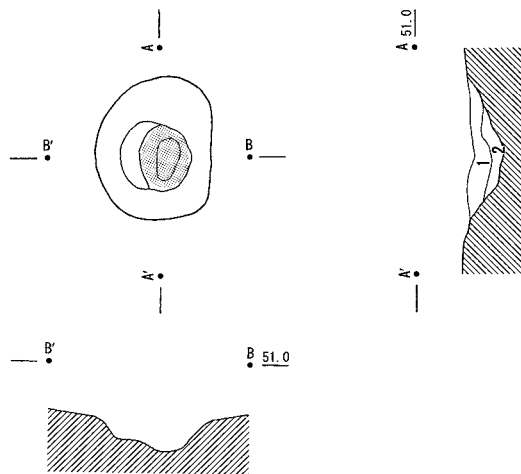
縄文時代中期後半土器（第28図1～10・図版7-1）

1から6は地文に縄文を施す土器である。1は胴部下半を欠損する。胴部は外反しながら立ち上がり、口縁部で弱く内彎する。口縁部は隆帯による円文と楕円区画文が交互に配される。胴部は沈線による磨消縄文が12単位垂下している。4は隆帯による口縁部区画文の破片で、頸部は無文となる。5、6は沈線による磨消縄文が垂下している。7～10は地文に条線や沈線を施す土器である。7は1条の隆帯が垂下する。10は上端に凹線が横走している。

石器

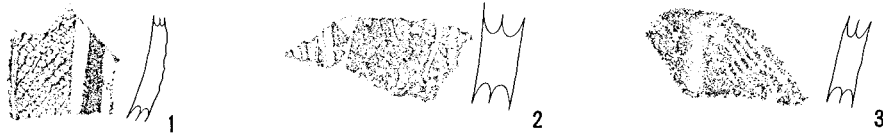
打製石斧（第28図11・図版7-11）

11は分銅型を呈する。両側縁に調整剥離を施している。刃部、基部にも磨滅痕がみられる。長さ10.6cm、幅7.7cm、重さ314gをはかる。石質はホルンフェルスである。



J-7号住居址炉土層

- 1層 暗茶褐色土 焼土粒子、ローム粒子を含む。
- 2層 暗褐色土 焼土粒子を少量、ローム粒子を含む。



第30図 J-7号住居址炉 (1/30)、出土遺物 (1/3)

磨製石斧 (第28図12・図版7-12)

12は刃部を欠損している。各面は角を持つように整形され、磨きも顕著である。基部に僅かに剥離が見られる。石質は緑色岩である。

8：J-7号住居址

J-7号住居址は調査区の南東側で検出した。住居址の掘り込みはない。J-5号住居址P2の覆土上面に焼土層が確認されたため、調査したところ炉と判明した。周辺の精査を実施し柱穴の検出を行った。規模及び平面プランは不明である。南側で検出した浅いピットと炉を主軸と考えると、主軸方位はN-10°-Eを示す。J-5号、J-6号住居址と重複しており、新旧関係はJ-5号住居址が古く、J-7号住居址が新しい。J-6号住居址は不明である。

柱穴は6本検出した。P1～P5は支柱穴で径38～55cm、深さ12.5～30cmをはかる。南側のP6は長軸60cm、短軸50cm、深さ10cmの楕円形の掘り込みとなる。

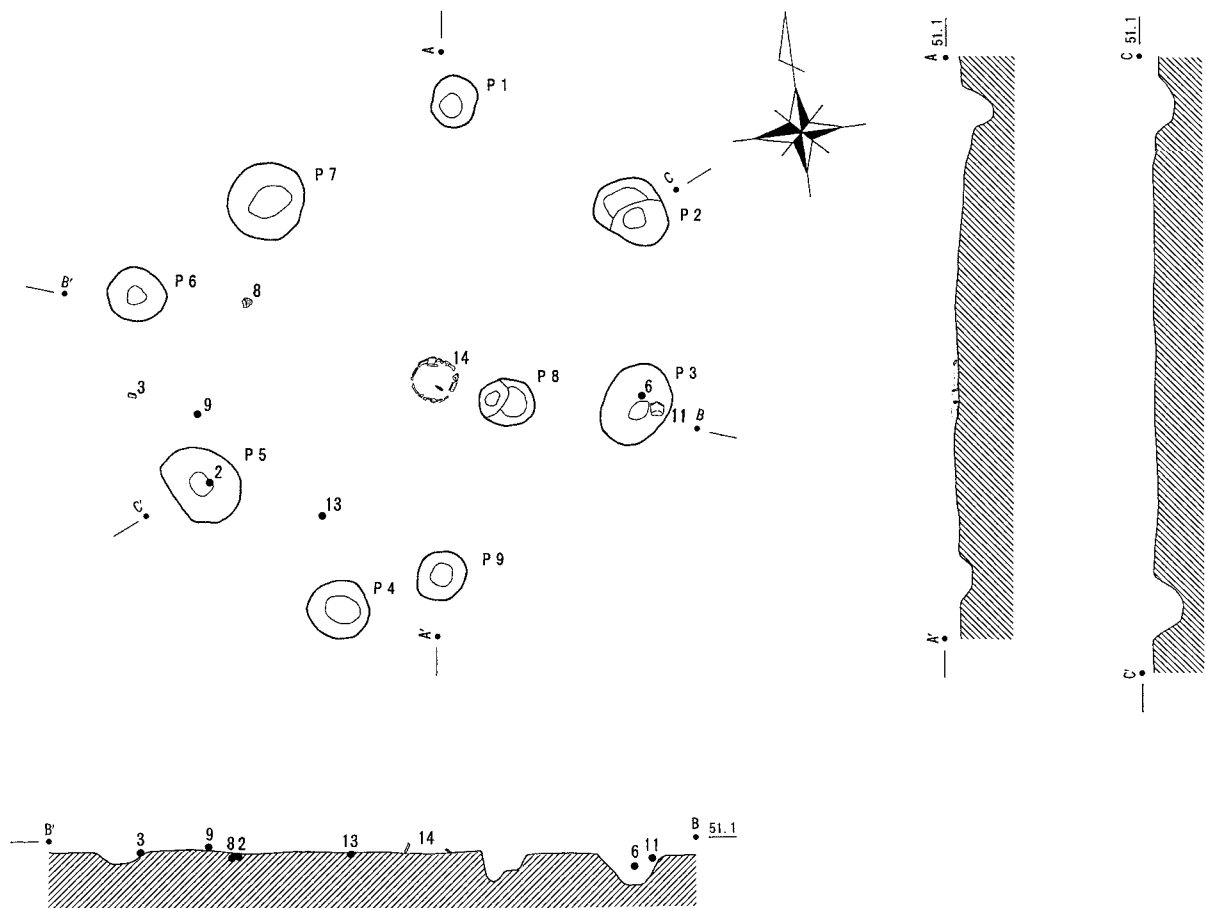
炉は地床炉で、規模は長軸56cm、短軸45cmの円形を呈し、深さ15cmをはかる。火床部及び壁面のロームに弱い被熱痕が認められた。

出土遺物

1はP1から、2、3はP2からの出土である。

縄文時代中期後半土器 (第30図1～3)

1～3は地文に縄文を施す土器で、沈線による磨消縄文が垂下している。



第31図 1号竖穴状遺構 (1/60)

9：1号竖穴状遺構

1号竖穴状遺構は調査区の南西側、J-3号住居址の西側で検出した。確認調査の段階で確認面に伏甕(第32図14)を検出したため、周辺の精査を行い、遺構確認を行った。炉は検出されなかったが、柱穴を検出したため竖穴状遺構とした。掘り込みがないため壁は確認できなかった。規模、主軸方位は不明である。柱穴はP1～P9の9本を検出した。径35～60cm、深さ11～30cmをはかる。南側のP9は径40cm、深さ8cmの円形の掘り込みとなる。

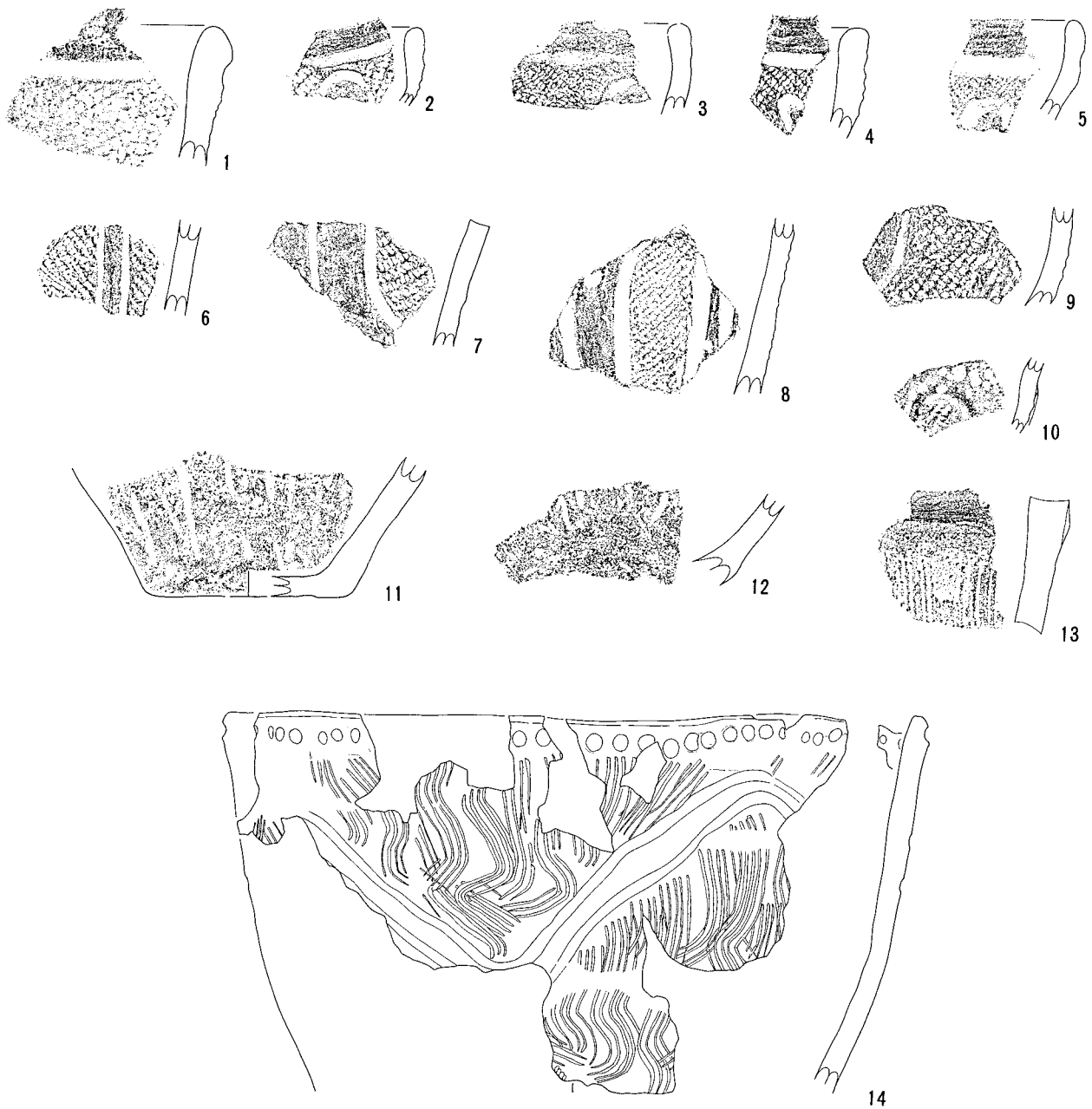
出土遺物

14は床面から出土した伏甕である。

縄文時代中期後半土器(第32図1～14・図版7-14)

1～12は地文に縄文を施す土器である。1～5は口縁部で、無文の口縁部に1条の沈線が横走する。2～5は逆「U」字状の沈線が垂下している。6～9は磨消縄文が垂下する胴部破片である。7～9は沈線が「U」字状や逆「U」字状に施されている。10は低い隆帯が逆「U」字状に垂下している。11、12は胴部下半から底部破片で、磨消縄文としているが、胴部下端までは垂下せず、無文となっている。

13、14は地文に条線を施す土器である。13は1条の低い隆帯が横走する。14はやや外反しながら立ち上がり口縁部へ至る。地文の条線は波状や鋸歯状に垂下している。口縁部に沿って刺突文が穿たれ、胴部には2条一對の沈線による大振りな波状文が施されている。胴部下端に地文が縄文となる箇所がある。



第32図 1号竪穴状遺構出土遺物 (1/3)

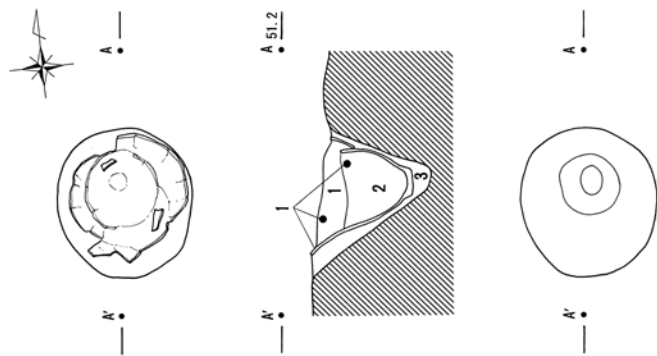
10：1号埋甕

調査区の北側、J-1号住居址の西側で検出した。平面プランは円形を呈し、径55cm、深さ48cmをはかる。底面から7cmの位置に土器が埋設されていた。

出土遺物

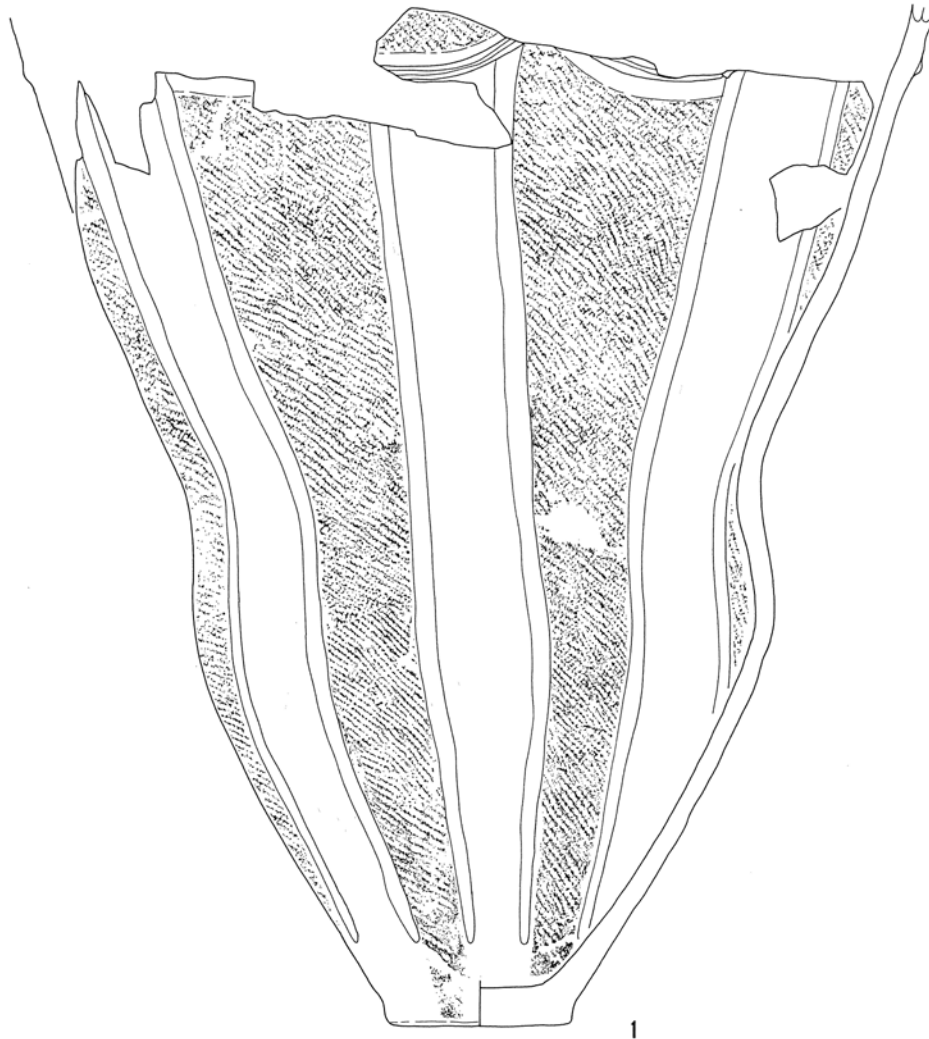
縄文時代中期後半土器 (第33図1・図版8-1)

1は口縁部から底部で、口唇部が欠損している。小形の底部から外反しながら立ち上がり、胴部中位やや下側で一度括れてから口縁まで直線的に立ち上がる。地文は縄文で、口縁部は隆帯による楕円区画文と思われる。胴部は沈線による幅の広い磨消縄文が垂下している。



1号埋室土層

- 1層 暗褐色土 ローム粒子を微量含み、炭化物粒子を極微量含む。
- 2層 黒褐色土 ローム粒子を微量含む。
- 3層 暗褐色土 ローム粒子を含む。



第33図 1号埋室 (1/30)、出土遺物 (1/4)

11：2号埋室

調査区の北側、J-2号住居址の西側で検出した。北側に攪乱を受けていたが、平面プランは円形を呈すると思われる。径32cm、深さ9cmをはかる。底面から1cmの位置に土器が埋設されていた。

出土遺物

縄文時代中期後半土器 (第34図1・図版8-1)

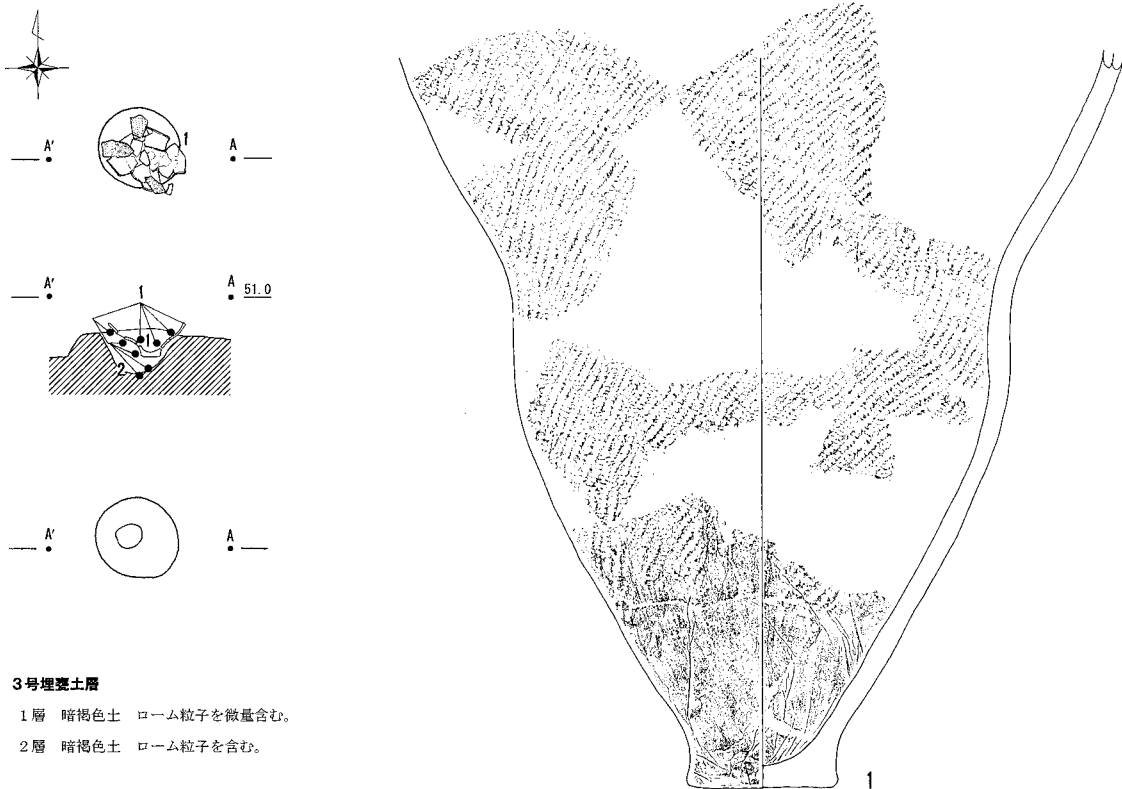
1は底部から胴部の破片で、地文に条線を施す。底部の周辺は土器表面が磨耗している。



2号埋室土層

- 1層 黒褐色土 ローム粒子を微量含む。
- 2層 暗褐色土 ローム粒子を含む。

第34図 2号埋室 (1/30)、出土遺物 (1/3)



3号埋室土層

- 1層 暗褐色土 ローム粒子を微量含む。
- 2層 暗褐色土 ローム粒子を含む。

第35図 3号埋室 (1/30)、出土遺物 (1/3)

12：3号埋室

調査区の東側、J-5号住居址覆土中で検出した。新旧関係は3号埋室が新しく、J-5号住居址が古い。平面プランは円形を呈する。径32cm、深さ18cmをはかる。底面から6cmの位置に土器が埋設されていた。

出土遺物

縄文時代中期後半土器 (第35図1・図版8-1)

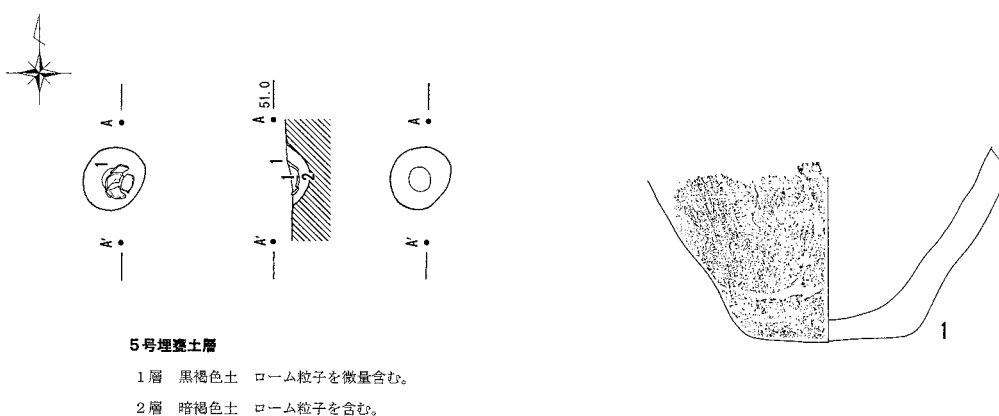
1は底部から胴部の破片で、地文は縄文である。突出した底部から立ち上がり、胴部中位で括れを持つ。



4号埋室土層

- 1層 暗褐色土 ローム粒子を微量含む。
- 2層 暗褐色土 ローム粒子を含む。

第36図 4号埋室 (1/30)、出土遺物 (1/3)



5号埋室土層

- 1層 黒褐色土 ローム粒子を微量含む。
- 2層 暗褐色土 ローム粒子を含む。

第37図 5号埋室 (1/30)、出土遺物 (1/3)

13：4号埋室

調査区の北側、J-1号住居址の南側で検出した。平面プランは円形を呈する。径33cm、深さ11cmをはかる。底面に接する位置に土器が埋設されていた。

出土遺物

縄文時代中期後半土器 (第36図1・図版8-1)

1は胴部の破片で、口縁部及び底部を欠損している。地文に縄文を施し、磨消縄文が垂下している。

14：5号埋室

調査区の北端、J-1号住居址の北側で検出した。平面プランは円形を呈する。径25cm、深さ10cmをはかる。底面から4cmの位置に土器が埋設されていた。

出土遺物

縄文時代中期後半土器 (第37図1・図版8-1)

1は無文の底部の破片である。2条一対の沈線が垂下している箇所を確認できる。

15：1号土壙

調査区の東側、J-4号住居址の南西側で検出した。J-4号住居址の柱穴と重複しており、新旧関係は土壙が新しく、J-4号住居址が古い。遺存状態は良好である。平面プランは円形を呈し、規模は径1.6m、深さ67cmをはかる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、上面で開いている。底面は平坦である。

出土遺物

縄文時代中期後半土器（第38図1～8）

1は口縁部付近の破片である。地文に縄文を施し、隆帯による文様区画を行っている。2は口縁部で、3条の凹線が逆「U」字状に垂下している。3～8は胴部破片で、地文に縄文を施している。3は1条の隆帯が垂下している。4～8は沈線による磨消縄文が垂下している。

16：2号土壙

調査区の南側、J-3号住居址床面、炉の東側で検出した。西側で4号土壙と重複している。新旧関係は4号土壙より新しく、J-3号住居址より古い。遺存状態は良好である。平面プランは円形を呈し、規模は径1.3m、深さ60cmをはかる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦で、中央西寄り径20cm、深さ22cmのピットを検出した。

出土遺物

縄文時代中期後半土器（第39図1～5・図版9-5）

1は口縁部で、刺突文を伴う隆帯が横走し、隆帯に沿って沈線によるナデ整形を行っている。2～4は地文に縄文を施している。2は頸部で、断面三角形の隆帯が横走し、隆帯上半に刺突文を施している。3は半截竹管文が斜位に垂下する。4はやや丸みのある底部を持つ。胴部に沈線による磨消縄文と波状沈線が垂下している。

石器

石錐（第39図6・図版9-6）

6の裏面は剥離面を大きく残している。摘み部の調整は粗く、錐部は密に調整剥離を施している。石質は黒耀石である。

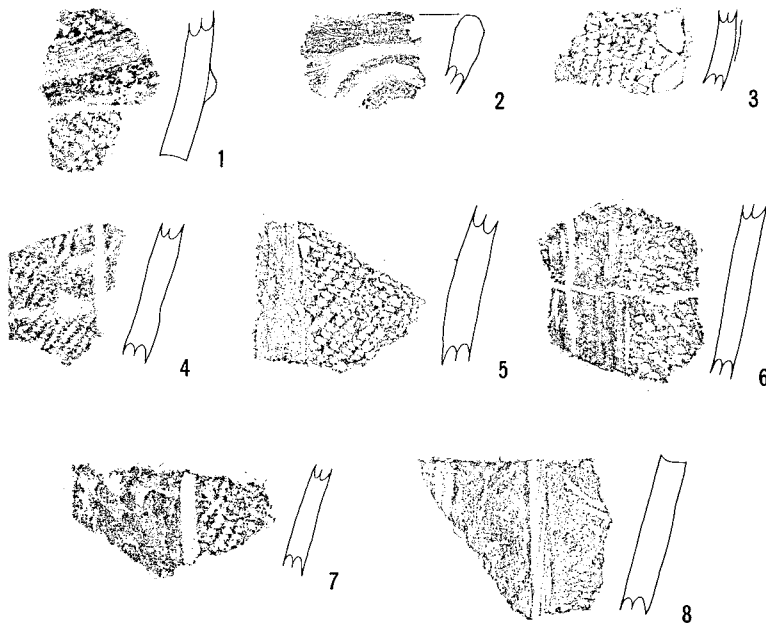
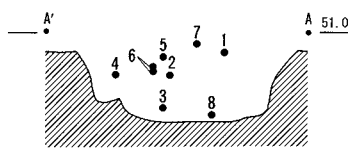
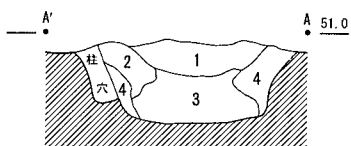
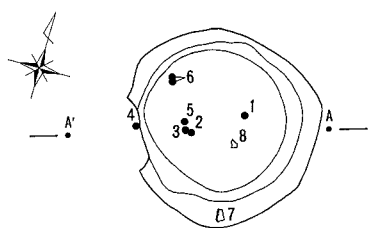
17：3号土壙

3号土壙は調査区の東側で検出した。北側でJ-5号住居址と重複している。新旧関係は3号土壙が新しく、J-5号住居址が古い。遺存状態は良好である。覆土中から多量の土器を検出した。平面プランは円形を呈し、規模は径1.9m、深さ50cmをはかる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、上面で開いている。底面は平坦で、壁際に沿って小ピットが約30cm間隔で穿たれていた。

出土遺物

縄文時代中期後半土器（第41図1～12・第42図13～22・図版9-3、6、12）

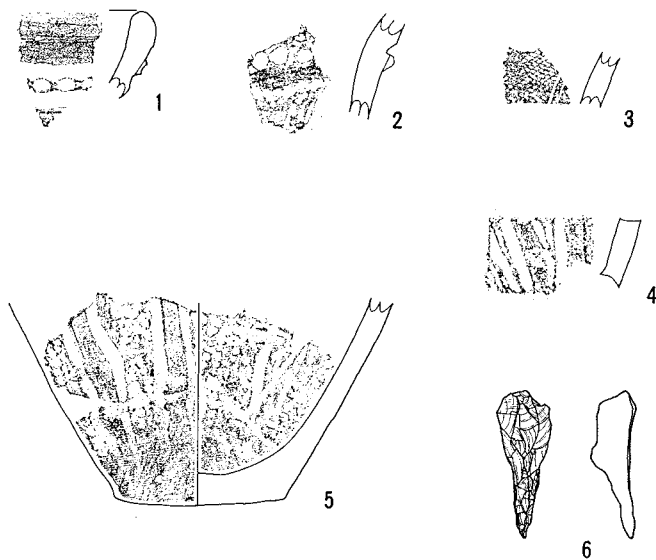
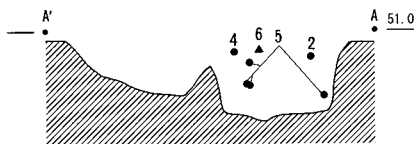
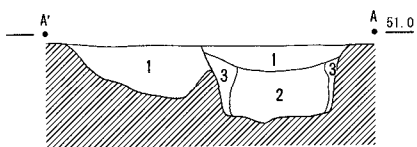
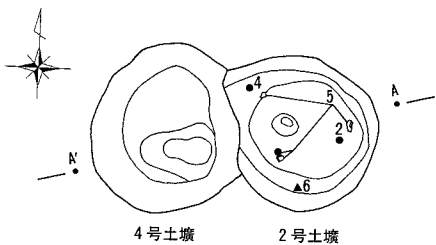
1～12は地文に縄文を施す土器である。1～5は口縁部に隆帯による円文や楕円区画文を持つ。2は区



1号土壙土層

- 1層 黒褐色土 ローム粒子を微量含む。
- 2層 暗褐色土 ローム粒子、ローム小ブロックを含む。
- 3層 黒褐色土 炭化物粒子を微量、ローム粒子を極微量含む。
- 4層 暗黄褐色土 ローム小ブロックを含む。

第38図 1号土壙 (1/60)、出土遺物 (1/3)



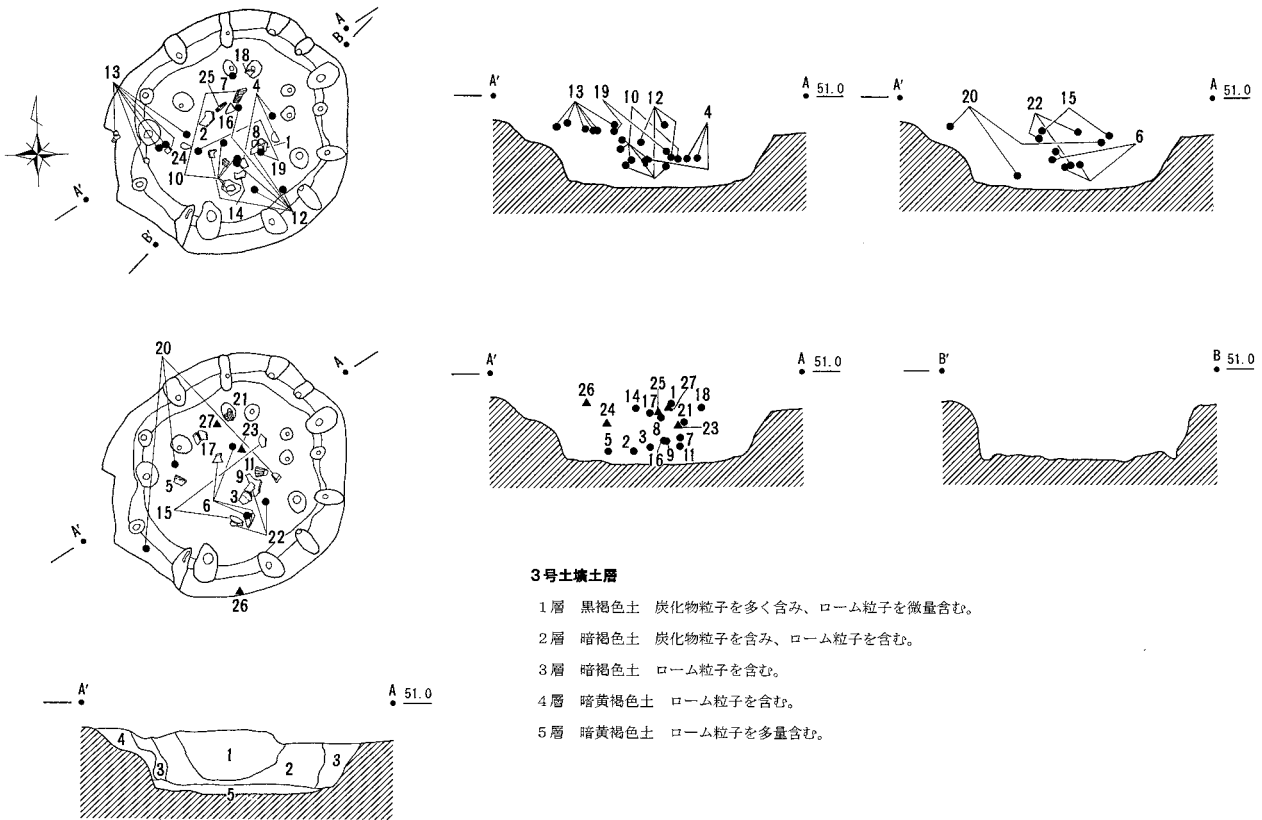
2号土壙土層

- 1層 暗褐色土 ローム粒子を微量含む。
- 2層 " " ローム粒子を極微量含む。
- 3層 暗黄褐色土 ロームブロックを含む。

4号土壙土層

- 1層 暗黄褐色土 ロームブロックをを多量含む。

第39図 2、4号土壙 (1/60)、出土遺物 (1/3) 但し、6は (1/2)



第40図 3号土壌 (1/60)

画文の規則性が崩れ始めており、口縁部下端の隆帯区画が不明瞭になっている。3は円窓を有する突起を持つ。2、3、5は区画文間の隆帯を肥厚させている。2、4の胴部は磨消縄文が垂下する。6は直線的に立ち上がる器形で、幅の狭い無文の口縁部に刺突文を有する隆帯が横走している。胴部は磨消縄文が垂下する。7は縄文を押圧した2条の隆帯が横走している。8は口縁部に刺突文と沈線が横走り、胴部は2条一對の沈線が斜位に垂下している。9、10は頸部から胴部で、外反しながら立ち上がり、頸部で緩やかに内彎している。無文の頸部に1条の沈線が横走り、胴部は「コ」字に区画した磨消縄文が垂下する。11、12は胴部から底部の破片で、磨消縄文が垂下している。

13は地文に縄文と波状条線が施された土器である。2条一對の沈線が横走り、波頂部や波底部から2条一對の沈線が垂下している。

14~19は地文に条線が施された土器である。14は頸部に沈線による区画文が横走り、2条の沈線が垂下する。17は口縁部に刺突文と沈線が横走り、胴部に「コ」字状の沈線が垂下している。18、19は幅の狭い無文の口縁部を持ち、胴部は沈線による「コ」字状の区画文が垂下する。18の条線は横位施文である。

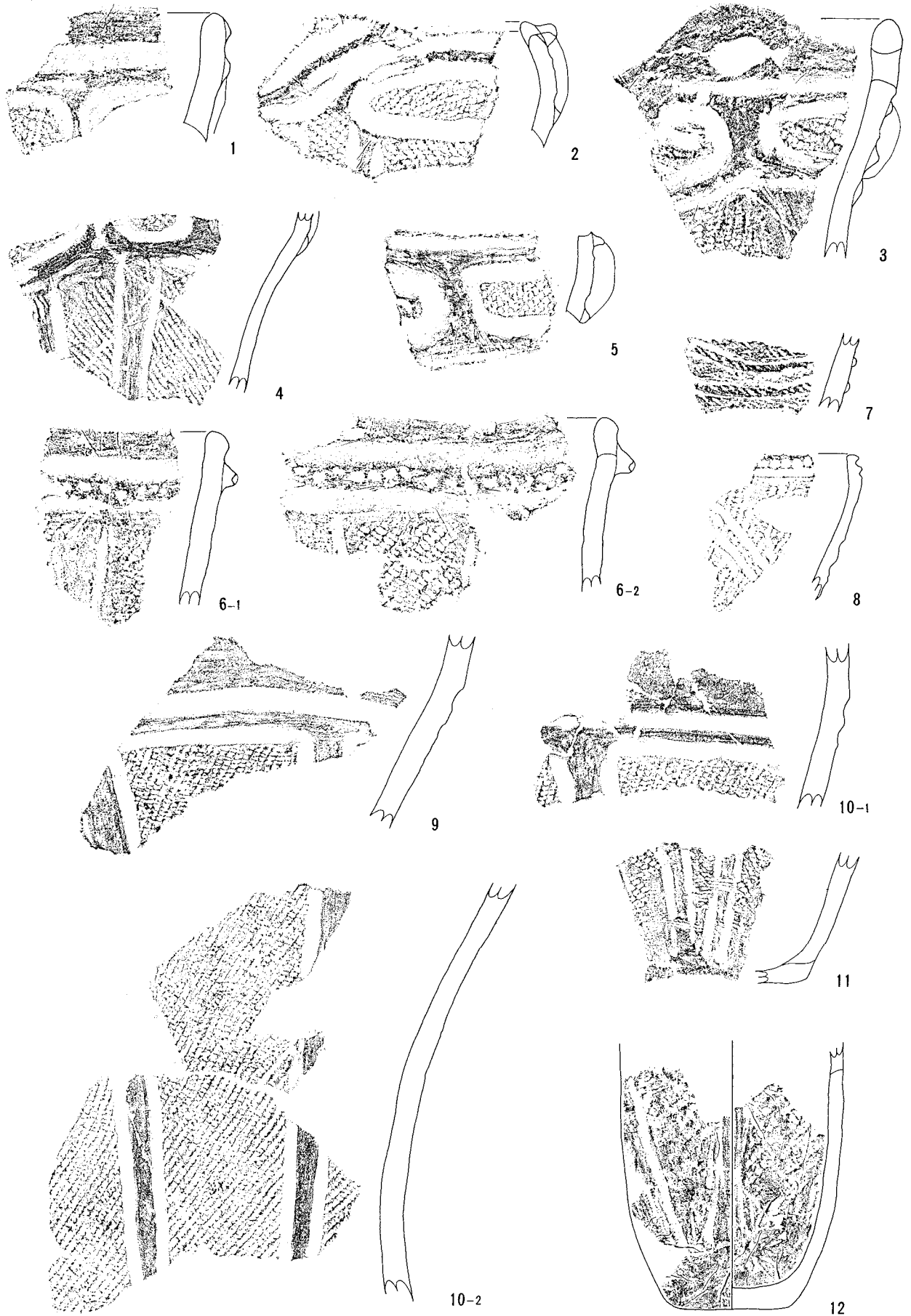
20、21は地文に沈線を施す土器である。頸部から大きく外反する器形で、刺突文を有する隆帯を横走り及び垂下させた後、沈線を充填している。21は2条一對の沈線が垂下し、沈線を斜位に施文している。

22は無文の波状口縁部で、口縁部内面を肥厚させている。

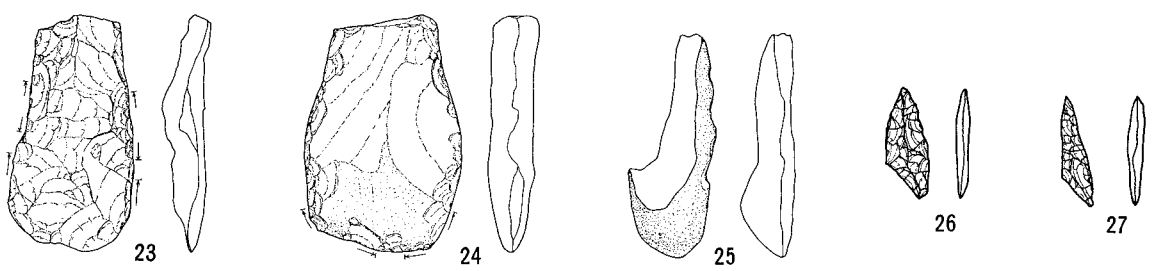
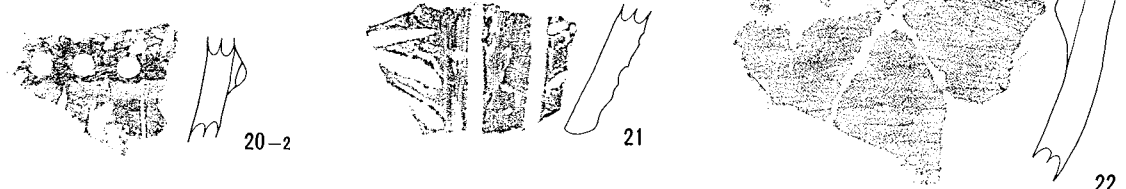
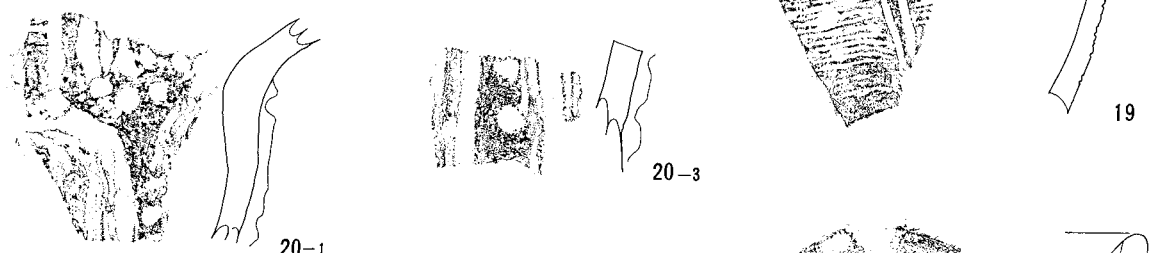
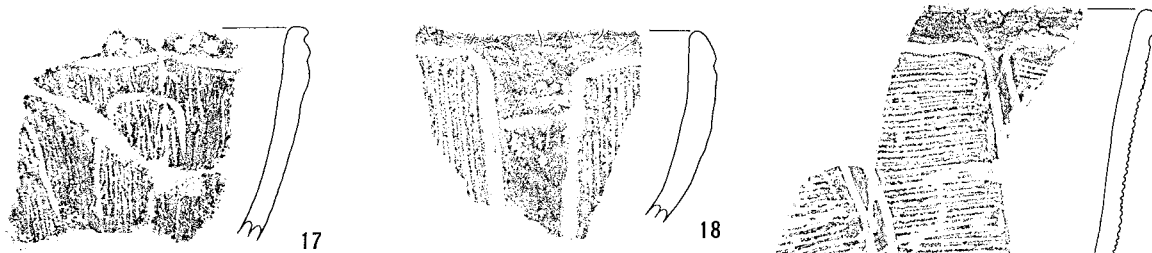
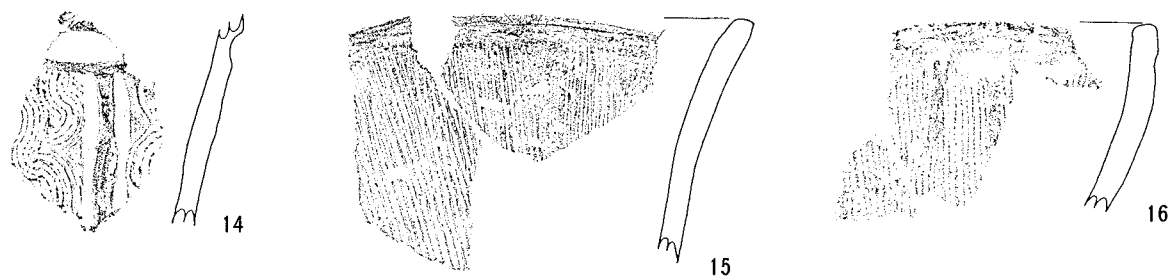
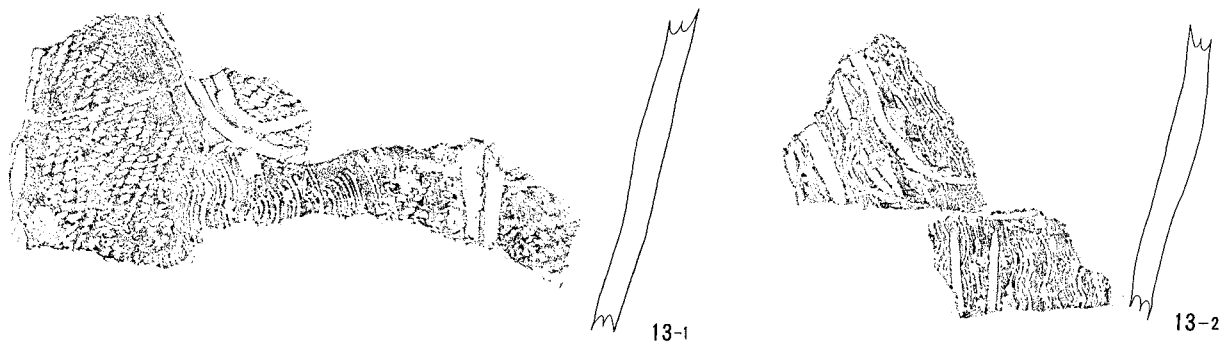
石器

打製石斧 (第42図23、24・図版9-23、24)

23、24は分銅型を呈する。両側縁に調整剥離を施し、23は磨滅痕がみられる。刃部は光沢のある使用痕となっている。長さ7.4cm、幅4.9cm、重さ78gをはかる。24の刃部も磨耗がみられる。長さ9.4cm、幅6.1cm、



第41图 3号土壙出土遺物 (1) (1/3)



第42図 3号土壙出土遺物 (2) (1/3) 但し、26、27は (1/2)

重さ154gをはかる。石質はともに頁岩である。

敲石（第42図25）

25は基部を欠損する。両側縁に敲打痕が残り、敲打によると思われる剥離がみられる。先端部に弱い敲打痕が僅かにみられる。石質は片麻岩である。

石鏃（第42図26、27）

26、27は基部に抉りをもつが、26は基部を、27は片側半分を欠損する。26の抉りは浅い。26は長さ2.2cmをはかる。石質はともに黒耀石である。

18：4号土壙

J-3号住居址炉の被熱した底面は、ローム層に黒色土が混入しており掘り下げたところ、2号土壙と重複する本土壙を検出した。新旧関係はJ-3号住居址、2号土壙より古い。平面プランは円形を呈し、規模は径1.3m、深さ40cmである。壁はやや傾斜を持って立ち上がる。覆土はロームを主体としており、埋戻されたと考えられる。底面南側で深さ15cmほど落ち込んでいる。遺物は出土していない。

19：5号土壙

調査区の東側、J-6号住居址の北側で検出した。遺存状態は良好である。平面プランは円形を呈し、規模は径1.2m、深さ50cmをはかる。壁は傾斜を持って立ち上がり、上面で開いている。底面は平坦である。

出土遺物

縄文時代中期後半土器（第43図1～5・図版9-5）

1は無文の口縁部破片である。2～5は地文に縄文を施している。2は口縁部で、2条の沈線が逆「U」字状に垂下していると思われる。口縁部の縄文は沈線施文後に施されている。5は胴部中位の破片で、上半は外反しながら立ち上がる。垂下する沈線による充填縄文間は文様帯が上下に分かれ、上半は沈線を「U」字状に施し、下半はワラビ手文が垂下している。

20：6号土壙

調査区の東側、J-1号住居址の南側で検出した。遺存状態は良好である。平面プランは円形を呈し、規模は径1.15m、深さ55cmをはかる。壁は傾斜を持って立ち上がる。底面は平坦である。

出土遺物

縄文時代中期後半土器（第44図1～3）

1～3は地文に縄文を施している。1は磨消縄文が垂下する。2、3は沈線が垂下している。

21：7号土壙

調査区の東側、J-1号住居址の南側で検出した。遺存状態は良好である。平面プランは円形を呈し、規模は径1.15m、深さ45cmをはかる。壁は傾斜を持って立ち上がる。底面は平坦である。



5号土壌土層

- 1層 暗褐色土 ローム粒子を微量含む。
- 2層 " " ローム粒子を少量含む。
- 3層 " " ローム粒子を極微量含む。
- 4層 暗黄褐色土 ローム粒子を含む。

第43図 5号土壌 (1/60)、出土遺物 (1/3)

出土遺物

縄文時代中期後半土器 (第44図1～8)

1は無文の口縁部である。2～4は地文に縄文を施す土器である。2は口縁部で、2条の沈線が逆「U」字状に垂下していると思われる。3は2条一對の沈線と波状沈線が垂下している。

5～7は地文に条線を施す土器である。5、6は口縁部で、5は肥厚した口縁部を楕円形に削り取り口縁部文様を作出している。6は連続刺突文及び沈線が横走り、胴部は沈線による方形の文様区画としている。

8は地文に沈線を施す土器である。刺突文を施す隆帯を垂下した後、横走る沈線を施している。胴部下半は沈線が垂下している。底部は立ち上がりに丸みを持っている。

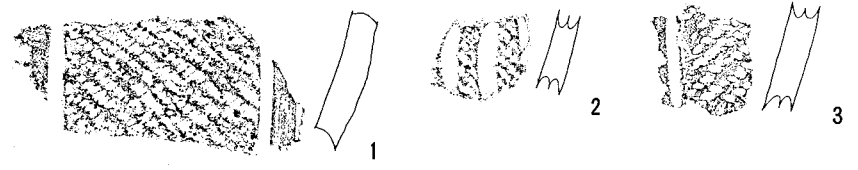
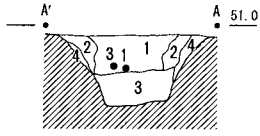
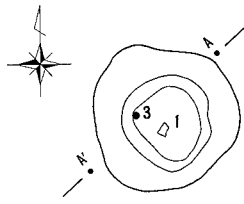
22：8号土壌

調査区の東側で検出した。北側でJ-1号住居址と重複している。新旧関係は8号土壌が古く、J-1号住居址が新しい。遺存状態は良好である。平面プランは円形を呈し、規模は径1.25m、深さ35cmをはかる。壁は傾斜を持って立ち上がる。底面は平坦で、中央部にピットが穿たれていた。

出土遺物

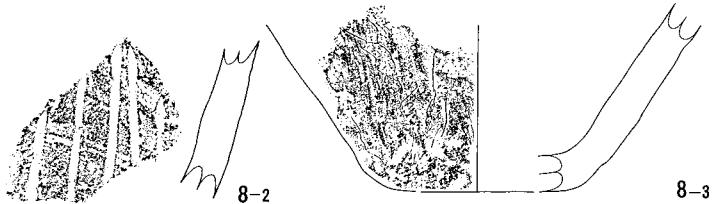
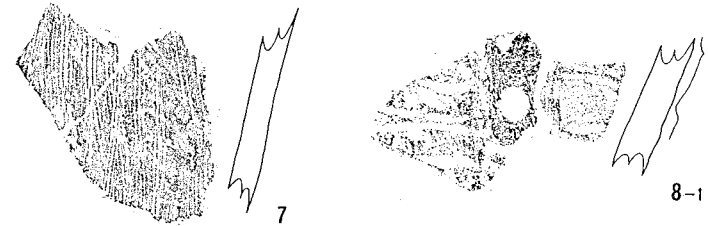
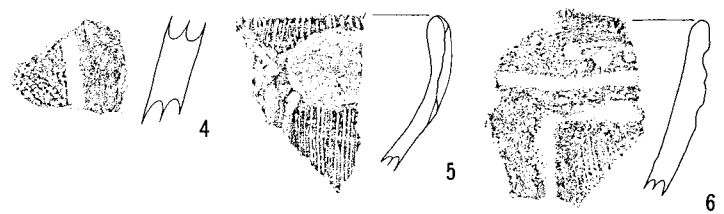
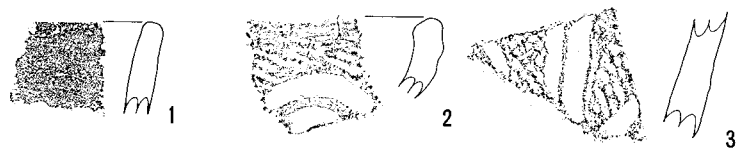
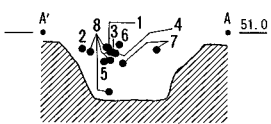
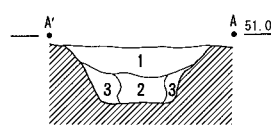
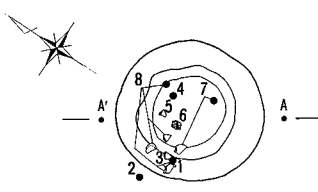
縄文時代中期後半土器 (第44図1～4)

1は地文は縄文で、沈線による磨消縄文が垂下する。2は地文に条線を施している。3は無文の胴部下半の破片である。4は底部の破片である。



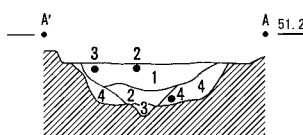
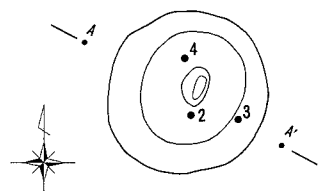
6号土壌土層

- 1層 暗褐色土 ローム粒子を微量含む。
- 2層 " ローム粒子を含む。
- 3層 " ローム粒子を極微量含む。
- 4層 暗黄褐色土 ローム粒子を多量含む。



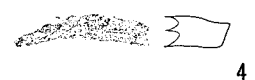
7号土壌土層

- 1層 暗褐色土 ローム粒子を微量含む。
- 2層 " ローム粒子を極微量含む。
- 3層 暗黄褐色土 ローム粒子を含む。

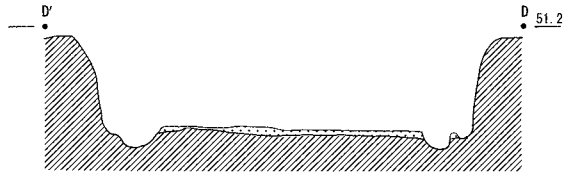
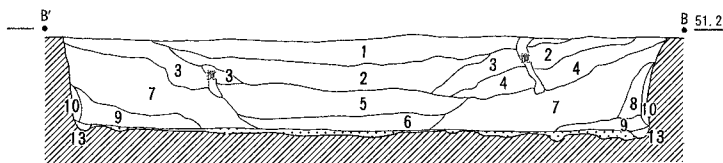
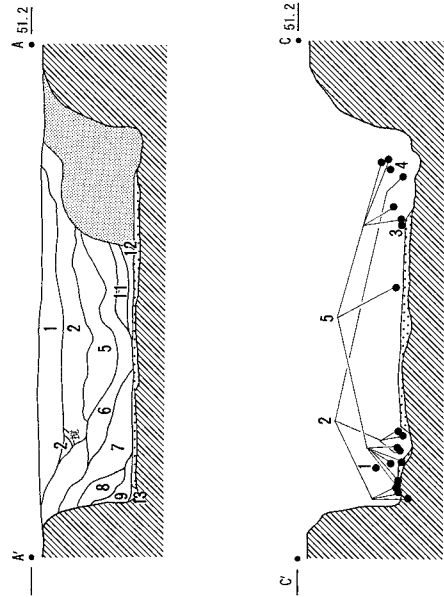
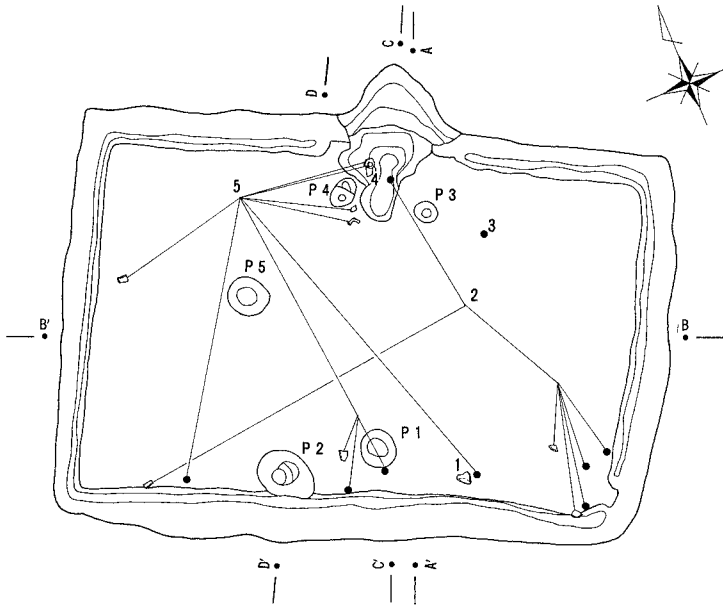


8号土壌土層

- 1層 暗褐色土 ローム粒子を微量含む。
- 2層 " ローム粒子を極微量含む。
- 3層 " ローム小ブロックを含む。
- 4層 暗黄褐色土 ローム粒子を含む。

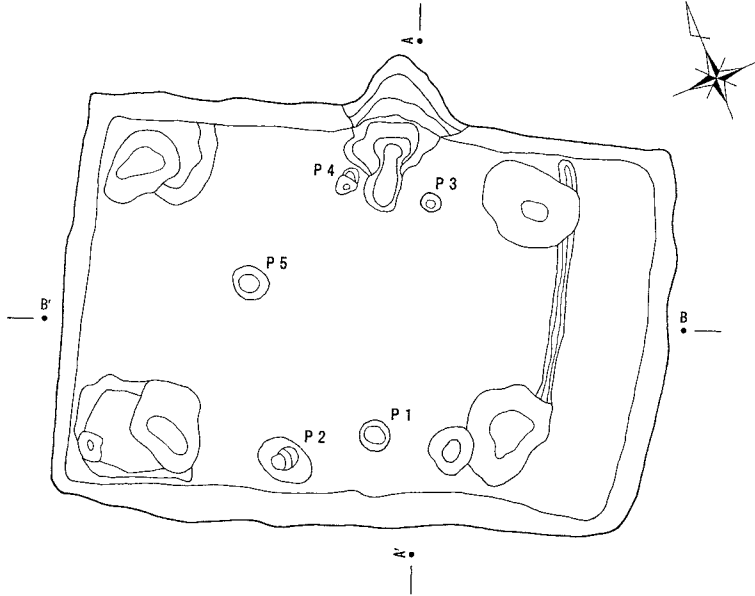


第44図 6、7、8号土壌 (1/60)、出土遺物 (1/3)



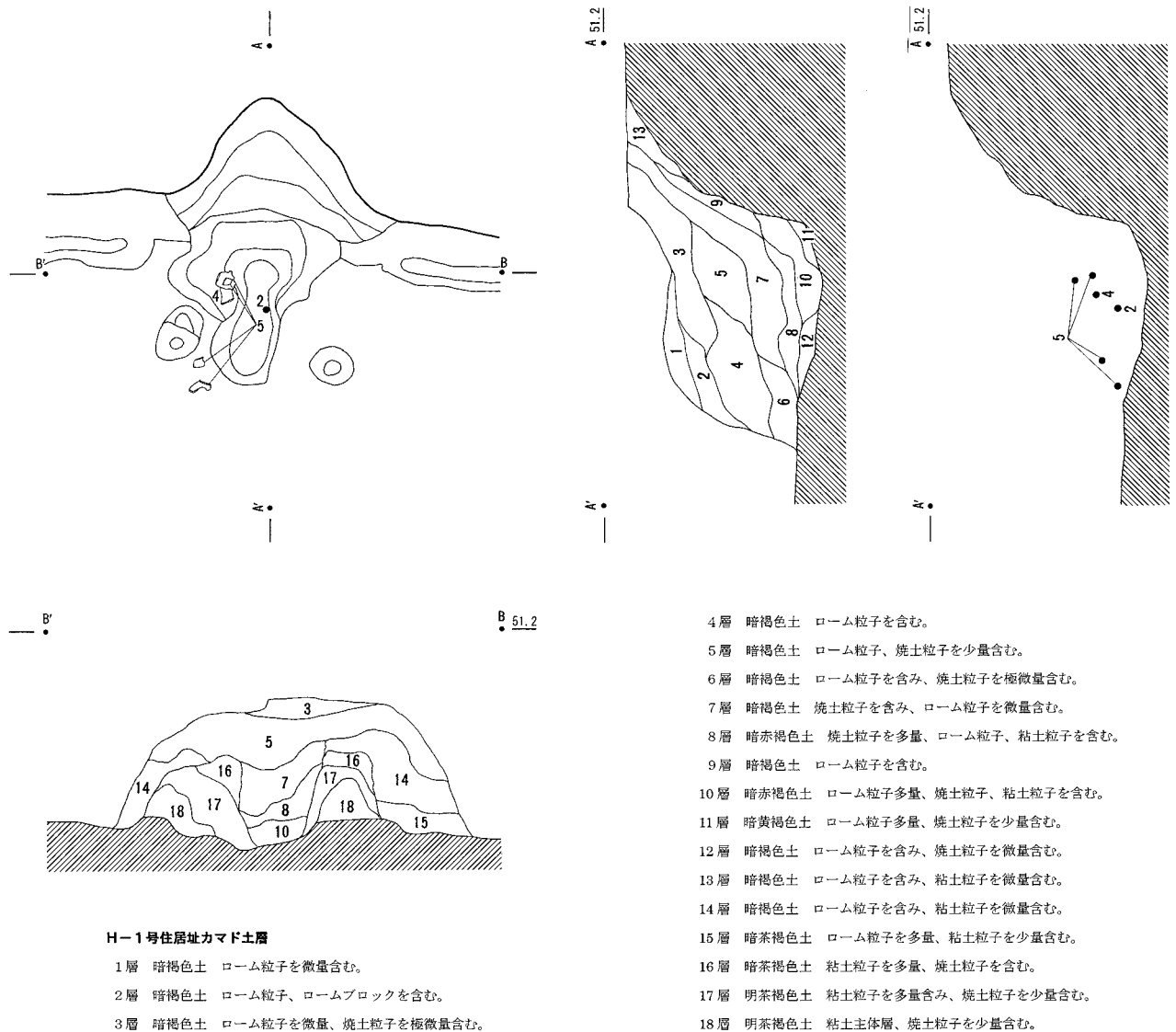
H-1号住居址土層

- 1層 黒褐色土 ローム粒子を極微量含む。
- 2層 黒褐色土 ローム粒子を微量含む。
- 3層 暗褐色土 ローム粒子を微量含む。
- 4層 暗褐色土 ローム粒子を少量、ローム小ブロックを極微量含む。
- 5層 黒褐色土 ローム粒子を少量含む。
- 6層 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックを含む。
- 7層 暗褐色土 ローム粒子、ローム小ブロックを含む。
- 8層 黒褐色土 ローム粒子を含む。
- 9層 暗黄褐色土 ローム粒子、ローム小ブロックを含む。
- 10層 暗黄褐色土 ローム粒子を多量含む。
- 11層 暗褐色土 ローム粒子を含む。
- 12層 暗褐色土 ローム粒子を含み、焼土粒子を極微量含む。
- 13層 暗黄褐色土 ローム粒子を含む。



貼床下状況図

第45図 H-1号住居址 (1/60)



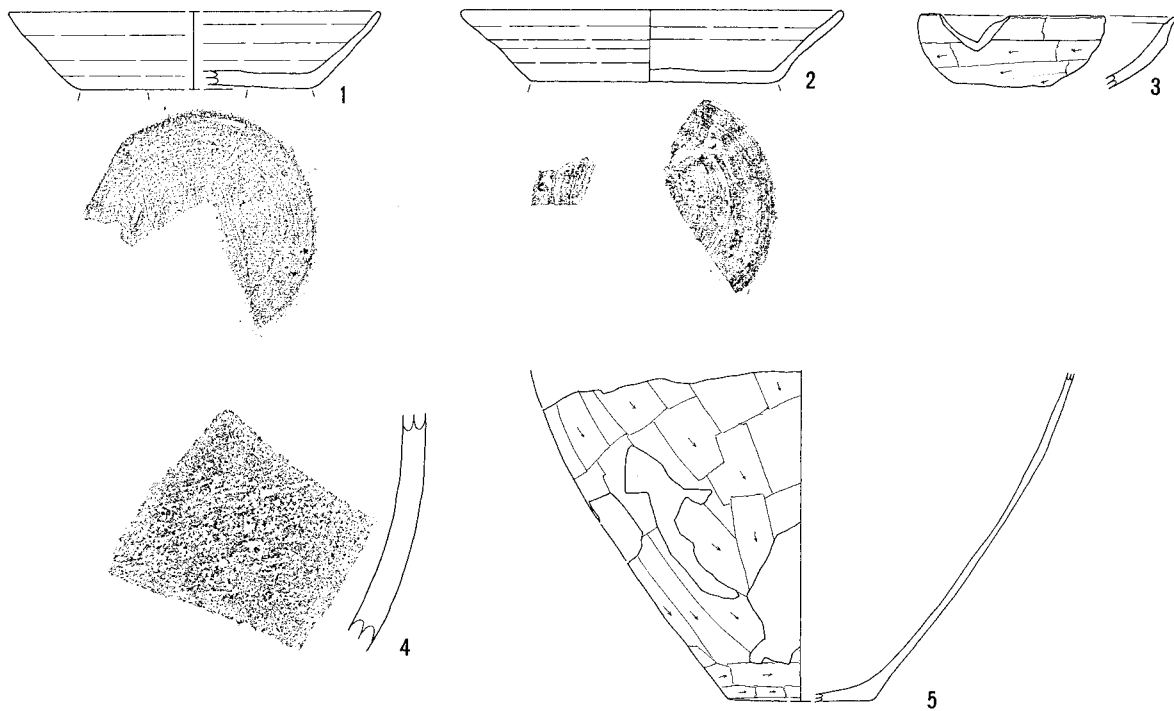
第46図 H-1号住居址カマド (1/30)

23：H-1号住居址

調査区中央で検出した。遺存状態は良好である。平面プランは方形を呈し、南北3.3m、東西4.75m、主軸方位はN-28°-Eを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は75cmをはかる。周溝は幅10~15cm、深さ8cmの規模で巡っている。カマドは北壁中央に築かれている。床面は関東ロームを2~24cm埋め戻して構築されている。床面はカマド部から住居中央にかけて硬化が認められた。床面のロームを除去したところ、東壁側から拡張前の周溝1条を検出した。この周溝から東へ約60cm住居址を拡張したことになる。

カマド

遺存状態は良好である。両袖部には基礎で使用していたと思われる粘土の流れ込みが残っていた。平面プランはV字状を呈し、壁外へ45cm掘り込んでいる。幅1m、奥行き75cmをはかる。火床部は幅が狭く、床面から10cm程度掘り込まれている。規模は幅28cm、奥行き58cmである。火床部の左右に径20~25cm、深さ6~10cmのP3、P4を検出した。煙道は傾斜をもって立ち上がる。煙道のローム面及び、火床部両側



第47図 H-1号住居址出土遺物 (1/3)

の立ち上がり部は非常に良く焼けて赤色硬化していた。

出土遺物

1、2、4はカマドから出土している。2は住居址の広範囲で接合している。

坏形土器 (第47図1～3・図版9-1、2)

1、2は須恵器で、1の底部は回転糸切後外周部回転篋削り、2の底部は全面回転篋削りを行い、器内外面にはロクロ水挽き整形を施している。1、2ともに器高が低い器形を呈している。1の体部は直線的に立ち上がり口縁部に至る。焼成は還元焰焼成である。胎土に白色針状物質を含んでおり、南比企窯跡産である。2の体部は開き気味に立ち上がる。焼成は還元焰焼成である。胎土に白色針状物質を含んでおり、南比企窯跡産である。1は口径15cm、底径9.7cm、内底径9.6cm、器高2.8cm、2は推定口径14.6cm、底径9.2cm、内底径8.8cm、器高3.1cmをはかる。

3は土師器で、体部は緩やかに内彎し、口縁部で外反気味に立ち上がる。体部は横方向の篋削りを施している。口縁部は横方向のナデ整形を行い体部との境に弱い稜が出来ている。口縁部内面には段を有する。

甕形土器 (第47図4、5)

4は須恵器で、内彎する胴部器外面には横方向の篋削りを施している。焼成は酸化焰焼成である。

5は土師器の胴部から底部である。胴部器外面は斜め方向及び底部付近は横方向の篋削りを行っている。推定底径は5.7cmである。

第3章 西不動遺跡 - 2次調査 -

1：遺構外出土遺物

縄文時代中期後半土器（第48図1～12・図版10-1、5）

1は地文に撚糸を施す頸部から胴部の破片で、頸部で大きく外反する。頸部は無文で、胴部境に2条一对の隆帯が横走する。胴部は1条及び2条一对の隆帯及び波状隆帯が垂下している。

2～9は地文に縄文を施す土器である。2～7は口縁部で、2は隆帯により文様区画している。3は鉢形土器と思われ、1条の隆帯が横走する。4は口縁無文部まで及ぶ2条の弧状隆帯が垂下する。5は口唇部に山形の突起を有する。口縁部からワラビ手状の沈線が垂下している。6は逆「U」字状の沈線による磨消縄文が垂下する。7、8は胴部で、8は2条の波状隆帯が垂下する。9は1条の沈線が「U」字状に垂下している。

10、11は地文に条線を施す土器である。10は無文の口縁部に2段の連続刺突文が横走する。

12は無文の浅鉢形土器の胴部である。

石器

打製石斧（第48図13・図版10-13）

13は撥形を呈する。基部は欠損している。両側縁に調整剥離を施している。石質は砂岩である。

磨石（第48図14）

14は両面に磨痕がみられる。石質は砂岩である。

石皿（第48図15）

15は表面に擦痕が残っている。石質は石英閃緑岩である。

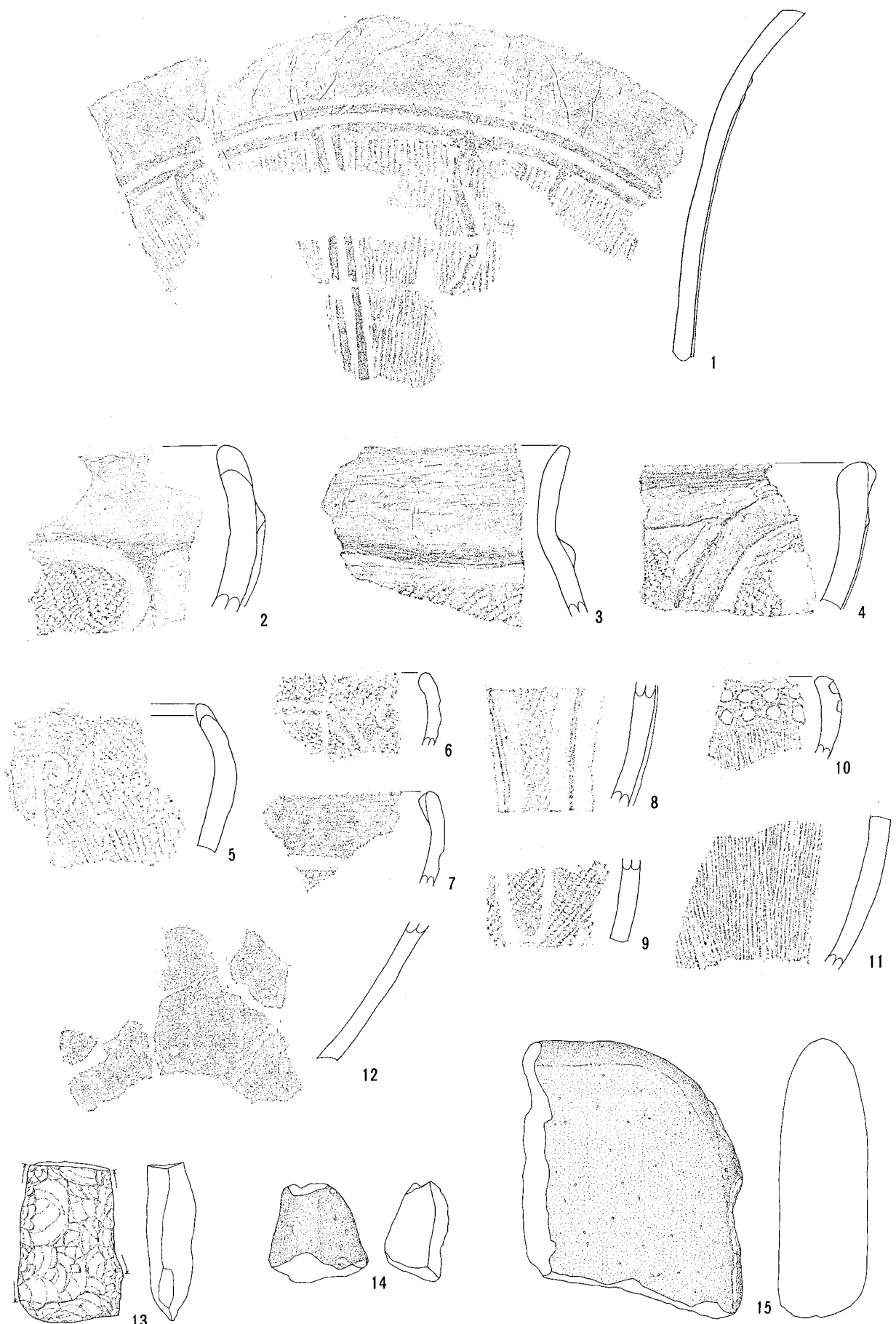
2：9号土壇

調査区の南側で検出した。遺存状態は良好である。平面プランは円形を呈し、規模は径90cm、深さ43cmをはかる。壁は緩やかな傾斜を持つが、土壇中位から底面に向かって窄まり、直線的に底面に至る。土壇上面から中位にかけて土器が纏まって出土した。

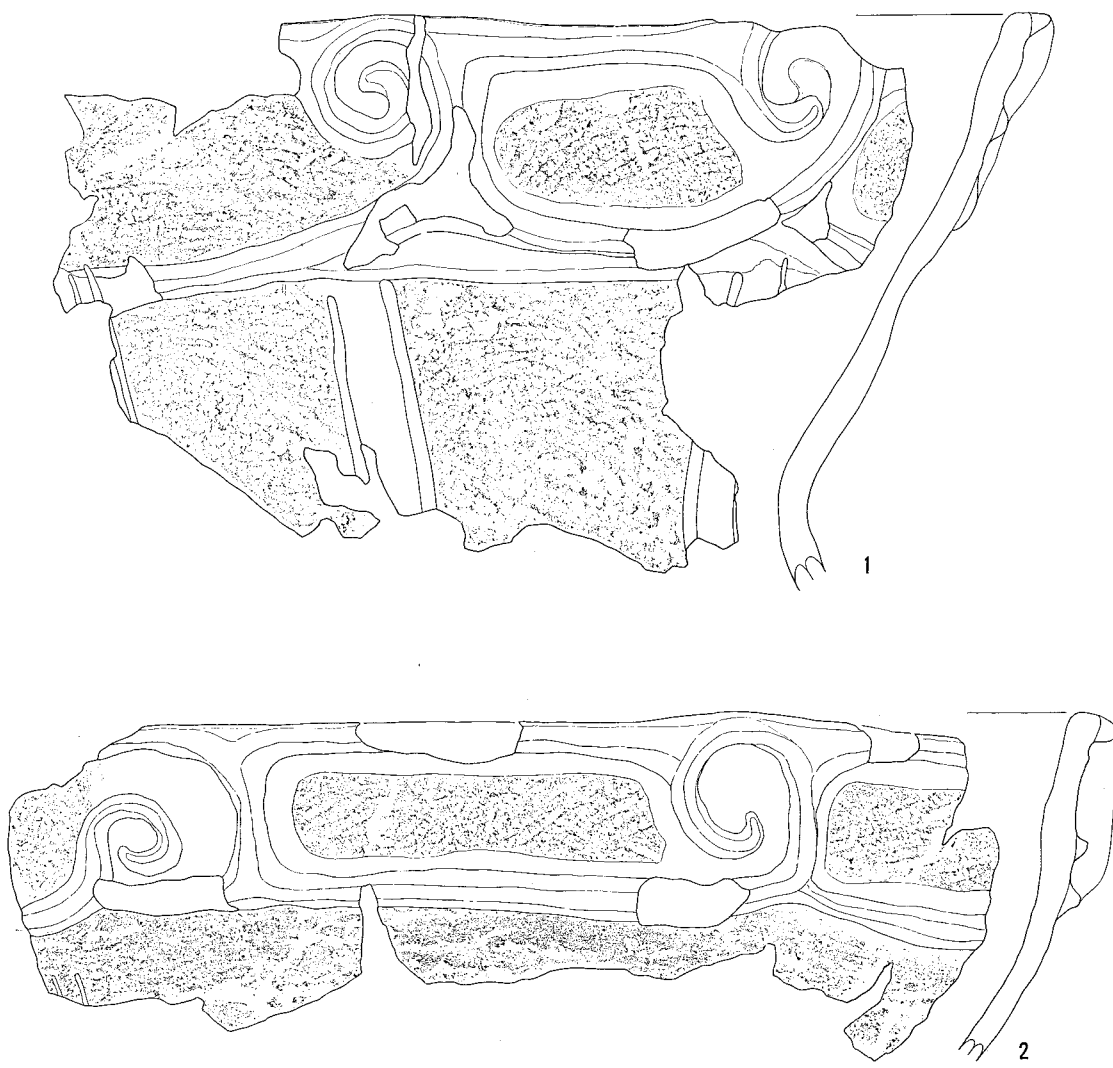
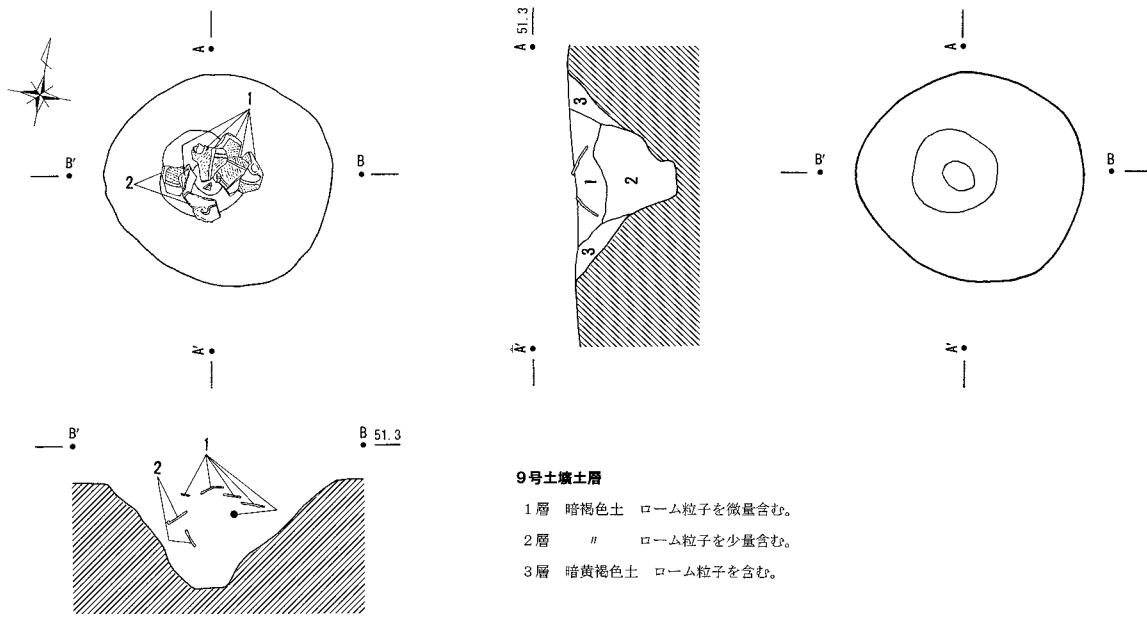
出土遺物

縄文時代中期後半土器（第49図1、2・図版10-1、2）

1、2は口縁部から胴部上半の破片で同一個体である。口縁部は地文に縄文を施す。隆帯による楕円区画文と渦巻文を施しているが、口縁部区画がやや崩れ始めている。胴部は2条一对の沈線による磨消縄文が垂下している。器面の一部は被熱により脆くなっている。



第48图 遺構外出土遺物 (1/3)



第49図 9号土壙 (1/60)、出土遺物 (1/3)

第4章 まとめ

1：遺構の時期について

今回の調査による縄文時代中期の検出遺構は、1次、2次調査合わせて住居址7軒、竪穴状遺構1基、土壇9基、埋甕5基であった。調査区の北東側は小畔川へ向けた斜面部となるため、集落の東側を調査したことになる。ここでは出土遺物から遺構の時期について新地平編年を参考に検討してみたい。

1期

中期中葉の新道式段階である。1は胴部下端から底部の破片で、区画文の一部と思われる隆帯に沿って三角押文が施されている。新地平編年では6期に該当すると思われる。この時期の土器は1次調査区遺構外出土遺物であるこの1点のみで、遺構は検出されていない。

2期

中期後半の加曾利EⅠ式段階である。2も調査区一括で遺構は検出していない。頸部は無文で、撚糸地文の胴部は1条及び2条一対の隆帯や波状隆帯が垂下している。新地平編年の10期に該当すると思われる。

3期

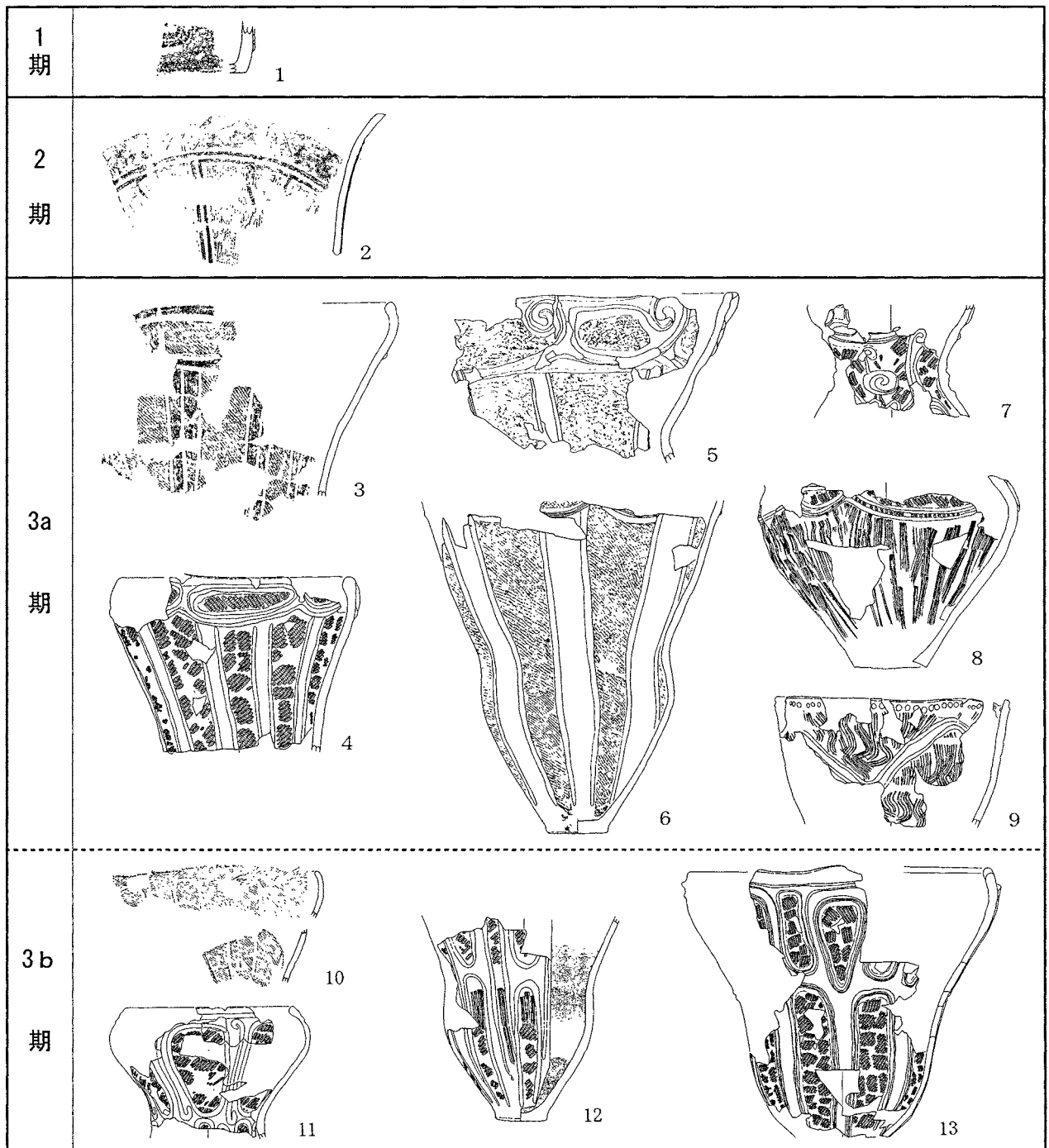
中期後半の加曾利EⅢ式段階で、今回の調査の主体をなす時期である。胴部に磨消縄文を持つ段階であるが、吉井城山類の出現や口縁部文様帯を有する一群を3a期、口縁部文様帯を喪失する一群を3b期と2細分した。新地平編年では12a～12c期に該当すると思われる。

3a期

本段階は加曾利EⅢ式古段階である。新地平編年の12a期から12b期にあたり、J-1号、J-3号、J-6号住居址、竪穴状遺構、1号埋甕、9号土壇等が該当すると思われる。3、8はJ-1号住居址出土で、3は大きく外傾し口縁部で弱く内彎する。口縁部は隆帯による楕円区画文を持つ。胴部は沈線による磨消縄文で、磨消内に1条の沈線が垂下する。8は鉢形土器で、楕円区画文内及び隆帯上は縄文、胴部の地文は条線となる。4はJ-6号住居址の炉体土器で、口縁部は隆帯による円文と楕円区画文が交互に配される。口縁部区画が波状となるが、隆帯による区画はしっかりしている。5は9号土壇出土で地文に縄文を施す。隆帯による口縁部区画は渦巻文を残すが、区画文がやや崩れはじめている。6は1号埋甕で、胴部中位に窄まりを持ち、直線的に立ち上がり口縁部に至る。口縁部区画は波状になり、胴部の磨消縄文は幅が広く、沈線が浅くなる。7はJ-3号住居址の炉体土器で、口縁部は太い隆帯による区画文を有すると思われる。胴部には2条一対の沈線による渦巻文が施され、渦巻文に向かって口縁部からワラビ手状の沈線が垂下している。垂下する沈線間は胴部中位で太い沈線による渦巻文に繋がる。9は竪穴状遺構の伏甕で、地文の条線は波状に垂下する。口縁部に沿って刺突文が穿たれ、胴部は2条一対の沈線による大振りな波状文を施す。波状沈線間は磨り消されている。連弧文系と考えられる。

3b期

加曾利EⅢ式新段階である。新地平編年の12b期から12c期にあたる。J-2号、J-5号住居址が該当すると思われる。J-1号住居址覆土からも出土している。10はJ-2号住居址出土で、口縁部文様帯を持たず、胴部は沈線を逆「U」字状に垂下させている。J-5号住居址の炉体土器である11は、大きく外反しながら内彎する口縁部へ至る器形で、胴部上半には沈線による楕円区画文とワラビ手文を交互に配している。12、13はJ-1号住居址出土で、12は胴部中位で対向する「U」字状、逆「U」字状文と、2条



第50図 土器変遷図

一対の沈線を交互に垂下させている。13は胴部中位から大きく開口縁部で弱く内彎する。胴部上半は口縁部に横走する1条の隆帯から楕円区画文が垂下し、楕円区画文間は逆三角形状に区画する。胴部下半は逆「U」字状に隆帯による磨消縄文を垂下させている。

遺跡の主体となる時期は加曽利EⅢ期となり、今のところ加曽利EⅣ期の柄鏡形住居址は検出されていない。本遺跡の西約500mには中期中葉から後期の大集落である宿東遺跡が隣接しており、継続期間が長く規模の大きな集落と継続期間が短い集落との関係性の解明が今後の課題である。

2：三角罎形土製品について

本遺跡 J-1 号住居址の覆土中から三角罎形土製品が出土した。正面 2 面と底面は地文に縄文を施し、中央に径 9mm の孔が穿たれている。側縁の一辺の長さは 5.8cm をはかる。J-1 号住居址は炉体土器や埋甕は無く、出土遺物はすべて覆土中であつたため住居址の時期決定は難しいが、覆土中の遺物は加曾利 E Ⅲ 期が主体であり、三角罎形土製品もこの時期の可能性が高いと考える。

三角罎形土製品は、1928 年に八幡一郎氏が考古学研究 2-3 「立體土製品」で、Ⅳ 類三角罎形を呈するものとされた土製品と分類し、三角柱を呈する土製品を三角罎形土製品とした。またその分布を関東、信濃、北陸としている。その後、1980 年の長野県考古学会誌 37 号で小林康夫氏が集成、各部位の名称を示した。埼玉県については深谷市（旧花園町）台耕地遺跡と皆野町新井遺跡が紹介されている。次いで 1983 年「縄文時代の研究 9」の「三角罎形土製品」で小島俊彰氏が集成を行い、埼玉県は小林氏の集成と同様、台耕地遺跡と新井遺跡の 2 遺跡となっている。

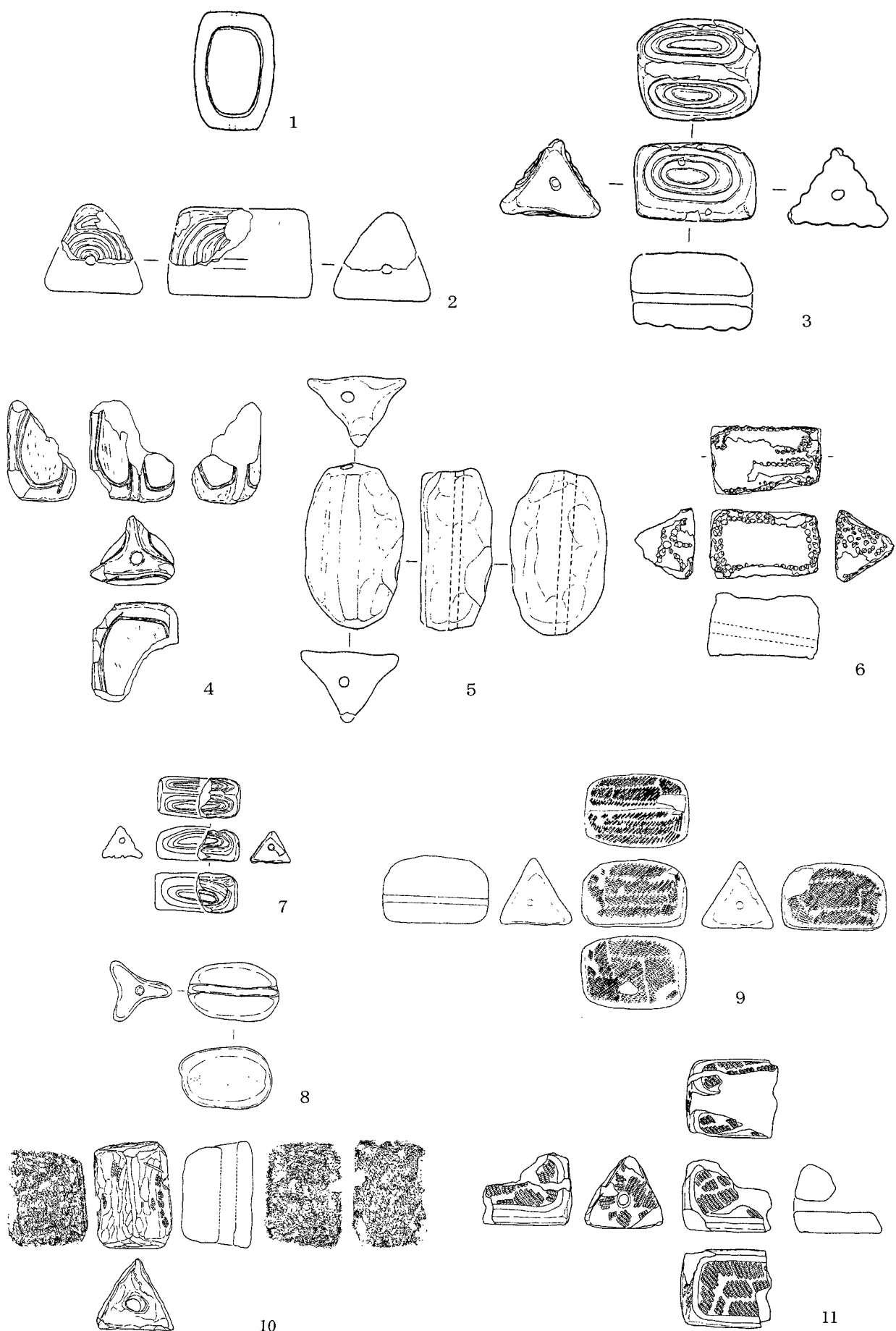
埼玉県周辺の出土例については、山梨県は田代孝氏により 3 点、長野県は小林氏集成時では 6 遺跡だったが、長野県上田市下前沖遺跡、深町遺跡、小諸市郷土遺跡、千曲市屋代遺跡、茅野市構井阿弥陀堂遺跡、中原遺跡などでも出土し、さらに 2 点が出土している中野市千田遺跡調査報告書では、長野県出土については 20 例足らずと記載されている。群馬県は谷藤保彦氏により 13 点が集成され、茨城県については常陸太田市滝ノ上遺跡発掘調査報告書で、茨城県常陸太田市滝ノ上遺跡、ひたちなか市柳沢太田房貝塚、日立市八反遺跡の 3 遺跡を集成している。この他、千葉県荒屋敷貝塚、中野僧御堂遺跡、神奈川県相模原市田名花ヶ谷戸遺跡、横浜市華蔵台遺跡、東京都国立市谷保東方遺跡、町田市鶴川遺跡群、西東京市下野谷遺跡、八王子市宇津木向原遺跡、鴨山遺跡、峰開戸遺跡、多摩ニュータウン No.72 遺跡、あきる野市西秋留野遺跡、前原・大上・北伊奈遺跡などからも出土している。

埼玉県内の三角罎形土製品については、1995 年に小宮山克己氏が上尾市宿前Ⅲ遺跡の発掘調査報告書で宿前Ⅲ遺跡のほか、秩父市皆野町新井出土、本庄市将監塚遺跡、本庄市（旧児玉町）思池遺跡、深谷市（旧花園町）台耕地遺跡、入間市久保遺跡の県内 6 遺跡 7 例の集成を行っている。文様については、沈線が周囲或いは重圈する程度で、装飾性に富んだものは認められないとし、入間市久保遺跡例のように地文に縄文が施されるのは希少例であろうとしている。時期については住居跡奥壁部分から出土しているが、他の遺物の出土状況から考えて、必ずしも住居に第 1 次的に伴うか疑問であるとしつつ、称名寺式古段階を下限とし、中期末から後期初頭に比定している。用途については、中軸孔がない資料も多く存在し、底面を意識して作られたと考えられる例も認められることから、孔に紐等を通して使われたのではなく、置いて使われたのではないかと考えられるとした。続く 1996 年、熊谷市（旧江南町）西原遺跡の発掘調査報告書で森田安彦氏は、前出の将監塚遺跡のほか深谷市（旧川本町）上本田遺跡、深谷市出口遺跡からの出土をあげ、いずれも加曾利 E 式期に営まれた拠点的な大規模集落であり、比較的近接するこれら各集落間の関係が注意されるとし、三角罎形土製品の出土する遺跡の規模に言及した。入間市久保遺跡の発掘調査報告書では斎藤祐司氏が埼玉県以外の千葉県中野僧御堂遺跡、千葉県荒屋敷貝塚、東京都宇津木遺跡、東京都西秋留野遺跡、東京都谷保東方遺跡、神奈川県鶴川遺跡などの出土例もあげ、文様については縄文のみが施文されているものは極めて稀であり、久保遺跡第 5 号住居跡から出土した三角罎形土製品のような両側面を除く全面に縄文のみが施文されているものは関東では他に例を見ないとした。出土遺構については久保遺跡第 5 号住居跡と東京都谷保東方遺跡第 2 号住居跡が敷石住居跡で、宿前Ⅲ遺跡第 2 号住居跡が柄

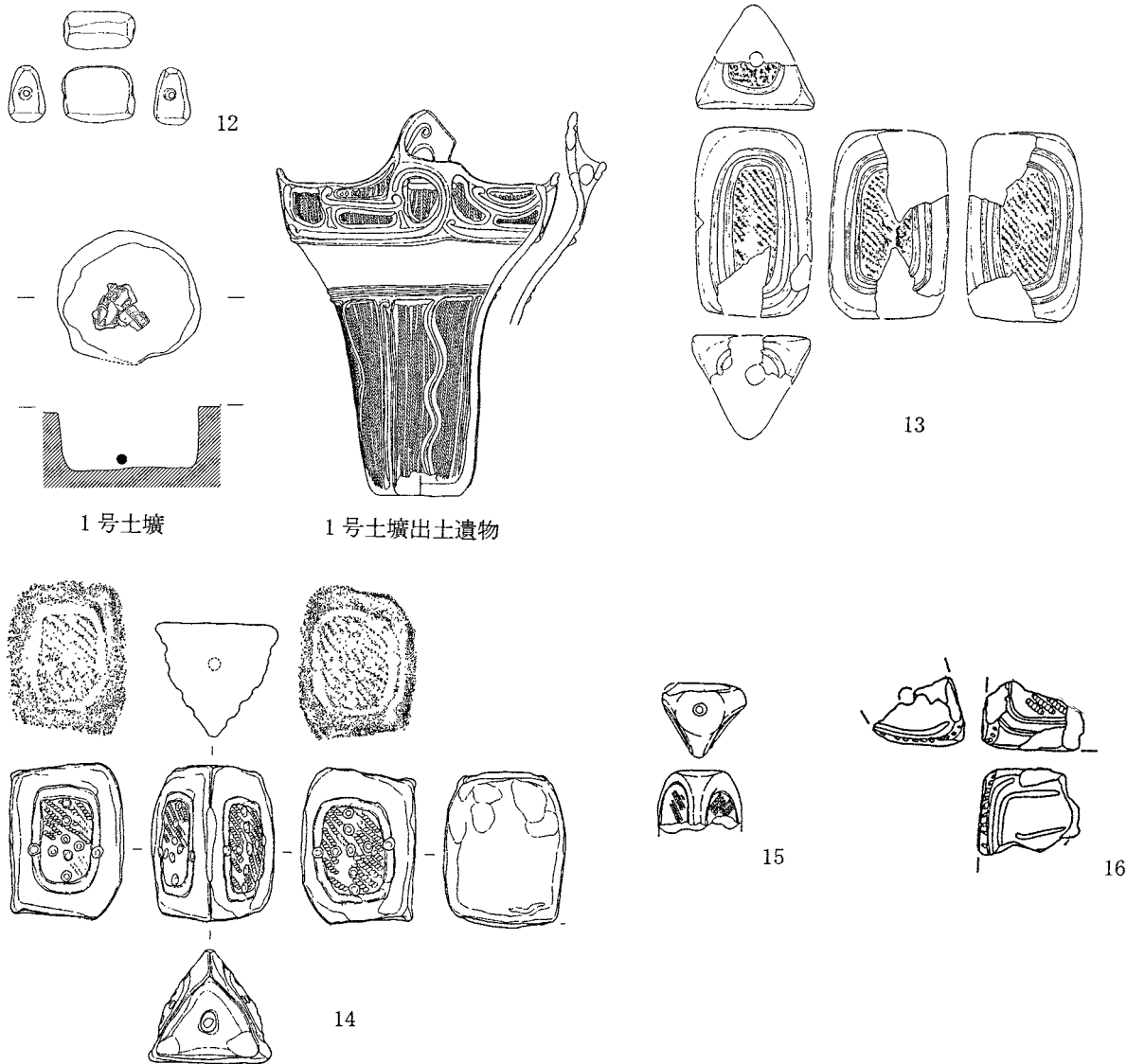
| | 遺跡名 | 出土位置 | 法量 | 時期 | 備考 |
|----|----------------------|-----------|------------------------|--------|---|
| 1 | 新井 (埼玉県皆野町) | 不明 | 長さ8.4cm | 不明 | 正面の2面に楕円形の沈線を施す。断面はほぼ三角形で、中央に孔を穿つ。底面は無文。 |
| 2 | 将監塚遺跡 (埼玉県本庄市) | J-19号住居址 | 不明 | 加曾利EⅢ期 | 正面には重層的な楕円沈線を描いている。断面は三角形を呈する。側面は渦巻沈線を施すと考えられ、重円状となる可能性もある。中心に径0.8cmの孔が貫通している。 |
| 3 | 将監塚遺跡 (埼玉県本庄市) | 13-31グリッド | 長さ8.8cm、幅7.4cm、高さ5.6cm | 不明 | ほぼ完形。正面は重層的な楕円沈線を描く。側面は文様は施さず、上下に緩く湾曲させる。中心には孔が穿たれる。 |
| 4 | 宿前Ⅲ遺跡 (埼玉県上尾市) | 2号住居址 | 長さ11.7cm、幅6.2、5、5.3cm | 称名寺期 | 住居址奥壁部分から出土。角は突出気味で、成型時につまみ出している。各面には沈線が周囲すると思われる、区画内はわずかに凸レンズ状に突出する。孔径0.8cmをはかる。 |
| 5 | 台耕地(I)遺跡 (埼玉県深谷市) | 28号住居址 | 長さ11.7cm、幅7.2、5.7cm | 不明 | 住居址覆土から出土。長方形よりも楕円形に近い。側面も三角形であるが、端が指でひねり出したように突出する。側面の偏った位置に径0.7cmの孔を穿つ。無文。 |
| 6 | 出口遺跡 (埼玉県深谷市) | 表面採集資料 | 長さ8.1cm、幅4.5cm | 不明 | ほぼ完形。正背面は渦状及び放射状に、側面は二重枠線状に列点刺突文が巡る。側面に直径0.5~0.9cmの孔が穿たれる。 |
| 7 | 上本田遺跡 I (埼玉県深谷市) | 4号住居址 | 幅3cm | 加曾利EⅣ期 | 三面に楕円形の沈線が施される。側面は三角形を呈し、中央に径0.4cmの孔が穿たれる。 |
| 8 | 西原遺跡 (埼玉県深谷市) | 68号土壙 | 長さ6.6cm、幅4.3、4.7cm | 加曾利EⅢ期 | 無文で、角がいずれも突出気味である。長軸方向に径0.5cmの孔が穿たれる。第一調査区の北東に纏まる土壙群、墓域の場としての機能が想定される。 |
| 9 | 久保遺跡 (埼玉県入間市) | 5号住居址 | 長さ10.1cm、幅7cm、高さ6.4cm | 加曾利EⅣ期 | 柄鏡形敷石住居址南西部の敷石から床面直上に置かれているように出土。側面を除き、全面にRLの縄文が施文される。側面、稜縁はナデ調整が行われ、中心に孔が穿たれる。 |
| 10 | 加能里遺跡 (埼玉県飯能市) | 6号敷石住居址 | 長さ7.7cm、幅5.2~5.5cm | 加曾利EⅣ期 | 炉付近から出土。正面3面ともLRの縄文が施文されるが、押圧は非常に浅い。側面中心に孔を穿つ。手づくね成形で造形は粗い。 |
| 11 | 西不動遺跡 (埼玉県日高市) | J-1号住居址 | 幅5.8cm | 加曾利EⅢ期 | 住居址覆土から出土。正面2面と底面は地文に縄文を施し周囲に1条の沈線を施している。側面は縄文のみを施文し、中央に径0.9cmの孔を穿つ。 |
| 12 | 向原遺跡 (埼玉県日高市) | 1号土壙 | 長さ3.8cm、幅2cm、高さ2.8cm | 加曾利EⅠ期 | 7次調査区1号土壙から完形で出土。無文。側面は二等辺三角形を呈する。中央に径0.5cmの孔が穿たれる。 |
| 13 | 中谷遺跡 (山梨県大月市) | 6号配石 | 長さ10.3cm、幅5cm | 中期末葉 | 4つに割れて出土。3面に2条の沈線による楕円区画と縄文を施す。側面は1条の沈線による区画文と縄文を施し、中央に孔を穿つ。 |
| 14 | 八反遺跡 (茨城県十王町) | 4号住居址 | 長さ8.6cm、幅6.7cm、高さ6.3cm | 加曾利EⅣ期 | 住居址床面から8~11cmの高さから頂部を北側、底部を南側に向けて出土。正面の2面に沈線による方形区画と縄文が施文され、浅い刺突文を十字に施す。底面は無文。 |
| 15 | 大平台遺跡 (群馬県高崎市) | 遺構外 | 幅4cm | 不明 | 3面の周囲を沈線で長楕円形区画を施し、正面の1面のみに縄文が施される。側面中央に孔が穿たれる。 |
| 16 | 中郷遺跡 (群馬県渋川市) | 2号住居址 | 不明 | 加曾利EⅢ期 | 住居址床面近くから出土。各面周囲に沈線で長楕円形区画を施し、正面内部に縄文が施される。底面は無文。長軸中央に沈線をもつ。側面の稜部に刺突を施し、中央に孔を穿つ。 |

第51図 埼玉県出土・縄文施文の三角罫形土製品

鏡形住居址であるとし、出土位置は久保遺跡と谷保東方遺跡が壁に沿った配石付近から、宿前Ⅲ遺跡でも奥壁部から出土している点など、同様な出土状況を示しているとした。出土状態から使用目的を推察することは難しいが、住居内の中央に置かないという使用方法があるのではないだろうかとしている。これ以降、深谷市西原遺跡の報告で紹介された深谷市出口遺跡(1998)の表面採集資料、深谷市(旧川本町)上本田遺跡 I(2000)4号住居址(加曾利EⅢ期~末葉)出土資料、2015年に飯能市加能里遺跡6号敷石住居址の炉付近から出土した例が報告され、新たな資料の追加となった。本遺跡例を含めて埼玉県内では12例を確認することが出来た。



第52図 三角罫形土製品 (1) (1/4)



第53図 三角罎形土製品 (2) (1/4) 但し、遺構図は (1/40)

文様については、全体が無文や、沈線による区画文、渦巻文や列点文が主体とされ、本遺跡例のように縄文が施文される例は少ないとこれまで報告されてきた。しかし、埼玉県内の久保遺跡、加能里遺跡のほか、群馬県中郷遺跡、大平台遺跡、山梨県中谷遺跡、茨城県八反遺跡からも出土しており、縄文を施文し、沈線で区画する例も関東甲信地方に一定量分布すると思われる。時期については、加曾利E I期の報告もあるが、多くは加曾利E III期から後期初頭とされ、本遺跡例もこの時期となる。出土位置については、調査区一括、表面採集資料も多いが、住居址、土壙、配石遺構から出土している。小島氏は、富山県北代遺跡や石川県笠舞遺跡では住居址の壁際からの出土が報告されていると述べているが、埼玉県宿前Ⅲ遺跡、入間市久保遺跡、東京都谷保東方遺跡、山梨県郷蔵地遺跡でも敷石住居址の壁面付近から出土しており、ひとつの傾向が伺われる。使用方法については呪術的なものと捉え、装身具や置いて使用したなどが指摘されている。現在整理作業中ではあるが、本市向原遺跡土壙出土例は、土壙底面付近から出土した加曾利E I式土器の下層から出土している。墓壙と考えられ、副葬品あるいは装飾品の可能性が高いと考えられる。向原遺跡例は長さ3.8cm、幅2cmと、敷石住居址などから出土する三角罎形土製品よりも小形である。大きさによる使用方法の相違も考えられ、今後の資料の増加に期待したい。

参考文献

- 渡辺忠胤ほか 1978「谷保東方遺跡」国立市文化財調査報告書第5集 国立市教育委員会
- 小林康男 1980「三角壙形土製品考」長野県考古学会誌37 長野県考古学会
- 小島俊彰 1982「三角壙形土製品」『縄文時代の研究』9 雄山閣
- 鈴木敏昭ほか 1983「台耕地（Ⅰ）」関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告XⅥ 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 石塚和則ほか 1986「将監塚－縄文時代－」児玉工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田代 孝 1987「郷蔵地遺跡」－塩川ダム建設に伴う発掘調査報告－山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第31集 山梨県埋蔵文化財センター
- 田代 孝 1987「山梨県の三角壙形土製品」山梨県埋蔵文化財センター研究紀要3 山梨県埋蔵文化財センター
- 小宮山克己 1995「宿前Ⅲ遺跡」上尾市遺跡調査会調査報告書第14集 上尾市遺跡調査会
- 小林謙一ほか 1995「シンポジウム縄文中期集落研究の地平」縄文中期集落研究グループ 宇津木台地区考古学研究会
- 斉藤祐司 1996「久保遺跡 第3次調査」入間市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告第18集 埼玉県入間市遺跡調査会
- 森田安彦ほか 1996「千代遺跡群－縄文時代編－」埼玉県江南町千代遺跡群発掘調査報告書1 江南町教育委員会・江南町千代遺跡群発掘調査会
- 長沢宏昌ほか 1996「中谷遺跡」山梨リニア実験線建設に伴う発掘調査報告書 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第116集 山梨県埋蔵文化財センター
- 片平雅俊 1997「十王町八反遺跡発掘調査報告書」茨城県多賀郡十王町文化財調査報告書第5集 十王町教育委員会
- 古池晋禄 1998「上唐沢地区遺跡群 出口遺跡（第1次）、萱場松原遺跡（第3次）、新田遺跡（第1～3次）、新田裏遺跡（第1次）、田尻遺跡（第1次）、山根遺跡（第1次）、前原遺跡（遺構確認調査）」埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第54集 深谷市教育委員会
- 村松 篤 2000「上本田遺跡Ⅰ」川本町遺跡調査会報告書第5集 川本町遺跡調査会
- 綿田弘実ほか 2013「中野市千田遺跡」千曲川替佐・柳沢築堤事業関連埋蔵文化財発掘調査報告－中野市その1－ 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書98
- 熊澤孝之ほか 2015「加能里遺跡 第41次調査」飯能の遺跡（42）飯能市内遺跡発掘調査報告書19 飯能市教育委員会
- 田中浩江ほか 2016「滝ノ上遺跡Ⅳ」畑地帯総合整備事業三美地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書6 常陸大宮市教育委員会
- 小林謙一ほか 2016「シンポジウム縄文研究の地平2016」縄文研究の地平グループ セツルメント研究会
- 谷藤保彦 2017「群馬県出土の三角壙形土製品」二十一世紀考古学の現在 山本暉久先生古希記念論集
- 石塚和則ほか 2017「稲荷上遺跡6次調査」狭山市遺跡調査会報告書第26集 狭山市遺跡調査会



1次調査区全景



三角壩形土製品出土状況



J-1号住居址



J-1号住居址 炉



J-2号住居址



J-2号住居址 炉



J-3号住居址



J-3号住居址 炉

图版2



J - 4号住居址



J - 4号住居址 炉



J - 5号住居址



J - 5号住居址 炉



J - 6号住居址



J - 6号住居址 炉



J - 7号住居址



J - 7号住居址 炉



1号縦穴状遺構



H-1号住居址



H-1号住居址カマド



1号埋甕



2号埋甕



3号埋甕



4号埋甕



5号埋甕

图版4



1号土坑



2号土坑



3号土坑



4号土坑



5号土坑



6号土坑



7号土坑



8号土坑



1次調査区遺構外出土遺物



J-1号住居址出土遺物(1)

图版6



J - 1 号住居址出土遺物 (2)



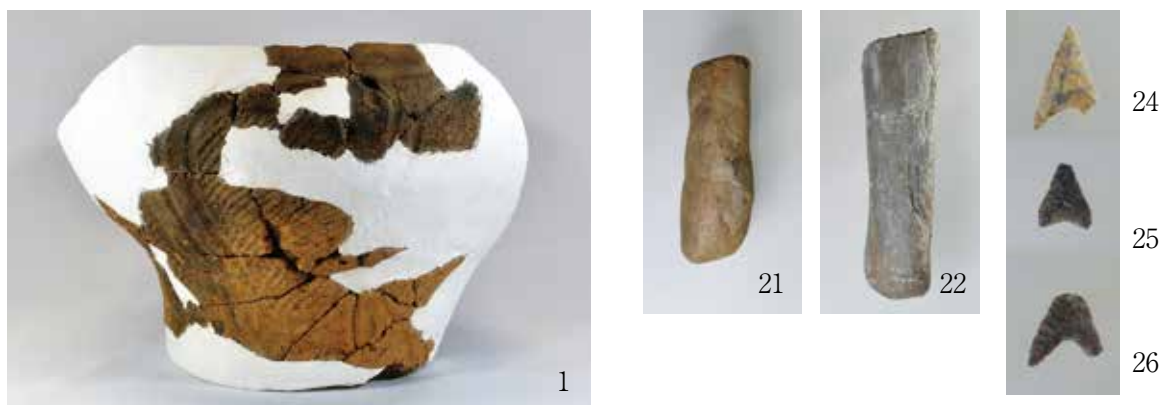
J - 2 号住居址出土遺物



J - 3 号住居址出土遺物



J - 4号住居址出土遺物



J - 5号住居址出土遺物



J - 6号住居址出土遺物



1号竖穴状遺構出土遺物



1号埋甕出土遺物



2号埋甕出土遺物



3号埋甕出土遺物



4号埋甕出土遺物



5号埋甕出土遺物



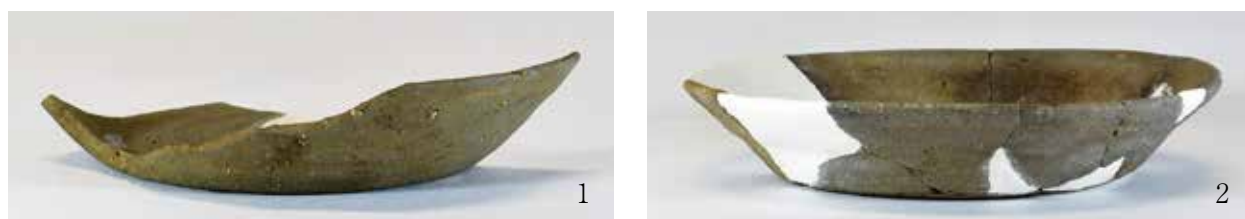
2号土壙出土遺物



3号土壙出土遺物



5号土壙出土遺物



H-1号住居址出土遺物

图版10



2次調査区全景



9号土壙遺物出土状況



9号土壙



2調査区遺構外出土遺物



9号土壙出土遺物

報 告 書 抄 録

| ふりがな | にしふどう にしふどう | | | | | | | |
|--------------------------|---|--------------------------|------|---|--------------------|---|-------------|----------------------|
| 書名 | 西不動 - 1次調査 - 西不動 - 2次調査 - | | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 日高市埋蔵文化財調査報告 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第38集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 松本尚也 | | | | | | | |
| 編集機関 | 日高市遺跡調査会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒350-1292 埼玉県日高市大字南平沢1020 TEL042-989-2111 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2019年2月28日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 (° ' ") | 東経 (° ' ") | 調査期間 | 調査面積 (㎡) | 調査原因 |
| | | 市町村番号 | 遺跡番号 | | | | | |
| にしふどう 西不動遺跡 | さいたまけんひだかし 埼玉県日高市 おおあざたかはぎ 大字高萩 あざにしふどう 字西不動 | 242 | 138 | 35度 54分 14秒 | 139度 23分 05秒 | 2015,12,03~ 2016,02,22 | 1,212 | 社会福祉 施設建設 |
| にしふどう 西不動遺跡 | さいたまけんひだかし 埼玉県日高市 おおあざたかはぎ 大字高萩 あざにしふどう 字西不動 | 242 | 138 | 35度 54分 14秒 | 139度 23分 05秒 | 2017,07,10 ~ 2017,07,20 | 940 | 社会福祉 施設建設 |
| 所収遺跡 | 種別 | 主な時代 | | 主な遺構 | | 主な遺物 | | 特記事項 |
| にしふどう 西不動遺跡 (1次調査) | 集落跡 | 縄文時代 中期後半 奈良時代 | | 住居址 7 軒 竪穴状遺構 1 基 埋甕 5 基 土壇 8 基 住居址 1 軒 | | 縄文中期後半土器 土製品 石器 須恵器 坏 土師器 坏、甕 | | 三角罫形土製品、 土偶が出土した。 |
| にしふどう 西不動遺跡 (2次調査) | 集落跡 | 縄文時代 中期後半 | | 土壇 1 基 | | 縄文中期後半土器 石器 | | |

日高市埋蔵文化財調査報告書 第38集

西 不 動

－ 1 ・ 2次調査－

| | |
|------------|------------------------------------|
| 発行日 | 平成31年2月28日 |
| 編集兼 発行者 | 日 高 市 遺 跡 調 査 会 |
| 印刷所 | 株 式 会 社 文 化 新 聞 社 |
| 発行所 | 日 高 市 遺 跡 調 査 会 埼玉県日高市大字南平沢1020 |
